279.5
46

始

工3N32
279.5-46

文部省社會教育課
青少年團處女會主任
片岡重助著

青少年の社會教育と青少年團の經營

大正
13. 2. 20
交内

東京日比書院發行

詔書

朕神聖ナル祖宗ノ洪範ヲ紹キ光輝アル國史ノ成跡ニ鑑ミ皇考中興ノ宏謨ヲ繼承シテ肯テ愆ラサラムコトヲ庶幾シ夙夜兢業トシテ治ヲ圖リ幸ニ祖宗ノ神佑ト國民ノ協力トニ賴リ世界空然ノ大戰ニ處シ尙克ク小康ヲ保ツヲ得タリ

奚ソ圖ラム九月一日ノ激震ハ事咄嗟ニ起リ其ノ震動極メテ峻烈ニシテ家屋ノ潰倒男女ノ慘死幾萬ナルヲ知ラス剩ヘ火災四方ニ起リテ炎燄天ニ冲リ京濱其ノ他ノ市邑一夜ニシテ焦土ト化ス此ノ間交通機關杜絕シ爲ニ流言飛語盛ニ傳ハリ人心恟々トシテ倍々其ノ慘害ヲ大ナラシム之ヲ安政當時ノ震災ニ較フレハ寧ロ凄愴ナルヲ想知セシム

朕深ク自ラ戒愼シテ已マサルモ惟フニ天災地變ハ人力ヲ以テ豫防

シ難ク只速ニ人事ヲ盡シテ民心ヲ安定スルノ一途アルノミ凡ソ非常ノ秋ニ際シテハ非常ノ果斷ナカルヘカラス若シ夫レ平時ノ條規ニ膠柱シテ活用スルコトヲ悟ラス緩急其ノ宜ヲ失シテ前後ヲ誤リ或ハ個人若ハ一會社ノ利益保障ノ爲ニ多衆災民ノ安固ヲ脅スカ如キアラハ人心動搖シテ抵止スル所ヲ知ラス朕深ク之ヲ憂惕シ既ニ在朝有司ニ命シ臨機救濟ノ道ヲ講セシメ先ツ焦眉ノ急ヲ拯ウテ以テ惠撫慈養ノ實ヲ擧ケント欲ス

抑モ東京ハ帝國ノ首都ニシテ政治經濟ノ樞軸トナリ國民文化ノ源泉トナリテ民衆一般ノ瞻仰スル所ナリ一朝不慮ノ災害ニ罹リテ今ヤ其ノ舊形ヲ留メスト雖依然トシテ我國都タルノ位置ヲ失ハス是ヲ以テ其ノ善後策ハ獨リ舊態ヲ回復スルニ止マラス進ンテ將來ノ發展ヲ圖リ以テ巷衢ノ面目ヲ新ニセサルヘカラス惟フニ我忠良ナル國民ハ義勇奉公朕ト共ニ其ノ慶ニ賴ラムコトヲ切望スヘシ之ヲ慮リテ朕ハ宰臣ニ命シ速ニ特殊ノ機關ヲ設定シテ帝都復興ノ事ヲ審議調査セシメ其ノ成案ハ或ハ之ヲ至高顧問ノ府ニ諮ヒ或ハ之ヲ立法ノ府ニ謀リ籌畫經營萬遺算ナキヲ期セムトス在朝有司能ク朕カ心ヲ心トシ迅ニ災民ノ救護ニ從事シ嚴ニ流言ヲ禁遏シ民心ヲ安定シ一般國民亦能ク政府ノ施設ヲ翼ケテ奉公ノ誠悃ヲ致シ以テ興國ノ基ヲ固ムベシ朕前古無比ノ天殃ニ際會シテ邦民ノ心愈〻切ニ寢食爲ニ安カラス爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御名御璽

攝政名

大正十二年九月十二日

令旨

國運進展ノ基礎ハ青年ノ修養ニ須ツコト多シ諸子能ク内外ノ情勢ニ顧ミ恒ニ其ノ本分ヲ盡シ奮勵協力以テ所期ノ目的ヲ達成スルニ勗メムコトヲ望ム

大正九年十一月二十二日

序

余の青年教育に興味を持つやうになつたのは、決して、近來のことではない。未だ、地方の師範學校で學んでゐた頃、青年團などと云つて、世人が騒いでゐなかつた明治三十八九年の頃、青年團體論なる論文を公表したこともあつた。また、自ら、一寒村の青年として、十五六歳の頃、既に鄕土の青年會長となつて、盆踊の改善をやつたり、雄辯會を開いたこともあつた。後ち、農學を駒場に學び、地方の師範學校や農學校の教育に從事する樣になつても、常に青年團などの招聘に應じたり、また自ら幹部講習會を計劃したりしても見た。專ら社會教育の事務に從ふやうになつてから最早數年を經たが、常に、青年の問題から離れることを好まない許りでなく、中央に入つて廣く全國の狀況を知り得るに及んで、愈々益々、青年團及少年團の訓練に興味を有する樣になり、出來得る限りの力を盡くして、其の調査なり研究に當つてゐる。

而して、意外にも、青少年團問題に對する世人の解釋に大なる過誤のあることを發

見したと共に、青少年團の指導は單なる功利的見地から、見てはならないものであつて、少くとも、青少年期の生活價値の尊重に立脚し、其の現在生活を純化し、充實せしめなければならぬと云ふ主義の上に、立たなければならぬと確信するに至つた。各地の青年團幹部講習會などに望んで、特に、此の感を強うするに至り、最近には、余の說に贊意を表するものも多數表はれるやうになつたことを喜んでゐる。

かう云ふ譯で此の書の著述も思ひ立つやうになつたのであるが、地方の實際家から施設經營上の資料を得たいと云ふ希望もあり、論旨を害せぬ限り之を挿入することとした。

本書編述に當り、今少しく精練を要すと認めた點も少くなかつたのであるが、或る意味に於て、世人の批評を待つために、强ひて英斷な私案を提供した所もある。希くば此の意味に於て讀者各位の指示を賜はらんことを。

大正三年一月

小石川の寓に於て　著者しるす

青少年の社會教育と

青少年團の經營　目次

緒言……一

第一篇　青少年期……一

第一章　人生の行旅……一

生きんとする努力……九　自己否定……一〇　理想と現實……一二　敬虔的生活……一三

第二章　生存より生活へ……一三

生存とは……一三

第三章　青少年期の生活價値……一四

人生各期……一五　未來と現在……一六　子供は大人の準備時代ではない……一七

青少年期の生活價値……一九

第四章　青少年の社會的職分……二〇

目次

青少年の社會的地位……二　青少年の社會的職分……三　社會の清涼劑……三四

第五章　青年期の生活充實……二四

生活の缺陷……二五　科學的生活……二七　精神的生活……二七　宗教的生活……二八

理想と現實……三二

第六章　青少年の教育……三二

教育の機會均等……三三　教育の缺陷……三四　青少年の軍事教育……三五　青少年の職業教育……三七

第七章　青少年期の生理的發達……三八

生理的發達の階段……三九　青少年期の生理的發達の特點……四〇

第八章　青少年の心理……四二

少年期の心理……四四　少年團教育の心理的基礎……四六　青年期の心理……五四

青年期の感情……青年期の意志……六三

第九章　現代青少年の思想……六九

青少年の思想的矛盾……七〇　思想的變化期……七二　現代青少年の思想的傾向……七五

兒童生徒の思想及び訓練に關する調査……七五　綠農思想……八〇

第十章　修養とは何ぞや……八二

修養の意義……八二　修養の方法……八四

第二篇　青少年の社會的教育……八六

第十一章　個人生活より社會生活へ……八六

家庭と社會……八八　社會生活……九一

第十二章　青少年の社會教育的機關……九四

學校教育と青少年の訓練……九六　社會教育的機關……九九

第十三章　青少年の團體的訓練……一〇一

團體訓練の必要……一〇三　青少年團體……一〇六　團體訓練の目的……一〇七

第十四章　青少年の階級的訓練……一〇八

青少年の階級……一一〇

第十五章　青年團と少年團……一一四

第三篇　青少年團の沿革……一一七

第十六章　維新前の青少年團……一一七

第十七章　健兒社……一二一

健兒社の沿革……一二六　綱領と方針……一二八　階級と訓練……一三五　訓練の實際……一三五　健兒生活の長短所……一四四　健兒社とボーイスカウト……一五　鹿兒島以外の健兒社と武士階級以外の少年訓練……一四六　今の學舍……一四七

第十八章　明治時代の青年團體……一四九

第十九章　現今の青年團體……一五一

第二十章　國家と青少年團……一五四

第四篇　青少年團の目的……一五八

第二十一章　青少年團の發達より見たる目的……一五八

第二十二章　現今青少年團の缺陷……一六〇

御題目主義……一六〇　功利主義……一六二　感激主義……一六三

第二十三章　新時代の青年團……一六四

青少年團は如何なる目的を以て生まる可きか……一六四　青年生活の充實……一六四　本能の理性化……一六六

第五篇　青少年團體の組織……一七〇

第二十四章　團員の年齢範圍……一七〇

最低年齢……一七一　最高年齢……一七二　現在の狀態　一七三

第二十五章　幹部……一七四

指導者と幹部……一七七　幹部組織……一七七

第二十六章　設置區域……一八一

團體の大さ……一八四　設置區域の變遷……一八五

第二十七章　系統的組織……一八五

第二十八章　特殊なる組織……一八九

第二十九章　名稱……一九〇
第三十章　青少年團の聯明機關……一九一
財團法人日本青年館……一九二　大日本聯合青年團規約……一九八　青少年團日本聯盟規約……二〇一　東京市聯合青年團規約……二〇二　各區青年團規約（東京市）……二〇六

第六篇　青少年團の訓練施設

第三十一章　智的教養……二一一
智的教養……二一四　智的教養の施設……二一九
第一節　講習會講話會……二二〇
講習會の目的……二二〇　科目……二二二　講師……二二五　幹部講習……二二七　全國青年團幹部養成施設概況調の一……二二九　青年團幹部講習會狀況……二三六　青年團幹部養成施設概況の二（見學旅行等）……二四二　青森縣主催中堅青年養成夏期講習會狀況……二四六　講習會時間表……二四九　東京府南多摩郡第五回青年團幹部養成講習會要覽……二五一
第二節　圖書教育……二五八
我國の圖書館……二五九　各圖書館數表……二六〇　圖書館の利用……二六一　青少年圖文庫……二六一　圖書の選擇……二六二　五十圓又は百圓位で出來る青年團及び處女會の文庫……二六四　五十圓位で出來る青年團文庫……二六四　百圓位で出來る青年團文庫……二六六　五十圓位で出來る處女會文庫……二六八　百圓位で出來る處女會文庫……二七〇
少年讀物……二七二　少年書類……二七〇　青少年と雜誌……二八五　中等學校生徒勝讀雜誌一覽表……二八七　青少年と新聞……二九二　讀書會……二九七　座右圖書……二九七
讀書の一般的傾向……二八八　東京市日比谷圖書館……三〇〇　巡回文庫……三〇一
第三節　掲示教育及通信教育……三〇八
掲示教育の注意……三〇八　通信教育の注意……三〇九　掲示通信教育の記錄……三一一
第四節　學力檢定制……三一一
青年團と學力檢定制……三一二
第三十二章　德性涵養……三一五
青少年訓練の主要項目……三一七
第一節　尊皇愛國……三二〇
團體教育……三二二　皇室に對する觀念の養成……三二七　愛國心の養成……三二九

第二節　敬神崇祖……三三一
神社奉仕……三三一　祖先の祭祀……三三　偉人祭……三三四
第三節　宗教心の養成……三三四
第三節　社會道德の養成……三三五
第五節　德性涵養の施設……三三七
第三十三章　職業指導……三三九
青少年團と産業改良……三四〇　青少年團の職業指導上必要な施設項目……三四一　能率の增進……三四八　農村の器械化—農村電化……三五〇　出稼者の教育及保護……三五一
第三十四章　體位向上……三六二
本邦人の壽命……三六四　我國民の平均命數……三六五　死亡率……三六六　職業に依る死亡率……三六七　各國死亡率圖……三六八　疾病……三六九　人口萬に對する結核患者の比例……三七〇　青少年團の體位……三七一　青少年團の體位向上……三七三　青少年に對する體育施設……三七七　少年團の遊戯—青年團と運動體育の種類……三七九　全國青年團の體育……三八二　國民體操……三八六　靜岡縣體育大會要項……三九〇　福岡縣宗像郡田島村青年會體育施設の狀況……四〇一
第三十五章　社會奉仕……四〇七
公共奉仕……四一〇　交通奉仕……四一二　道路面と運搬力……四一四　各種の宣傳……四一五
第三十六章　生活改善……四一七
簡易生活と單純生活……四一八　文化生活……四一九　生活改善と青少年團……四二〇
生活改善と同盟會制約……四二二
第一節　衣服の改善……四二五
本邦衣服の長短所……四二五　服裝改善の方針……四二五
第二節　食物改善……四三〇
本邦食物の長短所……四三〇　收入等級別支出費目比例……四三一　都市民の食物—農民の食物……四三二　農民食物の改善……四三三　酪農の普及……四三四　暴飲暴食と食禮……四三六　食料の調理……四三七
第三節　住居の改善……四三八
住宅の改善方針……四四〇　農村の住宅……四四一　住宅地の選擇……四四四　農村建築

物……四四六　住宅改善の方針……

第四節　社會儀禮の改善……四四七

社交儀禮の現狀—社交儀禮の改善事項—結婚に關する改善事項……四四八　葬儀に關する改善事項……四四九　宴會に關する改善事項……四五〇　贈答に關する改善事項—訪問接客送迎に關する改善事項……四五一　年賀廻禮時候見舞に關する改善事項……四五二

第五節　生活改善と青少年團……四五五

改善事項の調査……四五五　生活改善の研究實行……四五六

第三十七章　社會生活技能の練習……四五七

技能の種類……四五八　技能練習の範圍……四六一

第三十八章　公民的訓練……四六三

少年團と公民教育……四六四　實業補習學校公民科教授要目……四六八　青年團と公民教育……四六五　公民科の內容……四六六　補習實業學校前期修身教授要目—獨逸公民科教授要項……四七四　農村に於ける公民科要目……四八一　都市に於ける公民科要目……四八五　公民科課程案……四八四

第三十九章　趣味と娛樂……四八五

農民美術……四八七　文學及音樂の趣味……四八八　園藝趣味……四八九　娛樂及種類……四九一　全國都會地に喜ばるる娛樂種類と府縣數表……四九五　各府縣の地方地にて喜ばるる娛樂表……四九六　各府縣の都會地にて喜ばるる娛樂表……四九九　娛樂の選擇……五〇一　全國青年團の娛樂……五〇二　活動寫眞……五〇六　文部省推薦映畫……五〇八　ペーセント、盆踊……五一七　青少年團歌……五一八　帝國青年の歌……五一九　鹿島郡青年團應援歌……五二〇　諸縣郡青年團歌……五二一　娛樂會及音樂會……五二七

第四十章　補習教育……五一八

補習學校校數及生徒增加の傾向……五二九

第一節　補習教育の必要及目的……五三〇

第二節　補習教育と青少年團……五三二

第三節　補習學校の規程……五三四

第四節　優良補習學校……五三四

實業補習學校規程改正の要項……五三四　實業補習學校學科課程……五三一　愛知縣橫須賀町立橫須賀實業補習學校學則……五六二

第四十一章　指導教範……五六七

少年團の教範……五六八　進級標準……五六九　少年團の教種……五七〇　少年團訓練法
……總則……六七二　訓練要項……五七三　歐米スカウト訓練の技能種目……五八二
皇道少年團々則及進級標準……五八二

第四十二章　實行要目……六一〇
實行要目の選定……六一〇　現今青年團の實行要目……六一一　全國青年團の實行要目中
主要項目……六一一　熊本縣下益城郡豐福村青年團訓練の實際……六一四

第七篇　青少年團體の經營……六二一

第四十三章　會館……六二三
會館の大きさ……六二四　會館の設備……六二五　會館の管理……六二七

第四十四章　統制……六二九
他の機關との連絡……六三〇　法人の組織……六三五　會合……六三六　帳簿……六三七
表彰及懲罰……六三八

第四十五章　指導者……六四一
指導者の種別……六四二

第四十六章　經費……六五〇
團の會計年度—青少年團の豫算……六五一

第四十七章　施設要覽……六五三
山形縣東村山郡豐田村青年團の施設事業一斑……六六〇

第八篇　青少年團の振興……六六五

第四十八章　國策より見たる青少年團……六六五
法制上の施設……六六七　內務省及文部省訓令及通牒……六六八　內務文部兩次官通牒……六七二　內務省文部省訓令……六七五　主管問題—事業の指導奬勵……六七六　表彰……六七八

第四十九章　地方廳の執るべき振興策……六七八
訓令及設置標準—指導者設置……六七九　府縣主催にて行ふべき事業……六八〇

第五十章　社會上より見たる青少年團……六八一

附一　優良青年團……六八四

目次

附二　選奬實業補習學校……一四
附三　青年團に關する調査（大正十二年）……七〇三

青少年の社會教育と青少年團の經營　目次　終

青少年の社會教育と青少年團の經營

緒言

青年團の問題に關しては、既に先輩諸氏の手になつた名著の少からざるに、余が更に蛇足を加へんとする所以は略本書の序文に於て述べたところであるが、余の見る青年團なるものが從來世間の了解してゐるものとその根柢に於て大なる差異があるといふことを、天下に訴へんとする爲めである。

されば先づ本書の各編各章に於て詳細に述ぶる前にあたつて、青年團とは如何なるものであるかを大體に於て論述する要を認める。

現今の青年團なるものは一種の會合に過ぎない。之を組織あり系統ある一の團體たらしめるには今一段の考慮を要すると云ふことが先づ第一に横はつてゐる問題である。我國の青年團はその發達

は之を歴史的に考察すると頗る古いが、今日の青年團なるものは主として十年以前より發達したところのものである。その創立の當初に當つては官廳なり學校なり或はその他先覺者等によりて先づ企てられたものである。從つてその組織なるものに所謂官僚的の色彩があるといふ世評は必ずしも否定すべきものではない。換言すれば青年團なるものは小學校乃至は一部の先覺者の恩惠的施設であつて、未だ團員を基礎とした眞の自治的修養團體とは稱し得ない。これをして組織あり系統ある團體たらしめることは青年團改造策中の最緊要なるものである。

從來青年團を一の獨立したる團體と見做し過ぎた傾があつた。卽は少年期の者に對してはその團體の必要を認めなくて、青年期に達して初めてこれを認めるといふことがその第一であつて、次に青年期を終つた者に對する團體をも認めなかつたといふことがその第二である。最も町村には在鄕軍人會・戶主會等があつて、青年團を終れる者の教化に當つてゐるとは云へ、之は寧ろ修養といふ點に就ては殆ど沒交渉である。何故に青年期の者に對してのみかゝる團體を奬勵するかといふことに思を致したところの青年は、之を以て青年團を一種の功利主義の立場から純眞なる吾人青年を體よく騙侫するものなりと考へてゐる者も少くない。之にも大なる眞理がある。吾人はこの功利的な立場から去つて眞に意義ある修養團體としての青年團を作らねばならぬものと痛切に考へる。

以上のやうな見地から青年團は假に青少年期の團體と見做しても尙ほ物足らぬ感がする。最も少年期や幼年期の教化は學校乃至は家庭に於て行はれると雖も、彼等は又廣く社會といふ背景のもとに善惡共に影響を受けなければならない。夫故に理論上よりいへば少くも社會生活の第一歩に入れる幼年期時代より發足して團體教化の組織を立てなければならない。もとよりその生理的心理的の發達に基礎を置いたところの教化が與へられなければならない。

故に余は青年團なるものを從來の如き解釋のもとに取扱ふことを欲しない。青少年自體に於ける社會的教育乃至は訓練としての立場から見たい。而してその青少年の發達に應じたる階級的訓練法が與へられなければならないと思ふ。

青年團の目的に就ては後に詳しく述べるところであるが從來はこれを餘り卑近なる點に置いた傾がある。時代は變つてもまだ舊幕時代の若連中と何等の相異はなくて彼等の修養といふ點よりも寧ろ鄕村に於ける公役に從事せしめたり、又は理由もない社會奉仕を强ひたりしてゐる。而してその目的として標榜する所は忠君愛國であり、或は良兵良民であるが、餘りに露骨にして而も前述の如く功利主義である。かゝる點に於ても我等は外國に於ける青少年の教化團體にヒントを得る點が少くない。

從來の青年團なるものは 前述の如く未だ團體として價値を認め難いといふ點からも明かなる如くその組織に於ても何等の基礎を有しない。二百人三百人乃至は千人にも達しようと云ふ大なる團體を有しながら之を十把一束にして一令の下に動かさうとするものも少くない。又その役員組織等に於ても從來の如き權力關係の下に立つて所謂依るべく知らしむべからざる主義をとつてゐる。之をして眞に自治的ならしむるには 如何なる用意を必要とするかも出來得る限り理論的に考慮しなければならない。

次にはその事業とか修養訓練の施設に就ても少くとも從來の型を破らねばならぬ點が多い。夫等の點に就ては後に於て詳しく述べるところであるが、その修養の施設上に就ても指導上の方案に就てもこれに教育的乃至は社會的意義を附與しなければならないと思ふ。從來青年團の修養中單なる感激主義に立脚したものや、乃至は奉仕主義に偏したものや、又は事業本位にかたよつたもの〻如きは、少くも一考を要することゝ思ふ。青年團は特別なる團體ではなくて全人教育でなければならぬ。而してその目的も亦極めて普遍的でなければならぬ。

我國の青年團は以上の見地から考へて見るも社會教育上に於て一種の不具なる發達を遂げたるものと見なければならない。青年團があつても眞に青年の修養の爲めに資することが出來るかどうかといふことは疑はしい次第である。尤も海外に於ける青少年の教化團體も吾人の稱ふるが如き全人教育的の團體としては完全なるものではないが、彼國のものは少くとも、團體員の 自主的に出來たものであつて、團體あつて初めて團員を募集するが如きものではない。我國の青年團は最近その數に於ては長足の進歩を來して今や團員の數三百萬を超えたりと雖も、その實際に徴するときは 彼の英國に於けるボーイスカウトが二十餘年の歴史を有しながら僅かに二十萬前後の團員を有するに過ぎないものと比較して、果して何れが優れたりやを判斷するに苦しましむるものである。

我國の青年團がかくの如き形式的の發達を遂げたといふことは 一面に於て喜ぶべき現象であるが又一面に於ては如何にその模倣的國民性を曝露せるかを悲しまねばならぬ。さればにや地方青年團の爲せる事業を見るに吾人をして眉を顰めしめるものがある。先輩の立てたる指導標は石を以て作られてゐるが、春風秋雨幾十年苔むして叢の中に埋れて顧みられない。その前に薄つぺらな板を以て三角や四角に組合はされた十字架の樣な指導標が吾が物顔に立つてゐる。けれどもその指導標は時に惡戯者から方向を轉換されて西が東になり、北が南になつてゐる。如何にその青年團なるものの事業が思想的にも根據がないかといふことを顯はしてゐるもの〻如く見えるではないか。之は敢て余の感想ばかりでなく最近讀んだ外國の雜誌に迄も御叮嚀に紹介せられてゐる。かゝる例を擧げ

ると殆ど際限がない。

頃者余は九州の地に遊んで親しく鄉村の青年諸子と語り明したことがある。その際一青年は感想を述べて曰く

「余は模範青年團と稱する某縣青年團を視察した。その施設事業に就て學ぶべきところを發見せんとして遂に失望せざるを得なかつた。それは余の屬する青年團と總ての點に於て殆ど一致せるが故である。彼は修養施設として補習教育をやり、その就學出席が共に一〇〇%に近からんとしてゐるが、吾青年團も亦これに劣らない。彼は社會奉仕として道路修繕を行ひ、指導標を建設し、行路病者を救ひ、又近時は時の宣傳の爲めに村々に時計を備へ付けてゐる。これも亦我が青年團と大なる相違を認めない。曰く何、曰く何と殆ど余は優良なる點を見出して我に應用せんとするところの希望を滿たし得なかつた。唯僅かに異なる點は彼の青年團事務所には青年團員の所在を明かにする地圖を掲げたるのみが吾團と異なつてゐたに過ぎない。あゝ我が青年團は現今の模範青年團たらんとする希望を抱くべきや、或はこれを放擲すべきやの解決に苦しむものである。」

以上の言は現今青年團が如何にその事業の雜多にして所謂お題目主義なるかを發表せるに餘りあるものである。余はこの青年及びその同志に對して

「そは青年團としての僅かに一面に過ぎない。先づ團體としての事業をなす前に、諸子は諸子としての現在生活を充實せりや否やを一考せよ。それだけにても實に意義ある試みでなくてはならぬ。青年團が青年個人の生活に迄喰ひ入つて行かなければ百の施設も何等の價値を認めることが出來ない云々。」

と答へた。

青年團は團體教育であると云つてもその基礎は矢張青少年の個性尊重に置かなければならぬことは云ふまでもないところである。然るに從來の青年團關係者は未だその點迄考慮を拂へるものがないといつてもよい。

吾人は以上の如き見地より青年團の經營を攻究せんとするものである。從つて廣い意味に於ては青少年の社會的教育と稱するも可なりであつて、唯單に從來の如き解釋に基く青年團を以てその目標とするのではない。從つて或る場合に於ては學校教育の內容にまで及び、又家庭の改善乃至は社會の改善にまで及ばなければならない。換言すれば將來の青少年の社會教育として廣き意味に於てその團體教化を研究せんとするものである。併しながら青年團なる語は既に業に相當の歷史と親しみを有するが故に假に之を以て、その主たる目標として採用する。

第一篇　青少年期

第一章　人生の行旅

人生なるもの〻解釋やその哲學的考察に至つては本書の本領とするところでない。併しながら凡ての教育上の問題を考究するに當つて、その基調を人生問題に置かないものは、或はその主義に於て或はその目的に於て卑近にして何等の權威を認め難いものとなるであらう。青少年團の訓練も亦之に基礎を置かなければならぬことはいふまでもないところである。

近代思潮は架空的なる人生問題を排除して最も切實なる生命問題に觸れんとしてゐる。徒らに人生なるものを客觀視して或は之を傳統的な道德觀や國家觀乃至は社會觀から見るものは少なくなつて來た。尤もそれが爲に國家、社會の道德觀と相容れない思潮と見る程度の皮層の思想ではない。寧ろ社會と密接なる自我なるものを想定して、而して自己の生命問題に觸れんとする考へである。

かくの如き考から凡ての教化的施設も寧ろ人生觀としては個性の充實發展に基礎を置かなければ

大いなる權威を有しないやうになつて來た。併しながらこれは單に利己主義乃至は個人主義と見るべきでなく、社會卽自己といふ觀念の下に立脚した人生觀に基礎を置いてゐるのである。

生きんとする努力

生物が自己の生命を保持せんとする努力は甚だ强烈なるものであつて、寧ろ生物の本質である。生きんとする努力を捨てたるものは既に生物としての價値を有しないものと見なければならない。心ない山野の一木一草といへどもその如何に害物に抵抗して自己を擴張し自己を保存せんとするに努めてゐるかと云ふことは之を例示する迄もなく、吾人の了解するところである。若し萬物が凡てその本能の儘に生長發展し得る條件が與へられたならば、地上といふ地上は瞬時に於て生物を以て埋められて終ふであらう。併しながら天は之に二の相反したる矛盾を許してゐる。一は生物の限りなき擴張の性(卽ち人間にありては欲望の如き)と、一は自然界に於けるその不足とである。それ故生物はその本性を全くするには格段なる努力をなして、而して或る場合には他を極力排斥せざるを得ない。野外に於ける動物や植物がその如何に時々刻々として自己の勢力を張らんとし、努力して、他物を壓服せるかの事實を見ることが出來るのである。これは人間相互の間に於ける鬪爭の事實が、その形式に於ては時代と共に異なりと雖も、遂に停止して所謂詩人の夢むるが如き理想鄕(ユートピア)を地上に現出し得ざること〻同樣である。

人生は畢竟この闘争の中に旅立てる一行人に過ぎないのである。さればその人生の行路に對して或は達觀したる超人間的の生涯を送つてゐるものもある。畢竟その間に介在せる幾多のタイプを見出すことが出來る。錢奴の生涯を送つてゐるものもある。併しながら吾人は全く超自然的の生活や厭世的生涯を嘆美するものではない。我國人は由來人生問題に對して寧ろこのタイプに在るを以てその最上としたるかの如き道德觀がないでもなかつた。彼の自殺の如きはこれを西洋流に解釋すれば如何なる場合と雖もこれを以て罪惡なりと考へられ、乃木將軍の如き死も亦これを日本人の如き感想の下には到底了解し得ざるところである。寧ろ生に對する執着心は如何なる點より見るもこれを以て最大要件とする考が彼等の中には行はれてゐるのであつて、彼の大罪惡を犯して人として社會に立ち難きまでに至つた者と雖も寧ろこれを保存して第二の善生涯を作り出すといふことが人として將に執るべき態度であると考へられてゐる。この考は到底日本人たる吾々に於ては無條件に了解さるべきものでもないが、又一面に於ては人生問題として餘程考慮を拂ふべきところの價値があると思はれる。

自己否定　吾人の生涯中には自己の過失より又はその本性より起つたところの色々の罪惡や蹉跌があつて而して過去及現在の自己を否定すると云ふが如き場合に遭遇することが多いのである。

寧ろ人生はその波瀾の多きことが或る意味に於ては有意義であるし、又避くべからざる世相である。この際に起る自己を沒して未來に生きんとするが如き考は、これを宗教的に見ればそれ自身價値のある樣に思はれないでもないが、又少くも現在といふ立場から考へて見れば自己に忠實なるものとは云へないのである。前にも述べた如く人生は畢竟絶えざる欲望と限りある不足の中に彷徨してそこに永遠の生命を見出さんとする努力に過ぎないのであつて、有爲轉變は世の常である。然らばこれを達觀視して現在より將來に生きんとする不斷の努力こそ人生をして意義あらしむるものであつて過去や乃至は現在の經驗にのみ握捉するは人としての本領ではないと考へることが寧ろよい生き方であらうと思はれる。西洋の諺にも失敗の中には八分の成功ありと稱せらるゝことがある。亦この間の眞理を語るものであつて、結果をのみ見て之に捉はれると云ふことは愚人の見る成功觀である。ところが我國人は多くの場合この僻見を有して居つて單なる結果のみを見て自己を否定せんとする者乃至はその代償に天與の生命を擲げ出すといふことを以て寧ろ大なる道德觀と見做してゐる。或る場合に於ては所謂匹夫匹婦の諒にも自己の生命を絶ち尙ほ對者の生命をも斷つ所謂心中者をも謳歌せんとする傾があり、又大罪を犯したる懺悔の死の如きを以てこの上もなき純美の行爲と認めて居るかの如き傾きがある。かゝる點に就ては少くも永遠の自己といふ點から考へて見ても大

なる思想的革命を要することゝ思ふ。

理想と現實　理想と現實とは多くの場合に於て矛盾を來すべき素質を有してゐる。併しながらそは單に表面より見たる場合であつて、これを廣き人生觀乃至は哲學觀より見ればそこに矛盾も撞着も見出すことが出來得ないのである。しかもこれを卑近なる人生觀より見れば又已むを得ざる現象であつて、吾人人生の幾變遷はこの色彩りに依つて幾多の描寫が出來るのである。多くの青年や乃至は處女はその所謂思想的變化期に於て純なる狀態より現實の社會に移つた時、事々にその矛盾に遭遇して人生を悲觀し、或は思想的に理想と現實との間に妥協を試みんとするものが多いのである。寧ろ悲觀や煩悶の中にある間は尙ほ可なりであるが、妥協の生活に入つたものは救濟することが困難であつて所謂「グーダラ」な人生を送るところの第一歩に這入つたものである。吾人は理想に生きんとする努力と共に又現實を理想化せんとする力の生活を創造して人生問題を解決せんことを希望するものである。

敬虔的生活　現實生活をして理想化せんとする試は人生問題として誠に切實なるものであつてその爲には所謂物質的生活とか底止することなき欲望の生活から脫却して玆に敬虔的生活に入ることを要求して止まない。近世文化の特徵はその科學的發達に依つて所謂妍爛たる文明を現出したのであるが又一面には愈々人生をして握捉たる焦燥の世界を現出せしめ、餘裕のない人生を表現せしめたのである。

第二章　生存より生活へ

余は別に生存より生活へなる書を著して主として農村及び農民をして現時の生活を改善向上せしめんとする考を天下に訴へる考である。現時の人生問題は前章にも述べたるが如く人類の生存に基礎を置いて而してその生活への道を拓くにあるものと斷定して憚らない。

生存とは　人間のみが他の生物より擢でゝその生命價値の高いものであり又所謂萬物の靈長であると云ふ特權を有してゐるとは本質的には解釋し得ないのである。耶蘇敎に於ても尙人間の價値を過大視して人類以外の生物は人類の爲にその生殺與奪の運命に置かれてゐると云ふやうに考へて是等を利用すると云ふことは人類の自由であるが、唯これを無益に殺生すると云ふことを罪惡であると云ふ樣な都合良い道德觀で滿足してゐる。これは眞に生物なるものゝ平等と云ふ立場より考へて見れば甚だ得手勝手な觀念であるが、又已むを得ない事實として認めなければならない。しかし

ながら吾人は人類相互の場合に於ては飽くまでその人格の平等と云ふ點に人生の基調を置かなければならぬと云ふことは、必ずしも社會主義や無政府主義者の如き、所謂現狀破壞の後建設せんとする危險なる思想に加擔するまでもなく、承認せざるを得ざる一大倫理思想であることは思はれるのである。

人間は單に生命がその個體として持續してゐると云ふ事實即ち生存せりと云ふ丈けのものではない。その生存をして意義あらしめ所謂力强く生きると云ふ點にまで進まなければならない。それが今日叫ばれてゐる生活であつて力强くと云ふことを更に解釋すれば正しく生きると云ふ事も含まれて居つて又その生存の意識の明瞭にして永遠への人生に統合さるべき形式を備へてゐると云ふことを要求するのである。生存と云ふ意義より云へば動植物の如きものも又人類と何等の選ぶ所もないが、生活なる語に依つて是等と人類との間に大なる相違を來すに至るのである。併しながらまだ人間としても生存より生活への階梯を踏み得ざる者も少くない。

第三章　青少年期の生活價値

青少年期は人生の春であり又花であると稱せられては居るが未だこの言葉を眞實に味ふことは困難である。唯これを詩的に考へたり或は現在の社會觀又は道德觀から考へたものであつて、眞にその春であり花であると云ふことを青少年自身の誇りとして考へしめるやうな權威を有しなかつたのである。殊に東洋の道德はその何れより見るも多くは所謂功利的の立場から考へられたものであつて權力本位乃至は成人本位の道德に過ぎなかつたのである。婦人の問題に對してはこれと同樣に男子本位に考へられたものであつて所謂二十世紀の教育上のモットーたる婦人及び兒童の世紀と云ふ思想から餘程遠ざかつてゐる傾が少くない。余がこの考に對して青少年期の生活價値なる一章を設けてその所見を述べんとするはこの間の要求に基くものである。

人生の各期

人生が如何なるものであるかは別問題として兎に角その存在の事實であると云ふことを認識しなければならぬ。これをその生命の存續より見れば或は無限とも考へられないことはないが、個體としての生命は殆ど吾人の經驗より見て有限とも解釋されるものである。有限の人生は大なる吾の一部分であるかどうかと云ふことも考へなければならないが、少くとも吾々の意識としてはこれを限りある期間に就て考察することが出來るものである。人生は古來我國では五十年と喩へてゐる。浪花節の文句にも「人生僅か五十年二十五年は寢て暮らす」と云つてゐるが如く五十

年を以てその常命とあきらめて古稀の齢を保つことを以て寧ろ破格の人生と考へてゐるのである。之れを數字の上より調べて見ても我國民の壽命は僅かに三十一二年であつて、之を歐米各國に較ぶれば凡そ十年の差があるのである。併しながらこの平均命數であつて、既に一定の年齢に達した者の壽命と云ふものはこの平均命數よりも昇つて來るものである。けれどもこれを時の無限なるに較ぶればその二十年三十年の長短なるものは必ずしも論ずるに足らないのである。蜉蝣の一生も亦無限のタイムに對しては百年の命と云ふもその比例に於て差異はないと見なければならない。

かくして人生は所謂盥より生れて盥に入る五十年が幾個かの期間に分れるのである。心理學者は之を分つて幼兒期・少年期・青年期・壯年期・老年期・老衰期等に分つてゐるものもあつて紅顏の美少年も亦白髮の老翁となることは數十年の間に起る現象である。かくして地球上には幾千百億かの人類が興亡し來つたのである。而して東洋の道德に於てはこの人生を見るに一貫せる生活價値を認識しないで、その最も旺なる壯年期を本位として見た樣な傾があつて、他の期間はこの期の爲に附屬するものであるかの如く考へてゐたのである。

未來と現在

佛教の思想に於ては未來に價値を置くことが甚だ重かつた樣である。最もその現在の立場を全然沒却したのではないが、現在は所謂罪業の世の中であつて、又無常の世紀である。永遠の生命を得るのは未來に存するものとして寧ろ人生を否定せんとする思想であると云ふことを否む譯には行かない。佛教思想許りではなく東洋の道德や哲學に於ても亦現在の價値を無視した傾がある。唯佛教の如く現世と未來と云ふやうに劃然たる區別を立てないで現世に於ても時間的に考へたる未來に重きを置いたのである。卽ち立志とか成功と云ふ考が卽ち是であつて又將來に樂しみを得んとして現在の努力や苦心を强ひんとする道德觀も是に基くのである。從つて動もすればその生活が空粗になつて架空的の未來に生きんとする傾を生じて來たのである。これは既に述べた所であるが、吾人はこの點に就て多少の疑問を抱くと共に青少年の教化に當る者の須らく再思三考を要する條件であらうと思ふ。

子供は大人の準備時代ではない

從來は以上述べたやうな思想からその子供の時代は殆ど大人の準備時代であり、又或る意味に於てはその踏臺であると云ふ風に考へ、而して成人としての成功を爲さんとするにはこの時代に於て奮鬪努力をなし修養鍛練をなさなければならないと考へられたのである。これは如何に考へて見ても青少年としては了解の出來なかつた問題であつて、幾多の所謂英雄豪傑も常に考へさせられた問題であつた。彼等は寧ろ自己によつて創造せんとする努力をな

し來つたのである。成人の加へたる教化や訓練は或る意味に於ては彼等をしてその驥足を伸ばさしむる上に於て害があつたと考へられる。彼等はこれに對する反抗的の行動によつて自己を創造したるものと見ることも出來るのである。近代の思想として子供は大人を小さくしたものでもなく、又その準備時代でもないと云ふことは如何に青少年をして滿足せしめ、自ら自己を見つむるの態度をあらはし來らしめたかと云ふことは、少しく現今青少年の實際を識る者の思考するに難からないところであらう。

實に少年期は少年期としてそこに大なる生活の價値を存するものであり、青年期は又青年期として到底捨つべからざる人生の價値があると云ふことは共に犯すべからざる一大眞理であらねばならぬ。我國の少年や青年が如何にもセ、コマシイ、勿體ぶつた、大人びたものであつて所謂子供らしい子供、青年らしい青年と云ふものは見出すことは出來なくて、彼等は動もすれば一足飛びに偉人や傑士の眞似をしたがつたり或は又反對に先輩や成人の非行を誹謗して顧みない者が少くないのは少くも青少年期の生活價値を認識しないと云ふ點から來たものであらうと思ふ。青少年問題が頻りに論ぜられて國家を護る者も社會を改善する者も吾人青年であると豪語せる者が少くなく、又これを指導する先覺者と稱する者も斯く稱へてゐるが、靜かに彼等の生活殊に思想的生活に想到するときはこの聲の洵に力なきを知るであらう。

余は青少年の教育の基調として先づ青少年自身の社會的地位を承認すると共に彼等をして靜かにその現在を考へしめその期間の價値を認識せしめて人生に重要なる意義を附加すると云ふことに努めたいと思ふのである。

少青年期の生活價値　價値の上から見れば少年期も青年期も壯年期に對して何等の差違はない。唯その生活の形式に於て差あるのみである。然るに從來この兩者を混同して形式の差異が直ちに價値の差異と考へたり、又價値を本質以外に求めんとする誤りが少くなかつた。青少年の生活はその形式に於ては成人のそれと格別の差異があると云ふことは已むを得ないことであつて又それが當然である。子供を大人のやうな道德や乃至は規則や法律を以て律しようとすることの無理であることは云ふまでもないことであつて、法律に於ては明かに是を明文の上にあらはしてゐるが、道德に於ては動もすればこれを混同する傾がないでもない。

惡戲盛りの子供の行爲はこれを成人の道德觀から見れば慘忍であり酷薄でありそして又規律も統制もなく單なる惡戲に過ぎないと思はれるが、彼等兒童より見ればそれが立派なる一つの理想鄕であつて、又最も充實したる生活の樣式である。併しながら吾人は彼の自然放任を以て人間教育の本

旨とは考へないが、その教育の基調をこゝに置いて而して自然の流れに從つてこれを理性化して行くと云ふことに努めなければならないと思ふ。

第四章　青少年の社會的職分

社會と云ふ語が吾人の耳に熟して來たことは非常なものであつて、又或る意味に於て思想的の變化を如實に開示してゐるやうである。從來の考へから云へば社會なるものは個人から離れて存在するものゝ如く考へられてならなかつたが、近代の思潮は個人即社會と云ふ觀念の下に包まれるやうな氣分にうたれる。而して自己の向上や發展が他を排して特に擢んでると云ふことに對する所謂立志成功氣分が廣い社會我と云ふものに代つて來てしかも自己否定的乃至は頽廢的の感念から脱却したものゝやうである。從つて人類は單に自己の享樂的氣分から社會と共に享樂しようとするところの狀態をも現出してしかも自己に忠實なることが直ちに社會に忠實なる所以であると云ふ連鎖をも體得するに至つたやうである。これを以て古來の道德觀より批判すると或は元氣がうせ頽敗的氣分が漲つて優柔不斷な氣分を釀したと稱せられないことはないが吾人の見解はこれと大に異にしてゐる。

青少年の社會的地位

青年や少年は部屋住みの身であると云ふ考は未だ止まない。そしてその行藏を一人前として價値なきものと見做したり或は成人の爲めの手助けであると考へてゐる者が少くない、併しながら前章にも述べた如く青少年期は夫自體に於て生活の價値があるのであつて、社會的に又有意義な地位を占めてゐるものである。これは次の二三の例に依つて考へて見るも明かなる所である。その一は兒童期の遊戯や乃至は社會生活は夫自體に於て社會には何等の價値がないやうに思はれるが社會からこれを除外し去つた場合を想像して見れば社會には所謂成人相互の生活に實に於ける利害の衝突や權勢の爭奪によつて彩られたものとなつて所謂生活の妙味なるものが存せないであらう。人類の發達の各「ステージ」に於ける歴史は兒童によつてその原始時代乃至は稍進化したる時代を現出されて所謂人爲的文化の時代に到達するところの原理を示すものであり、又その純眞な自然性を表現するものである。その二はこれを少年の社會に貢獻する事例に徴しても明かである。兒童や少年は或る場合に於ては頽敗せんとする社會の氣風を輓回する力がある。それは必ずしもジヤンダークや又は小楠公の如き代表的少年少女の行爲に徴するまでもなく田園に於ける少年が如何にその職業的に忠實であり、又農村社會生活の補助に與れるかに徴するも明かである。又彼等

の團體的行動によつて直接間接に社會の改善や國家の維持に努めてゐるかと云ふことも考へる必要があらう。その三は青少年が單に文化の繼承に與つて力あるばかりでなくその創造に對して如何に努力せるかを想像しなければならない。畢竟今日の文化は今日の時代に適用さるべきものであつて時の經過と共にその光を失ふべき性質を有してゐる。しかも是を時々刻々として創造して止まない文化たらしめる爲にはこれを青少年の活動にまたなければならない。從來の教育主義は單に現在文化の繼承や傳統的習俗の適應性を得しむる爲のものであつて青少年の爲には一の負擔に過ぎなかつたのである。これを生々發達すべき力たらしむる爲めには彼等の創造的生命を遺憾なく發揚せしめなければならない。

青少年の社會的職分　青年問題が論ぜられるに至つて著しく青年乃至少年の社會的地位を認むるに至つたことは事實であるが、まだこれに伴ふところの職分に就ては明かなるものがない。彼等は單に國家としては忠良なる第二の國民となり、自治體としては健全なる第二公民たりと云ふ考へ以外には出でなくて、少くもその目的は將來に置かれてゐるのである。青年夫れ自體として如何なる點に於て國家社會乃至は家の爲めに分擔を有するかと云ふことに就てはこれを明かにしない。これを仔細に述ぶることは本書の目的ではないが、功利的に見たる職分以外に於て青年乃至は少年の社會に貢獻すべき點を發見することは軈てこの問題を解決する鍵であらうと思ふ。社會の爲めに厄介にならぬ青年と云ふことはやがて又その社會的職分を果すべき要件となるのであらう。それは青少年が社會に奉仕すると云ふ觀念の基本をなすものであつて單なる社會奉仕の作業よりも甚だ肝要なる奉仕である。今日の青年乃至は青年團の爲すところの社會奉仕と稱するものゝ如きは寧ろ青少年の社會的職分に不忠實なるものであつて、社會心の涵養と云ふ點からは離れてゐるものと見られる。併しながら青少年が靜かに養へゝその力によりて而して行爲として顯はれたる奉仕は之を否むべきものではない。

社會的職分の如何なるものであるかはこれを第四篇以下の各章に於て所々に論述すべきも、要するに彼等の有り餘れる力乃至は止むに止まれぬ心意の發露として行はれたる場合にのみこれを意義あるものと見ることが出來るのであつて、徒らに行ふ百千の奉仕作業や社會的貢獻はこれを價値あるものと見做すことを得ない。

社會の清涼劑　少年や青年の純眞なる生活はその儘既に混濁せる社會の清涼劑である。然るに青少年がこれを理智的に考へたり或は感激して行へる行爲は却つて社會を混沌の中に導くものと見なければならない。斯かる意味に於て青少年は飽くまでもその純眞なる生活を持續しその操持を固

守して社會の一角に立つて一沫の凉風を送らねばならぬ。徒らに現代を呪つたり先輩をせめると云ふが如きは青年としても既に心靈上の墮落をなしたるものである。

第五章　青少年期の生活充實

生活と云ふことはこれを衣食住の形式及び社交禮儀等の習俗の配合したる所謂生活の形式許りでなく、それに精神的の生活卽ち思想の表現なり或は轉換なりの形式をも措すものである。單なる衣食住の問題も亦これを思想的に見ることが出來、精神的生活と是等の生活とは別種のものではなくて、多くは同一の事實に就て並び起るのである。例へば飯を食ふと云ふことは殆ど習慣的であつて物質的生活の如く考へられ又その目的とか效用も一に身體的生理的の要求に基くものであるが、その食物の嗜好とか或は食禮とか乃至は食物に對してこれを得んとする努力であるとか云ふ點に至ると精神的の生活も加はつて來るのである。

又時に食膳に向つてその食品の由つて來る所以を追懷して農夫の辛勞を思うたり、或は又嘗て自己の貧困なりし時代と現在とを比較して感謝の念を以て食物を攝ると云ふが如き狀態にあるときは之も亦精神的生活の部面があらはれて來るのである。之に反して精神的生活も或る意味に於ては物質的生活が之に伴ふと云ふことは之を例示するまでもないところである。

生活の缺陷

吾人の生活は前述の如く各種の事實や形式の配合であつて所謂時々刻々變轉して止まないものである。卽ち朝起きて洗面したと思つてゐる中に朝飯を喫すると云ふ事實が來る。そしてその前後に新聞を讀む。それから導かれた色々の思索的の生活が始まつて來る。而して次には職業の生活に移つて行くと云ふが如き一々之を述ぶることの出來得ない程一日中に於てもその形式は各種各樣の模樣で織り出されるのである。その心意の狀態から云つても孔子の所謂「行く者は夫れ此の如きか」と嘆ぜられたるが如く流るゝ水のそれの樣に流轉して止まないのは吾人人類の生活である。併しながらその複雜なる生活の中に幾多の不必要なる部分と又無くもがなの部分が存在してゐる。或る場合に於ては寧ろこれあるが爲めに人生をして無意義ならしむる部分もあるのである。是等の部分が多くあれば多い程つまらぬ所謂平凡な人間であつて、少なければ少い程人生としては有意義なるものとなつて來るのである。さうかと云つて一分一秒をも緊張したる生活の連續と云ふことは到底人間としては望むことが出來ない。その本能的生活の部分の如きもそれが眞に必要なる價値を有するならばこれを捨つる譯には行かないのである。超人間的生活や悲觀的生活を爲すもの

が全く人間性と云ふものを離れて思索的の生活にのみ移らうと試むるが如きは到底現實を喜ぶ人間には強ふべからざることである。

併しながら吾人の生活には幾多の缺陷がそこに存在してゐる。その物質的生活に於ては所謂無駄や虚飾の分子が少くなくて惜しむべき人生の時間を譯もなく費してゐる。又その精神的生活に於ては殆ど彼を思ひ此を思ひ、或は煩悶し或は懊惱してその精力を徒消してゐる。斯くの如きは今日の人の最も缺陷とするところであつて、文化の進轉は之に對して各種の方面より救濟せんとする試みがあつて、近代人は之を過去の時代の人に較ぶればその生活の充實と云ふ點から云つても餘程進んで來たのではあるが、一面には世相の複雜にして又激激なる狀態に誘はれて焦燥の中にも幾多生活價値の缺陷を見出すことが出來る。近代人の生活の缺陷は實に此の焦燥的氣分の中に見出されるものであつて、人生を深く見つむることなくして又これを味ふことなくして匆忙の中に送ると云ふ現象である。之は勿論物質的生活の餘裕のないと云ふ點から來るものであるが、又一面精神的生活の上に修錬が加へられなかつたり、又之を試みるの時を有しなかつた點であらう。換言すれば近代人の生活は物質的には相當充實改善されて來たが、精神的には殆ど顧みられなくて所謂機械的生活の分子が少くないやうになつたと云ひ得る。

然らば如何にして青少年期の生活を充實すべきかと云ふ問題は又之を本書の全篇を通じて諸所に述ぶる次第であるが、今次にその重要と認むべき二三の事項に就て述ぶるであらう。

科學的生活　生活上の能率を擧げんとするにはその基礎を科學的の根柢に置かなければならない。食物にしても亦住居にしても乃至は衛生上の事項に就ても現代科學の示すところに依つて合理的に行つて行かなければならない。科學の發達せざりし時代にありては多くの生活は本能的であり乃至は傳統的のものであつて寧ろ物質的の生活に就てはこれを考慮することが人間としては下等のものであつて修養を志すものゝ口にするも潔しとしなかつた。例へば食物に對する嗜好とか或は極端なる場合に於ては身體を保護するとか之を整へるとか云ふことをすれば恰も罪惡の如く思つて寧ろ身體は人間の價値を損する欲望の結晶であると見做して之を鍛錬したり抑壓すると云ふことが人間生活の向上であると稱せられてゐたのである。併しながら今日の生活に於ては是等の事柄であつても科學的に基礎を置いて合理的に然もその生活を改善すると云ふことに努力を拂ふと云ふことは人間向上の最大要件であると見るべきものである。

精神的生活　生活が科學的の基礎に立つと云ふことは衣食住乃至は形式上から見たる社交儀禮等の上に於てその多くを見ることが出來る。即ち精神勞力の功程を高むる所謂精神能率の增進と云

ふことを考へると云ふことも出來るが、寧ろ第二義的のものであつて、物質的生活に對して說く場合に於てはその精神的生活の樣式と云ふことに重きを置くべきである。青少年に對する精神的生活と云ふことがその彼等の時代に於ける發達に相應しなければならぬことは第八章に於て述べるところであるが、動もすれば此の時代の者は精神的生活に動搖を來たし、而して所謂理想にあこがれる時代であるからして、此の生みの苦しみを順調に導く爲めには彼等に麗はしい思想の生活をなさしめなければならない。或は自然に接觸し之に抱擁せられて自然の大なる雰圍氣に抱かしめる要がある。而して一方には宗教的や藝術的の思想が生れて來る時代であるから是に相應した導きが與へられなければならない。併しながら既に形式化した修養的生活に彼等の心を安住せしめたかの如く思はれるが、それは日ならずして再び彼等の心中に湧き出づるところの不安の狀態に變化して破壞される時が來るのである。故に精神的生活は彼等青少年の本然の性に根抵を置かなければならない。即ち生るべくして敎ふべからざる性質のものである。

宗教的生活　青少年の宗教的生活の萠芽は割合に遲く現はれて來て、寧ろ十七八歲以後に於て起るものが多いと云はれてゐる。併しながら幼年や少年時代に於てもその根抵となるべき敬虔的の生活が或種の形式を以て現はれることは事實である。而して宗教心が多くは青少年の時期に於ける理想と現實との不調和より反對に生れて來ると云ふことが多いことを見ると、彼等の宗教的生活を深くせしむる爲めに或る種の訓練が與へられなければならぬと云ふことは異議の存しないところである。今日の青少年には物質的文明や乃至は論理的の科學的智識が多く與へられなければならぬと云ふ點から心靈の問題に對しては殆ど顧みられなかつたのである。かるが故に彼等の精神的生活と稱するものも至つてその根抵が薄弱であつて、僅かの外部的影響によつて譯もなく變化される。而して物質的文明を謳歌することは非常に熱烈であるがそれも別單に深い根抵があるのではなくて唯表面の點にのみ着眼するに過ぎない。現代に於ける生活が如何に行きつまつてゐるか、又如何に現代人が生活の爲めに追はれてゐるかと云ふことを考へた場合に於てこの感を更に强うせざるを得ない。

信仰なるものは實は論理的のものではない。又之を言葉や形式の上に現はし得るものではなくて所謂自らが大なる力に抱擁されると云ふ一種の感情の極致である。信仰によつてのみ吾々は心靈上の不安を除くことが出來るのであつて、その不安は決して論理的や科學的に除去し得るものではない。又しかく容易に除き得る不安であれば之は信仰上の問題からは除外するのが妥當である。所謂人事の總てを盡して而して天命を待つと云ふ狀態に到達して初めて得たる安堵の力こそ即ち眞の信

仰である。迷信的生活の如きものは或る部分まで之を科學的に除去することが出來るものである。又之を除去するのが文明人の當に執るべき態度である。併しながら凡てのことを論理的や科學的に説明せんとすることより起る破綻は遂に人間をして自己を否定せしむることに到る場合が少くないのである。

今日青少年の教育を論ずる者がこの點に注意を拂はないことから智識や技能は進んでもそれは單に機械的の事實に過ぎなくて崇高なる感情や犯すべからざる健實なる意志の養はれないのはこの根柢の信仰の確立せざるに基因するものである。最も學校教育と宗教教育と云ふことを混同するのは宜しくないと云ふことは吾人も之を承認する。學校教育は飽くまで理智の教育でなければならない。併しながら彼等には之に對立して信仰上の教育が施されて行かなければならない。然りと雖も單に僧坊の生活を模倣せしむるとか或は宗教の教義を知らしめると云ふことが宗教生活ではなくて廣い意味に於ける敬虔的精神の涵養と云ふことまでに導かなければならない。併しながら又一方には既成宗教に歸依すると云ふことを全然否定するものではない。既成宗教を通じて大なる信仰心を得るといふことも必要であつて、又元來それが宗教の眞諦であつた。宗教が假に時代と共に移つて來てそして現實化して來ると共に色々の派生的の形式や儀禮が起つて、その眞諦を逸したるかの如き狀態となつて來た。それを以て宗教生活であると見做してはならない。

宗教を中心とする團體は動もすれば現代と懸けはなれ、又現實の生活を呪ふが如きものとなつて來るが、一方に於てはその根柢が確かであるが爲めに眞の統一あり又權威ある團結心が生れてゐるやうであるが、單に理智的の修養を以て目的とする團體はその結束がゆるやかであるやうに思はれる。これは唯單に團體ばかりでなく個人の場合に考へて見ても同樣である。

理想と現實　青少年期は實に理想に憧るゝ時代である。而してその少年期にありて辷極めて純なる狀態に於てそれが現はれ、又十八九歳前後の青年期にありてはそれが多少の不安を以て現はれるが、共に現實なるものと深い交渉がないと云ふことは事實である。ところがこの以後に於ては實生活の初期に這入つて而して遺憾なく曝露さるゝ社會上の現實なるものが多くは理想と背反すると云ふ事實を見せつけられるのである。これは以下の章に於て詳しく述べる所であるが、青少年期に於ては洵に危險なる時代である。最も純なる狀態から境遇によつて逸早く社會に出づる職業少年の如きは未だ理想の確立されざる時代に於てかゝる矛盾の世界に這入るのであつて、彼等はそこに煩悶も不平もなくして所謂凡人化するものである。

現實と理想の調和し得ないことは前既に述べた如く、人間の欲望とこれに對する不足の事實が地

上界に存在してゐると云ふ事實に基くものであつて、この調和を計るが如きは容易なるものではない。併しながら吾人は飽くまでも現實を理想化し、理想を現實化すると云ふ點に努力を拂はなければならない。然も理想をオ安く現實と妥協せしむると云ふことを厭ふのである。現實に於ける不平や不足はこれを大觀し客觀視すると云ふことに依つてよく理想と一致せしむることが出來るものであつて所謂あきらめの生活を強ふるものとは大いにその趣を異にするのである。心は常に燃えてそして何物をも燒き盡さんとする力を持つてゐるが、それは心の中に不足に對しても之を表現すると云ふ狀態に導かれてこそ眞の理想である。

第六章　青少年の教育

教育なるものゝ目的や意義、方法等に就ては本書の取扱ふべき餘裕を有しないが、青少年團の經營を論ずる者の必ず一考を要すべき案件であることは云ふまでもないところである。青少年の社會的教育としても亦その根據を人間教育の上に置かなければならない。團體教育や社會的教育は單に社會の要求のみに依つて生れたものであつて、人間教育と云ふ立場から生れたものでなかつたならば動もすればその事業は遊戯化し又は施設に偏つて人としての修養には寧ろ害あるものとなるかも保し難い。青少年の教育と云ふことは狹い意義に於ては義務教育以上の正式の學校教育を受け得ざる青少年に對する教化訓練であると云ふ風に解釋されてゐるが、廣い意味に於ては總ての青少年を如何に教育すべきかと云ふ問題ともなつて、所謂專門教育や大學教育以外の總ての教育系統に關する問題ともなるのである。併しながら茲には假に狹義の意味に於てこれを教育の體系から考へて見たいと思ふ。

教育の機會均等　今日の教育はその境遇によつて受くべきところの程度に於て相違がある。境遇と云つても寧ろその社會の境遇や乃至は一家の財力の如き簡單なる事實によつて夫れに支配せられて、元來天資優秀なる者も低度の教育に甘んじなければならない。我國に於ける現狀によると天資優秀なる者も主として家庭の境遇が裕かならざるが爲めに小學校以上の學校、或る場合には小學校にても高等小學校の課程をも經ざる者もあり、尙極端なる場合に於ては貧困なるが故に義務教育さへも受け得ざる者も尠くないのである。是等の缺陷はこれを社會政策的に改善することが根本であつて到底一人の力を以てよくし能ふるものではない。又家の貧富と云ふことに關係なく唯地理上の不便と云ふ點から學校教育を受くることが出來なかつたり、又低度の教育に甘んじなければなら

ぬと云ふ者も少くないのである。

等しく人間と云ふことから考へて見れば、境遇の如何による教育機會の不均等と云ふことは不合理であるのは云ふまでもないところである。之は一日も早く國家の力によつて全然根本的の政策が樹立されなければならなくて、歐米先進國に於ては之を實際の政治上に適用し、又適用せんとする時代に到達してゐる。然るに我國に於ては高等教育の擴張や乃至は中等教育の擴張には文明國としての體面を維持するまでに大體進んで來たが是等は多く中流以上の家庭に於ける子弟にのみ惠まれてゐるに過ぎない。しかも學校教育偏重の結果は正式なる學校教育以外の教育はこれを重視しなくて彼等薄資の者をして徒らに煩悶せしむるの種を蒔くに過ぎないのである。

教育の缺陷　今日の學校教育は幾多の缺陷があるが、就中最も看過ずべからざるものはその形式化し、習俗化したる點であつて、或る意味に於ては貴族主義又は徒食主義の教育であると云ふ點であらう。何をか貴族主義と稱するかと云へばそれは上は大學より下は小學に至るまでその標準を總て上流の者に置いてゐるからである。學校に於ける修身科を見るもその說くところは全く無爲にして徒食する貴族の階級に於けるものゝ道德や習慣を以て目標としてゐるのではないかと考へられる。夫れ故に中流以下の家庭に育つてゐるところの兒童は極めて不自然なる二重生活を爲さなければならない。言語に於ても所謂學校言葉なるものがあり、儀禮に於ても亦學校儀禮なるものがあつて、彼等の屬する社會や家庭とは沒交涉である。教育なるものが人間をして高尙なる趣味を養ひ溫雅なる性格を作らしむると云ふことに就ては異議のないところであるが、それも實際生活に基礎を置いたものでなければ寧ろ教育なるものは虛僞の生活を强ふるものであると云ふ謗を受けざるを得ないであらう。

教育の缺陷は又その社會化されざる點にあると云ふことも以上の見地から述べることが出來る。社會の要求とは沒交涉であることが非常に多いと云ふことは事實である。必ずしも社會の事實にのみ支配されると云ふことが教育ではないが、これと離れて而して將來の社會を建設せんとする努力は無駄なことであつて、時代を導くと共に現代を了解し得る教育が最も適應したるものでなければならない。然るに今日の教育は學校の爲の教育、教育の爲の教育であつてこの兩者の目的の一にも合致してゐない。社會的事實に立脚してゐないと云ふ事例は彼等に與へらるゝ教材が如何に骨突的であり遊戲的であるかと云ふことに依つて明かであつて、これは例示するにも當らないことである。

青少年の軍事教育　最近軍縮の聲に伴つて國民の軍事的能力の養成乃至は國防と云ふ問題がや

かましく述べられるややうになつて來た。而してその爲めに青少年の教育(學校教育をも含めて)も亦一面に於て軍事教育にその目的の一半を置かなければならぬと云ふ考が頻りに叫ばれて來た。併しながらこれは單に政策的に見ることを欲しない。ボーイスカウトの創始者であるパウエル將軍の言に徴してもスカウトの教育はミリタリズム(軍國主義)でもなく又アンチミリタリズム(非軍國主義)でもないと云ふ風に述べられてゐるが、この言は頗る味ふべきことであつて吾々の現在頭に浮ぶが如き軍國的教育であればこれを青少年に適用することは欲しないが、その教育の本質に立脚したるものが會々軍事教育の長所に適合して廣い意味に於ける國家教育の立場からそれが見られた場合、假りに軍國主義と稱するに於ては又異議のないところである。

軍事訓練と云ふことは單に教練をやつたり射撃をやつたり或は譯もなく青少年の本能生活を抑壓して無上命令的に出でたる無意義なる鍛錬主義の教育であると云ふ風に解釋され易い。又青少年を驅つて單に戰國の際に於ける國防の具に供すると云ふやうな偏したる政策から出た場合に考へられ易い。外國に於ける少年團や或は少年旅團と稱するものはその形式から見れば軍事訓練の權化のやうに見えるが、その訓練の基礎を少年の興味や遊戯本能に置いて、如何にして少年らしき少年を作らんかと苦心して居るが、兵士を作ると云ふことの直接行動ではないのである。今日日本に於て青少年の軍事訓練なるものが叫ばれてゐるがこの點に就ては餘程根柢から考へて行かなければならない。

青少年の職業教育

十九世紀の產物に教育をして所謂職業に結合せしめたことを看過する譯には行かない。それは從來の教育は古典的な教育であつて、職業なるものと懸け離れてゐたといふ點からその効果を疑ふやうになつたのと、一面には科學の進歩に促された事實である。併しながら教育は段々職業化すると云ふ點が誤解されて青少年を驅つて職業の生活に譯もなく導き、人間本來の生活から疎外せしむるの傾きがあるやうになつて來た。所謂安つぽい教育となつて來て彌が上にも進んで來た物質文明と共に道德上にも乃至は一般精神界にも缺陷のある人間を多く出すやうになつて來たのである。これを女子の教育に見るも同樣であつて、單に女子をして家庭や職業の生活に從事せしむるに都合よき機械化したる教育が施されて、而して眞の婦人としての教育なるものが閑却された傾があり、遂には良妻や賢母や或は職業に堪能なる婦人を作らんとして却て之に反する事實を生んだのである。職業教育に關しては矢張り合理的の指導が與へられなければならない。即ち少年の時代より職業に對する適否の選擇指導が與へられて後その根柢たる教育が施されて行くのでなくては眞の職業なるものを會得せしむることが困難である。從來の職業教育はこの點を閑却して直

ちに職業に關する知識や技術の傳達と云ふことに努めた結果は前述の如き弊を釀したのである。尤も現今の普通教育や高等普通教育に於けるが如き職業に全く關係のなき學科のみが選ばれて、而かもそれが完全なる能力として養はれない現狀を以て我々は理想とするものではない。此等の教育は少くも職業化し、實際化し、社會化するの用意に於て缺くる所があると云ふことを痛切に感ずるものである。

第七章　青少年期の生理的發達

青少年期と單に稱して來たがこれは通常吾人の了解する程度に就ての言葉として述べて來たのであるがこれを正確に云ふときは生理的や心理的の發達に依つて明かに區別する必要が生じて來る。假りに吾人は團體教育の立場より少年期を春機發動期以前のものとして取扱ひ、青年期を春期發動の事實が完成したる時代以後のものから成熟期に至る時代のものとして取扱つて見たいと思ふ。年齡から云へば大體男子にありては十五歲前後が少年期であつて、そして十七八歲で以て青年期に入つて二十二三歲でこの期を終るものと見ることが出來る。ところが我國に於ては第二幼兒期と稱する七歲から十四五歲の時代の後半卽ち十二歲以後の者もこれを青年として一般に取扱つてゐる次第うである。

生理的發達の階段

この時代の青少年が生理的には如何に發達をなすべきかと云ふことは、これを生理學者の說に從て述ぶるに如くはない。今キューレール、ゴデン、フランシロン等の諸家によつて青年期迄如何なる生理的發達を遂ぐべきやと云ふことを見るに之を胎內期—兩性非分化期—兩性分化期の三期に分ち、更に兩性非分化期を嬰兒期—第一兒童期—第二兒童期に分ち、兩性分化期を更に春機發動期—青年期—成熟期の三期に分つてその標準の年齡を當て箝めると次表の如くなる。今參考の爲め男性に對して又女性の方をも加へたが、女性は男性に對して幼兒期以後に於ては一歲乃至二歲の相違があることを見るであらう。

		男性	女性
胎內期	出生以前の時期		出生以前の時期
兩性非分化期	1. 嬰兒期	嬰兒　至二歲	嬰兒　至二歲
	2. 第一兒童期	幼兒　三—六歲	幼兒　三—五歲
	3. 第二兒童期	小兒　七—一四歲	小兒　六—一二歲

兩性分化期	4.春機發動期	發情期少年	一五―一六歳
	5.青年期	少年	一七―一九歳
	6.成熟期	一人前の男子	二〇―二三以後
		發情期少女	一三―一四歳
		少女	一五―一九歳
		一人前の女子	二〇以後

余は又青少年の訓練を論ずる必要上青少年期の發達を三期に分期し、之に心理的の發達をも參酌して階級的訓練を提唱してゐるが、これは次章に明かなるところである。

青少年期の生理的發達の特點

生理的に如何なる順序を踏んで發達するかと云ふことに就ては九州帝國大學教授榊博士の調査によるを適切であると信ずる。次に

學齢より丁年迄の精神教育研究　（榊　博士）

一、男子の精神教育曲線は理想的教育曲線である。仍て對數曲線の形狀に酷似す。

二、十年十一年附近にある身體教育遲鈍或は精神曲線に於ては僅か一ヶ年に表はる。且つ男女共にその傾向あり。

三、身體發育曲線は男子に於ては一一―一五年より一八・五年迄殆ど一直線に上昇するも男子精神曲線は對數曲線の一部分に酷似する曲線を以て一七八年迄發育上昇す。

四、身體發育停止は男子は大略一八・五年なるも精神發育停止は一七八年附近にあり。

五、男女共精神發育は八年より十年迄は甚だ急進す。

六、女子の青情期が精神發育に影響することは大略十二・五年より一三・五年附近頃迄著明なり。且つ此の時代は女子の發育は男子に及ばず。

七、女子青情期變動は身體發育變動よりも約一ヶ年早し。

八、女子精神發達に於て一六年以上は男子の發育よりも少しく大なり。

九、女子の精神發育停止はその身體發育停止期（約十八年）よりも約一ヶ年早く即ち十七年頃にあり。

一〇、女子の精神發育曲線形狀は殆ど三ヶの直線より成立す。八年より一〇・五年迄一の直線、一〇・五年より一八・五年迄一直線、一八・五年より一九・二年迄短き直線なり。

一一、女子青情期に於ける急速の身體發育期の精神發育は之れと反對に一時遲鈍となる。

右の結果を一般に應用すれば多少社會を稗益するところあらん。

1. 現行法律に於ける責任能力に關する法令の改正なり。蓋し身體及精神の發育停止時期が此の研究によりて決定したる以上は從來の滿二十歳を以て丁年とする必要は少しもなきが如し。

2. 二十年を以て丁年とするより余の研究結果たる男子身體發育停止期たる十八年半及精神發育

停止期十七・八年に改正すれば有爲の壯年期間を少くも一ヶ年半以上延長なし得るものにして國家の經濟上如何の影響ありや。

3. 幼年法に關し余の研究結果は多大の影響を及ぼす。

4. 徴兵適齢の改正、滿二十年を以て適齢とするより少くも十八年半とする方兵員の增加及び兵士の衛生狀態に良好なる影響を及ぼす。（一種の兵士花柳病減少の策として）

5. 丁年期を十八年以前にすれば現今普通及び高等教育規定制度の改正を要すること。

6. 各年齢に於ける精神發育の狀態を詳にし得たるを以てその結果に適應したる完全なる教育方法を施行することを得。

7. 女子は精神發育程度が十六年以後に於て男子より同等以上なるを以て目下問題たる女子高等教育に關し唯一の材料となる。

8. 余が研究したる發育狀態を應用するは少くも學校衛生又は一般衛生上多大なる資料となる。

第八章　青少年の心理

心理の全般に涉つて述ぶることは本書の目的でない。また青年時代の心理に就いても詳細に解說するの餘裕を有しない。青少年の心理學はスタンレー、ホール氏などに依つて研究もされたがその研究法は多く單なる事實や考察に依つてなつたもので、今日一般心理學の發達した割合に進步したものとは云へない。殊に我國の學者中にも青少年心理を得意とするものが少くないがそれ等も多くは一般心理學を詳述した後ちに自己の頭に浮んだ個々の青年を捉へて青年は斯くありと述ぶるに留まつて、未だ青少年心理の本質を明にしたものとは云へない。只今日青少年の問題が喧しく云はれる樣になつて間に合せの青少年心理學を振り廻はすに過ぎないのである。吾人は素より心理學者に非らざるが故に之等の諸學者より學ぶ所が多いのであるが、惜むらくは前述の通りであるからまだ十分なる學說を傳ふるの自由を有しない。

併し青少年心理學は今後是非とも十分なる研究が積まれなければならぬ。然らざれば學校教育は勿論青少年の團體指導も完全に行はれ得ない。それには學者の力に俟つの要もあるが、直接指導の任に當つてゐるものや乃至は青少年自身にも研究を試むるものが生れて來なければならぬ。青少年自身が自己や自己と境遇の等しい同胞の心理を或は內省し或は觀察研究すると云ふことは夫れ自體に利益ある許りでなく心理學者に對して多大なる參考資料を供するものである。

次に余は前記スタンレー、ホールやトレーシイ教授の著述に從つて其の一般を述べる事とする。

心理學や生理學を研究するに當つて人生を幾つかに區分する必要のあるのは前にも述べた通りであるが、少年期を十二歳迄とし青年期を十三歳より二十四五歳迄とすると云ふ說もありまた十六歳までは少年と稱し七歳以前を幼年と稱する場合もあつて頗る不規律なものである。從つて心理學を取扱ふに當つても一々其の年齡範圍を附加した語を以て少年期とか青年期とか區別する必要があるが本書には假りに十二歳までを少年として十三歳以後二十歳までを青年とし特に必要ある場合に在つては十六歳までを青年前期とし十七歳以後を青年後期として取扱ふことゝする。青年前期を少年と稱するも敢て妥當を失すると云ふ迄ではない。

少年期の心理　嬰兒期より幼兒期卽ち七八歳までの間の子供の時代は本能的反射的の時代であり智力もまだ感覺的經驗の外に出でない。記憶や想像も多くは一時的であり漸減的であつて論理的根據や聯想的作用に依つて長く把束され得るものではない。其の行爲は著しく直接的であり感覺的であつて目前の事物に對しては直ちに意志を變動せしめることが出來るが、目前の表現と離れて想像や推理によつて變動することは困難である。

七八歳以後の少年に在つては所謂知力的成人期とも稱する時代に入つて腦の發達と共に知力就中記憶想像の如き心理的能力の發育する第一期である。併しながら未だ心的狀態に於ては綜合力を缺き注意判斷力も十分に發達して來ない。意志は決意の方面に於て著しく發達し來つて自意自決の傾向を生じて來る。何んでも自分で行つて見たいと云ふ決意が强く而して其の結果を他人から褒められたと云ふことを餘程喜ぶものである。自尊心名譽心などが寔に純なる狀態に於て表はれてゐる。感情の方面ではこの時代は最も注意すべき時代であつて表面的には無感情のやうな狀態を表はし同情や眞美に對する讃仰や宗教道德上の敎訓にも全く無關心であるか乃至は寧ろ反抗的であるやうに見られるものである。卽ちこの時代には盛んに動植物を損傷したり弱者を苛めたりお山の大將になりたがつたりして喧嘩好となつたり原始的の時代に退化して手のつけやうのないものと見做される。併し、これは一方に筋肉的活動の旺盛なる事から表はれたものであり、また次に來るべき人間性の展開さるる準備である。而して斯かる時代の旺盛なる活動はよしや一般の道德律から見れば手もつけられないほどの醜惡であり粗雜なものであるかも知れないが建設の爲の破壞であり材料の山積であり其の大々的計劃作業であると見れば敎育上大に啓示をうくべき點があらう。

少年期の心理に就いてはボーイスカウトがよく之を利用してゐる。今少年團の心理的基礎と稱する一章を左に揭げて參考に供する。尤も此場合の少年は十七歳のものを含むものである。

少年團教育の心理的基礎

バーデンパウエル卿がこの少年義勇團の運動を起すに至つた近因とも云ふ可きは同中將が南阿戰爭の際に得たる經驗である。同中將がメフキング町を防禦した時に守備兵不足の結果町の少年を傳令、斥候その他の仕事に使つた所が少年は非常に興味深く熱心にその事業に從事するのを見て同中將はこれ等の職務が少年の熱し易き活潑なる性情に適して居るものと考ふるに至つた。玆に少年團の心理的根據がある。教育雜誌ペタゴヂカル、セミナリーに於てエム、ジエーン、リーネー氏は少年團運動の心理を論じて居る。即ち左の通りである。

近年兒童心理の研究は非常な進歩をしたけれども併し此の學はまだ〳〵極めて幼稚である。併しながら吾人は既に子供は不成熟の大人とのみ見做してはならぬことや、子供の心は一層原始的のものであることや、又恐らくはその發達にあたつて人類が通過したと同一の階段を通るものであることなどの結論には達して居るのである。又吾人は人間は知的生物として本能といふものはあまり持つて居ないといふ古い考を失ひ、人間といふものは極めて多數の本能を持つて居るけれどもたゞそれが知性のために變化せられて居るので大人になつてはこれを認めることがむづかしいといふほどの程度になつて居るのであるといふ論がその基礎を固めつゝある。マクデユガル氏はその社會學に關する著書に於て「直接にもあれ間接にもあれ本能は人間のあらゆる活動の最初の動力である。……本能的衝動がすべての活動の目的を決定し、而してすべての精神活動が維持せらるゝ動力を供給するものである。」と述べて居る。尙又吾人には是等の本能は發達の上では異つた時期に現はれて來るものであつて若しそれが妨げられたり害せられたりすれば其の結果大なる害を個人に及ぼすものであるといふことが分りかけて來た。フロイドとその後繼者等はその心理分析の仕事に關聯して、大人の生活に於ける神經病的傾向の多くは、兒童期の本能の要求の抑壓にその原因を求むることが出來るといふことを證明して居る。

動物界に於ても高等のものになつて來るに從つて子供の時期、未成熟の時期が長くなつて來るのであるが、此の時期の間に遊戯活動が强く發達して來るのである。カール、グロースは人類の遊戯に關する彼の著書に於て「實際少年時代の意義は一部分は遊戯の必要といふことに存する。動物は幼少である爲に遊戯するのではなくして、遊戯せねばならぬ爲に幼少の時期を有するのである」と言つて居る。發達してくる本能が適當の範圍や方法で現れて來るのは遊戯によるのであつて、吾人は子供の遊戯する方法を注意深く觀察することによつてのみ重なる本能が現れて來る時期や年齢を知ることが出來るのである。遊戯に際して子供は無意無心である。大人の勝手な意志に拘束せらることなく自由にして恐るゝことなく自己を發表するのである。

大人が子供の立脚地を全然了解しないことを子供が知ることがあるがこれは、往々、見るも悲しいことである。子供の心は文明人の大人よりも寧ろ野蠻人の心に近いのであるが、我々はこれを知り得る程十分に幼兒期に就いての鮮かな思ひ出を持つて居るものは少い。子供が事物を見る方法は我々とは餘程違つて居る。――子供の考は單純である。――子供の論理には容赦がない。

子供の遊戯を觀察した多くの人々は或る種類の遊戯が夫々異つた年齢に於て子供の心にかなふものであるといふことに注目して居る。大體に於て遊戯の時期を三つに區分することが出來る。

一、戯曲的遊戯の時期。

二、競爭的及び自己主張的遊戯の時期。

三、忠實及び共同的遊戯の時期。

是等の時期は固より確然たる分界があるのではなく互に次第に混同し易い傾きがあるのであるが九歳又は十歳の時期に於いては強い競爭的及び自己主張的の感じによつて、戯曲的遊戯に對する著しい傾向が現るゝものである。少年は最早や假の想像などでは滿足しない。子供は批評的になつて、爲すこと――事物を行ふことを求める。戰の爲に戰ふことを求める。此の年齢の頃には吾人は屢々「私はあなたよりも善くこれを爲すことが出來る」と子供が言ふのを聞くことがあるのである。他人を打ちたいといふ鋭い要求があるのでこれを養成するやうな遊戯は狩獵本能や鬪爭本能を使ふ遊戯と共に極めて普通に行はれる。ロマンスは冒險を好むといふ形になつてぼんやりと大きく見える此の時期は少年が漂浪の徒となつたり氣丈な少年は海へ飛び出したりする時期である。

子供はたゞ天より定められたまゝを行ひ、種族が通り來つた各時期の道を通らうとして居るのであるといふことを、吾人はやつと今わかりはじめたのである。子供にとつては力とか向見ずとか大膽とかいふやうな簡單なことが心を動かすのである。子供の心は受働的の德の價値を知ることは出來ない。それで斯樣な德を教へ込まうとする大人は往々にして憐れな者と思はれたり輕蔑されたりするのである。子供は野蠻人の「勇敢」と一致するので我々の遠い祖先の心を動した事物が子供の心を動かすのである。若し子供の本能といふものが阻止せらるべきものでないならば、子供の時代こそは強い野蠻的の特質を助長してその將來の生涯の間これを使ふことが出來るやうにすべき時である。この時期に於ける少年は所謂「餓鬼」であつて、しかも多くの場合に於いては不愉快なる餓鬼である。何となれば吾人は「餓鬼の惡戯」を如何に取扱ふべきかを知らぬからである。優しく育てられた子供が雨の雫や花をつかふ幼稚園の遊戯よりも寧ろ屠殺場の遊戯を好むやうなことは卽ち自然が自然自らを證明して居るのに過ぎないのである。

發達のこの時期に於ては著しく共働といふことが缺けて居るものである。子供は他人と一緒にはたらくすべての遊戯に指導者を必要とするのである。團體遊戯はそれ自身では子供の心を動かさない。又假令子供がこの遊戯を敎はつても個人本位といふことが最も有力な特質として存するものである。然るに青年期の曙の光が差し初めるといふと子供の外貌に變化が現はれる。少年は自分自身を理會することが出來ない。小說傳記は以前よりも一層彼の心を動かすけれどもその小說たるや非常な冒險や立派な成功の小說である。彼は崇拜すべき英雄を持たねばならぬ。共働の精神が起つて來る。今までの個人的格鬪遊戯では不滿足になつて來る。この時期に於てフツトボールやホツケーのやうな團體遊戯が最も普通に行はれるやうになつて來る、黨類や倶樂部がつくられる、團體意識の感が起つて來る。大なる全體の一部分として自己を抑壓し仕事を爲すといふことが强く心を動かし、それはフツトボール團體の立派な共働に於いて現れるばかりでなく無賴漢の群の頭に對する忠實といふことに於いても現れるのである。群といふものは共働の要求が變態的に現れたものに過ぎない。それは原始的な社會的團體である。比較的有福なる境遇にある少年にあつてはこのことが遊戯を愛することゝいふ形に於て現はれ、遊戯の時の頭は往々にして崇拜し模範とすべき英雄となるのである。

併しながら生活の爲めの戰鬪といふことが一層激しい階級にあつては遊戯それ自身としてはさほどに心を動かさない。遊戯といふものは十分に利益がないのである。明かにそれは將來の生活の爲に準備をするものではないのである。斯かる階級の子供にとつてこそ此の時期に於いて少年義勇團の運動は天の賜物として來るのである。彼は澤山の滿たされざる要求を持つて生活の門口に立つて居る。彼はロマンティツクな冒險に憧憬れる。然るに彼の生活は卑賤である。彼は事を爲すことを好む——彼は始終仕事を持つて居らねばならぬ。彼の手は物事を爲て見たくてたまらぬのである。彼は彼に芽ざし出る愛情を注ぎ得べき英雄を求める。その英雄たるや彼がその性格を理解してこれを儀表とすることの出來る人である。學校や職務上で要求せられるやうな受働的の德は彼の本領でない。——彼の狩獵本能や鬪爭本能があまりに力强い。——彼は海員か或は兵士になりたいのである。彼の群居本能が現れかゝつて來て彼は大なる野蠻的の群中にある他の單位の間に處して彼も亦共の一單位となることを欲するのである。實に未開人の未熟な心が今や彼の胸に動いて居るのである。彼は何か爲して自分自身を他人に感ぜしめたくてたまらぬのである。而して彼はそれを爲すのであるけれども往々にして悲むべき方法でこれを爲すのである。然るに彼が少年義勇團となればすべて是等の湧き立つやうな慾望は滿足せられるやうである。彼の激しい憧憬の情は鎭められるもの

である。

小說傳記が實際の事となつて、彼は天幕に住んで文明の廓外に於て彼の好める開拓者の生活を爲すのである。彼は興味あることを爲る。——彼はロマンティックなやり方で日常有用のものを拵へることを學ぶ。——彼の眼の前には彼が理會し得るやうな德を具へた英雄が置れる。——彼はすべて一の目的に向つて働いて居る一群中の一人であるのである。同時に彼の個性は壓迫させられることはない。——彼の競爭慾は滿足させられる。——彼は今や彼の偵察や彼の中間を最もよくしようといふことを目的とする。彼の盛裝を愛する未熟な心や華麗儀式、誇、街などを愛する心はすべて適當の場所に使はれる。彼は少年團の規則の簡單なる訓練を了解することが出來る。彼より强い人から支配せらることを喜ぶ彼の內心、彼が默して服從するを喜ぶ心——すべての子供に潛在して居る要求——は自然に現れ、彼が職務に對する尊敬の感——我々の輓近の傾向に於ては往々にして失はるゝ感——は養ひ育てられて法律と秩序とに對する尊敬の念の基礎となるのである。彼は騎士の生活を爲し冒險の生活を行ふのである。彼は主義に對する熱烈なる忠義の心に滿たされて居るのである。彼はすべての事に全然興味を持つて居るのである。此の組織は實に全然彼の構成せむとする要求に合するのである。而して就中そのすべてを通じて彼の心の背後には彼は自由であるといふ感じが流れて居るのである。——彼は是等の事を爲すことを强ひられて居るのでなくて彼は彼自身の自由意志からこれを行ふのである。換言すれば彼は花々しい遊戲をして居るのである。

少年義勇團運動の祕訣も成功もこゝに存するものであると余は信ずる。それは本能の要求を滿足させ從つてそれは普遍的なる少年の心の興味に訴ふるのである。而して其興味に訴ふるに當つては普通の學校教育で出來ない或は少くとも爲さない方法をとるのである。それは彼の發達の時期に適當した方法を彼に示すので彼の心を動かし彼の興味を惹くのである。彼は何故に少しの道具で炊事をしたり繩を織ぎ合せたりすることを學ぶのであるかを了解する。自轉車の機械を了解するために機械學を學び、中隊の宿割の計畫を立て得る爲に算術をするのであるといふことがわかる。彼は少年團の指導者に默々として服從する。それはせねばならぬからするのではなくして若しそれをしなければ規律の全精神が失はれるといふことを彼は知つて居るからするのである。

彼は困難を耐へ忍ぶ——彼は他人に席を讓る——彼は些々たる仕事をも不平をこぼさずに行ふ。それは彼自身が具體的なる興味ある全體の一部分に過ぎないといふことを知つて居て、此の全體の成功は彼自身の成功よりも彼にとつて遙かに意味があるといふことを知つて居るからである。遊戲の精神が彼の心に行きわたつて居る。併しその遊戲たるや彼がその用法と價値とを知つて居る遊戲で

ある。――彼をして益々彼の理想の標準に近づかしめ得る遊戯である。少年義勇團運動の祕訣は實に此に存すると余は信ずる。それは少年の發達の時期に方つて全然その要求を滿足せしむる花々しい遊戯である。その大なる成功の祕訣は實に此に存するのである。少年が理會し得る事物に訴へて少年の心身を手中に收め、彼の興味、彼の忠直の心、彼の被暗示性を利用してそれで彼に純潔、正義名譽、正直等の深遠なる德性を敎へ込むのであるが、これは實にすべての敎育が目的とする方向に向ふものであつて、誠に善良なる市民をつくり善良なる人をつくるの道である。

青年期の心理

青年期即ち十五六歳の春機發動期以後の青年時代は人生中最も神祕なる時代である。先づ春機發動と云ふ特異な狀態が其の先驅として表れる。春機發動以前の少年に在りては其の精神作用が極めて自由であり行爲も粗放であるが此の期に及んでは精神的作用の外に一種の勢力が加はるので行爲も自ら決意的のものとなるの傾向を示すに至るのである。

春機發動期中は精神的發達作用が一時中止をすると稱するものもあるがそれは只其の表面に表はれた一の現象が餘りに顯著な爲であつて決して斯かる事實はない。少年時代の模倣的、慣習的の行爲が漸く決意的の行爲に移ると云ふことは前述の通りであるしまた一般的智力も感情も發達を續けてゐる。

春機發動期以後の青年は最早人間としての價値を確に把握したかの如き狀態になつてゐる。彼等の心と身體とは漸く平衡の發達をなし、思索が深くなり、感覺から深い感慨に入つて來る。凡ての事物に對して單に感覺的な作用が起る許りでなく之と思想とが結び付いて深い解釋が下されるやうになる。意志の働きもまた其の動機に理智が伴ひ決意に感情が隨伴して著しく深みを增して來る。觀念聯合の形式も綜合的となり記憶力想像力の發達と伴つて抽象推理の力も漸く進歩する。

青年時代の懷疑心は前述せる精神發達の階梯として當然生るべきものである。執拗なる彼等の追究心や論議を好む心は矢張之から生れるものである。それ故此の時代は最も修養鍛練に堪ふる時期なると同時に又動もすれば思想的にも墮落せしめる時代である。多くの青年が此の時代に於て何等の敎養訓練を受け得ない爲に折角の少年時代の敎養が餘り人生の上に役立たぬと稱されるやうになつたのである。學に從ふ者もまた既に一定の職業に從事しなければならぬ者も此の一大危機に對する修養訓練が必要なることは云ふまでもない所である。

ペーリー氏によると青年心理の特徵を次の如く述べてゐる。

青年心理の特徵は性に關するものゝ外社會的、美術的及宗敎的經驗に關するものが著しい勢を以て發達する。併しながら青年の行動をして特色を發揮せしむるものは認識力とそれが原動力たる

本能である。此の時代の青年は冒險的態度が原始的な形で表はれ器械的職業や敎練などではその活動慾を滿足せしむることが出來ない。

青少年期の心理は精神的意義を見出さうとする强い傾向を以つてゐる。併し其の精神的意義と稱するものも抽象的のものではなくて自然界の實在や人生の實際の出來事から之を見出さうとするのである。木や花や水や風に對しても何等かの精神的意義を結び付けようとするのである。

青年心理の詳細に涉つては前述の諸書によりて研究さるべきことをお勸めするが左にトレーシイ氏の青年期心理學（Tracy. The Psychology of adolescence）によつて感情並に意志に就て其の大要を述べることゝする。

青年期の感情　幼兒は直接本能に依つて動かされ、その本能的擧動の感情面は恐怖・嫌厭・憤怒等の單純感情より成立する。然るに青年となればより高等な複合感情――嘆美・畏敬・尊崇・感謝・非難・不平・憎惡・歡喜・悲哀・憐愍・羞恥等――の能力が發達して來る。即ち青年期の深刻にして强烈なる情緒の時代たることは言を俟たない。情緒的經驗に對する青年慾望は殆ど飲食物に對するものと異らない。此の時代の初期――十六歳より十七歳迄――は殊に此の能力と慾求とで特質附けられて居る。之卽ち筋肉活動の要求に連結して、青年の動搖を語つて居る。後期に至つて情潮は幾分整へられて、その干滿はボカされて、より眞面目にしつかりとして來る。之は感情夫自身が弱くなつたと云ふ理由からではない、寧ろより高等思考力の統禦力の對象となつて來るからである。

この情緒發達の一區劃は、一般に性作用の發露に歸されてゐて、之は疑ひもなく一重要件である併し之は感情作用の一影響に止らずして身體の成長及びその一切の諸機關にも影響して、知的能力の發達、體力、精力の型式に迄關與する。而して之等の發達は更に感情の新潮を齎す。然れども性的發展は情性發達に唯一なる原因でもなければ又情緒の攪亂に唯一の事物を提供する處のものでもない。實に、多くの著者に依つて著目されて居る如く、若し拾幾歳時代の情緒生活が性能力に集注さるゝならば、その情態は變態であるに相違ない。感情の慾力は丁度必要なる水脈が有り得る樣に、奔放に瀰散するより他に當を得た事がない。又限定されたる統覺範圍卽ち性的或は他の何れの範圍にして情緒的精力を集注する程怖るべき方法はない。然れども就中最も危險なるこの集注法が恐らくは今日の性的生活が有する焦點であらう。

感情生活を深刻にして行く第一の動力は、知的能力の發達と判斷力と反省力の開發である。青年期に於ける者は、その幼年期に於けるよりも、現在社會に對する自己の關係をより良く思考し得る例へば、家族員に對しても、學校の朋友、敎師、隣人、友達、同市民或は國民に對しても、更に進

んでは民族に對する自己の關係を考察し得る。而して之等の關係にある自己の義務に對する明白なる觀念、他人より期待さるゝ事柄に就てのより良き概念、又人に當然望んで可なる事柄に就ての概念等を得て來る。正義感、或は不正に對する深き感覺力等の著目されるのもこの時であつて、人は不正行爲の釀される特別場合をより良く了解して來て居る。更に彼に負ふ處の事彼の爲すべき事、彼の充すべき位置等に就てより大いなる觀念を得て抱いて來るものである。而して之等の觀念判斷は、情緒の性質と烈しさとを決定する。

情緒生活の質なり範圍なりは、青年期に於て擴大される、感情の弦は非常に多種類の刺戟に共鳴する。斯くして人々はより高く、より幾多の點に於て感じて來るのである。從來殆ど或は何等の印象を刻しなかつた對象物、場所は、今や深き持續的効果を起して來る。强烈な忍耐的友情は同性の人に形づけられ、異性の魅力と優美は、彼の魂に於いて微妙な神祕的効果を働かし始める。長者賢者に對する嘆賞と尊崇とは、又聖として認める存在に對する崇高と畏敬とは、他人より受くる親切に對する喜悅、悲しみの存在に對する悲痛、更に不幸の犧牲者に抱く同情等は何れも或程度迄は青年期以前には認識され得ないのである。

自然は新しく、より强く訴へて來る。青年は幼兒よりも色に對して自然物――生物、無生物――の形容に對して、日沒の美或は花の美しさに對して、海陸の暴風雨の威大さに對して、音樂と詩の魅力に對して、更に宗教信條の體を作り上げて行く大眞理に對して、共鳴する日數が少くなる。多くの青年は自己の中に自然界と親しく合致して一種の親しさを覺えて來る。更に社會的道德規定に、進んでは神聖視せる處の者に對しても亦さうである樣になる。

彼は物質界の事物の美にも美しく溶け込む、彼は往々一種の交通感情に浸つて、小鳥や花や風、嵐、日光、星、海、樹木、夕暮の景或は朝の光、或は故鄕の土さへも丁度友達の語らひの樣に彼の魂に語つてゐると想像するかも知れない。バルフォワー氏の美の世界の根本的靈性に就ての思惟に依れば、この期間の青年は神の王國から遠からしむるものとして現れるであらう。

道德的生活を圍繞する感情――道德主義の理解、道德價値の判斷、義務觀念と道德的誠直觀念等に於て生ずる――に關しては、この期は非常に興味ある特別性を供して、特に著しき教育的意義を與へる卽ち青年期に於ては、道德的感情は總ての個人的打算考慮を離れて各個人は道德に於ては純カンティアンである。而して、義務の純粹觀念に徹底的に彼を捧げる事を憧憬して、自己利益の各形跡から淸め去らうとする。之は青年が常に何處に於ても淸廉だと云ふ事ではなくして、青年の心中に潛む善に對する愛が、唯其の愛の爲に深淵なる情熱となつて、情緒の對象に對する得失を全然無視し

で高尚なる行爲に迄感動し得ると云ふ事を意味するものである。乃ち、道德教育の眞實の結果と云ふものは、此の高尚な私利なき道德的理想主義が生涯傷けられずして保持さるゝ樣な型式に於てなされるにあらざれば、恐らくより良好に說明され得ないであらう。

宗教生活に於ける感情に就ても、大同小異の事が云はれよう。若し宗教の根本とも云ふべきものが神への奉仕と人間への傳道――神と人類とに對する純愛の爲に――に於ける獻身に存するなれば、宗教は現に我々が考察せる此の期に於て、往々最も純潔なる型式に於て認められる。何者、人生の他時期に於て我々は自己に訴ふる個人性により烈しきデイヴオーション（Devotion）を感じ得ないから、個人性は捕虜にし奴隷にする。人間性は注意と興味を吸收する。小兒は可愛がるが、青年はより深刻にして魂を搖がす樣な經驗となる處の戀をする。夫故に尙深き高き意味に於て、青年の著目すべき宗教特色は救世主の人格に對する熱烈な愛である。人格的要素が勢力を占めて、人格に對する感情が優越して來る。勿論之は小兒の宗教の場合にも云ひ得る、その度に於て多少深淺の相違はあるけれども又人は斯くの如き事を附言したがる、即ち、どの時期をも通じて、宗教に於ける本來の而も永續的要素は見出されると――神學的組織の抽象的命題に於てにあらずして、神の人に對するデイヴオーション（Devotion）の深さと持續とに於て。――然れども此の神學上の命題型式は、遲かれ早かれ、持ち來られなければならない、と云ふのは、宗教と云ふものは智力に訴へねばならない、又訴へるべきである、丁度情感に訴ふると同樣に。けれども之等の命題は宗教生活の熱よりも寧ろ光を、力よりも寧ろ指導を與へる。成年期に達せんとする男女は、彼等の裡にある信仰を合理的に組み立てようと努める。之に反して、小兒期或は青年初期に於ては、人格的救濟者に對する個人的愛著の要素が宗教的經驗の濃厚なる特色である。

次に、斯くの如き事が考へに入れらるべきである、即ち青年の情緒的經驗は、假令時には熱烈で深刻であるとしても、確實さに於て、又その耐久性に於て缺けて居る。之は少しも不審な事ではない。と云ふのは、思想感情のより深き能力は今迄に放任されてゐて、抑制、持久と云ふ事は殆どなされて居なかつた。殊に青年の初期は平衡と堅忍とに缺けて居る。氣分と氣紛れとが著しくて、若し生活のキャンバスを彩色するとしたら、今陽氣な色をと云ふ風である。あらゆる總ての感情の種類を網羅して經驗されるのは此の期である。或時には『たゞ生きて居るだけの歡び』に陶醉し、時には又人生には足搔いて求めるに足る物が無い樣に感ぜられ、總ての事物が一切陳腐で單調で虛無となつて來る。けれども人生に於てこの時代程バラ色な繪の畫ける時はない。或は最も熱狂して未來を畫く時もある。同樣に、現在に對する生の歡びを傷ける如き陰慘

と絶望の不合理な發作の生ずるのもこの時である。人生の熱烈な恍惚的享樂は青年の特性であつて尙、多くの自殺者の出づるのも十二歳から二十歳迄のこの時期である。歡喜と陰鬱との兩極端間の動搖度も多樣である。多分、多數はこの兩極端に、極めて親しく走らない迄も、人生のこの時期に於て、感情――理性意志が未だにその制禦を完全にし得ない表面徵候である處の感情――動搖の經驗を持ち合さない者は殆ど皆無である。

直接に自己意識と關連する感情は、非常に明白に均勢と抑制との瑕缺を表示する。人格的誇と自己滿足の感情は非常に著しきものなるも、甚だしき自己不信と時には自己嬉厭の氣分に變じて來る競技に於ける、研究に於ける、音樂に於ける、文章に於ける、或は發明心と確固たる手を要する機械的仕事に於ける、何れも成功は法外の得意を齎し、失敗は極端な失望と陰鬱とを生ずる傾向がある。

又青年と云ふものは、率先して突進するの可能性を充分に有して居る、而して驚くべき程度の非常なる元氣を表明する。併しながら、退却の時は小兒や成年に於けるよりも遙に不細工を感じ、自己不信を覺えるのである。理解力に依る衝動が抑制されて來ると從つて行動に對して順次確固さと耐久性とが生じて來る、が併し、其の間は丁度傷つかざる小馬の如く、生氣潑剌であるが馬車に附すれば不細工で、行動には固定せる處がなく甚だ覺束ない。

若し、更に、起らんとする社會的性的意識に就て說明を試みれば、青年の前後をより能く理解し得るであらう。この意識の成長に伴はれて、自己確信の有力なる衝動が生じ、それと同時に有力なる懷疑心も擡頭して來る。自己の人格に於ける興味は、他人中のと同樣に、新しき攻勢的形式を備へ全く未知なりし感受性を發露せしめて來る。此處に於て、彼に對する考へにより敏感になつて來る。嘲弄は彼を深く傷つける樣になり、又自分を馬鹿にする事を恐れて、却つて、言語に於て行爲に於て。愚な過失を犯して、或は他人の意見に於てより卑下せしむる樣な不當行爲をなしたりして、病的な恐怖を裏切るに至るであらう。

青年期の意志

始春期に近づくに從つて、變化は著しく、發育は速かで、內的生活の平靜は亂されて來る。感情•衝動•本能•情慾•食慾等は新しい力を以て行動して、抑制問題が暫時は困難になつて來る。前にも一寸記して置いた如く、此の期は氣分、ムラ氣、空想、感情動搖の時代にして說明のし難き時期である。扨て、此の變換感情性は氣分の行爲に及ぼす影響は甚大なものである。夫れ故に青年を最も變り易きものとして認容して居る。彼れの興味は生理狀態に依つて消長し、行動は此の興味に關連する。今、無生氣で倦怠し切つてるかと思へば、次の期間は精氣橫溢して感奮し

て居る。即ち此の期に於ける男女程徹底的に怠惰で『策なき』ものはないのである。又恐らく、他の如何なる者も斯樣な莫大な精力を以て彼の全心を傾け居る企業にさへも自分を投げ出す如き事はしないであらう。又青年には、全く精根つき果つて、些少の行動も臆劫なる時があると同樣に、無爲が耐へられなき重荷と感ぜられる時もある。何事にても一時に急激に行はれる、斯樣なる場合の精力は實に吃驚に價するものであつて、その時の仕事の量は殆ど信じ難きものである。殊に優勝と競ふ競技に於ての如きは、總てを棄てゝ熱狂して戰ふのが見られる。

實驗し比較せん爲に、九歳から十二歳の青年と、十三歳から十六歳の青年、及び十七歳から二十歳迄の青年を並列して研究して見よう。先づ意志の發達見地から始めると、次の如く述べられやう。此の第一時代（九歳――十二歳）に於て初めて意志發育の見地からして注目すべき事實が現れる。觀念力の範圍が著しく擴大して來るのは勿論であつて、新觀念が漸次行動に關係せんとして居る。而して進歩が意志の獨立自治の方向になされて居るのも事實である。が然し畢竟性癖を作る樣に總てがなされてゐるのは此の期に於ける最も注意すべき特色である。

青年期に於ては、前期の特性を實行して習慣を型造りつゝ、外部から内部への抑制の轉換が加速度に行はれる、そして尙此の抑制は決して此の期（十三才――十六才）の初半期を經ても堅固に成就されない。今迄に云つて來た如く、平靜は變じ易く、感情は優れて居る。從つて靜に苦心して考へる事は容易ではない。全然氣分と空氣とのムラ氣である。後半期（十七歳――二十歳）になつては、自動機械は整調して來て、有効なる自治狀態に入る。思想は感情を支配し、衝動から發する行動は少くなつて來て熟考の結果が多くなる。觀念力の高等中心は個人の意識内に於ける印象に應じて含蓄される。印象は表現に發するも、小兒の如く、直接反射的でなく、青年の如く、習慣的反動作用に於て廣大でなく、又青年初期に於けるが如く、感情の直接結果ではない。動機からの直接行爲言語の嚴格なる意味に於て――は、この時期に於て前期に於けるよりも遙に普通に起る。而して成年者の人格ともなるべき諸要素はこの時期に試驗せられて既に提供されて居るのである。成年と未成年との相違は量の相違である。如何なる規範的小兒にも、内的抑制の要素は全然缺けては居ない。而して如何なる成人にしても、此の抑制は徹底的に不斷で、信ずべく完全ではあり得ないのであるが、併し十代（十三歳――十九歳）を通じて、自制の精神は著しく訓練される。若し自制がこの期の最後迄になされるにあらざれば、强健にして釣合の良き男性を獲んとする場合に、少くとも、身心の瑕缺情態に於てか、或は教育課程失敗の何れかに於て、損失を免れ得ないであらう。「傷つけられたる兒童」の場合は、年少時代に於ける外界の抑制がなされなかつた爲に、内部抑制能力が發露す

る間に矮小されてしまつたのである、而して全生涯の計畫も傷つけ害はれたのである。

抑制は消極的にして積極的である。後者に於ては行爲の締りと整規を意味し、消極的とは、好ましからぬ行爲の抑壓、或は斯くの如き行爲の刺戟禁止を意味する。此の兩者は何れも重要であり、教育的見地からしても、禁壓の力は敎導の力程必要であり、而して兩者は共に習慣行爲を組み立てる上に定つたものである。

肉體の行動に關して、抑制は四肢の使用を巧妙にし、刺戟に對しては速かなる反作用を行はしめ行動するに當つては元氣で精確ならしめる。又抑制は充分なる意味に於て他人の言葉に對して獨立要素を齎らすものである。これは決して抑制力の發達せる人が他人の言を入れないと云ふ斯くの如き意味ではなくして、他人の言に對する奴隷ではないと云ふ意味である。故に事を爲さんとする時には總てを離れて、周圍の影響に拘らず自己の素志の下に行動し得るのである。

模倣性と獨立性は共に此の時に發展して來る。模倣性はより意識的にして熟慮的（若し此の言葉が許されるなら）である。具體的人格と人格とは全體として心に印し、之等の人物の特異的行爲を反復する。模倣は一人間行爲の一小部分よりも寧ろ、人格全體の大部分に關聯する。

此處に至つて模倣と獨立行動性とは共に順調に進んで行く、何者、斯くの如き模倣は獨立行動と一つも矛盾しない、而して兩者は同じく可能である。と云ふのは、心は之等の全體を把握し得る能力がある。即ち一方に於ては、模倣價値ある全人格と、他方に於ては、行爲に價すると認められる模範か或は一種の行爲等が之である。

大多數の基本的筋肉が疾くより活動して、從的筋肉がより遲く發達して來ると云ふ事は、筋肉拘束と能力發展の周知の法則である。丁度青年期前期に於て、大部分の基本筋肉は多分に使用されて比較的よく發展して居るが併し、愈々青年期となつては、特別熟練を要する微妙な筋肉は、益々使用されて來る。恰も自然がこの期を通じて青年を天職の爲に年期奉公に出し、彼れの人格設備の方法が總て奉仕である樣に、更に、誰れでも、或はどの群衆でも、いつ何時でも要求に應じられる樣に望んでゐるらしく思はれる。

習慣は生涯の何れの時代に於ても重大なる問題であるが併し成熟せる以後に於けるその重大さは主として所謂變じ難き事に存在する。換言すれば、慣習は殆ど全然未成年期前に於て、形成され破壞され、變換され得るのである。その時代が、心理、生理的機關の整型し易く感じ易き性であるのである。何者、後期に至つては、可塑性感受性が甚しく減少してしまふのである。

習慣の價値重大さに生きようとするに當つて、人々は習慣の他の側面を忘れてはならない——習

慣型成は夫れが與ふる利益程危險を有する事、更に、習慣型成は教育の單なる目的ではない事を。——人格の最高の型は、全然習慣化されたる生活を望む人でなく、寧ろ、發達したる清新な木能力の人であつて、必要に應じては如何なる習慣をも打破し、時には習慣に依つて劃されたる線から脱却し得るの人であるべきである。

習慣型成は、生活の始まると同時に始められ、生涯を通じて——假令成熟生活、老年に於ては其の力が甚しく減るとは雖——續行される。兒童期はそれに取つて黄金時代ではあるも、青年期も亦此の點に於て、殆ど重要でない事はない、事實上二方法あつて、兒童時代に於けるよりも寧ろ青年時代に於けるものが習慣に關してはより重大である。何者、この期に於ては、その内容に就てより明確なる意識と、より決定的なる目的とを以て、習慣付けられるからである。兒童は無意識にその習慣を型づくる事、即ち外部より來る暗示に應じ、又はその價値に就て何等の辨別なしに——之に反して、青年に於ては、外界よりの暗示に獨立して、更に人格の決定に多大に關連して好ましきか、然ちざるかを識別して、意識的に習慣を型くるであらう、否、往々型づくるのである。換言すれば、青年期に於ける習慣型成は、兒童期に於ける夫よりも、更に自己に起原し、自制せられたるものであらう。第二には、展開せる人生觀——小兒期から區別すべき青年期の表象なる——は、習慣型成の範圍を擴大し、一人の習慣の意識的相互の關係を習慣系統らしきものになして行く。各單習慣は、他習慣に關係せずして獨存するものでなくして、自餘の習慣とより密接なる關係を結び、而して全系統の要求に從つて變化するのである、即ち、何事に際しても、相互の關係は、より初期にあり得るよりも、次第に進歩して來るものである。

第九章　現代青少年の思想

思想の問題に就ては青年のみをとり出して述べることは困難であつて、一般思想界の狀態から述べなければならぬが、これは到底本書に於てその詳細を盡すことが出來ないから大體に於て今日幾多の思想研究家の取扱へる論題を了解したるものとして青年期の思想中その主なるものを述べて見たいと思ふ。唯現今思想問題に於ては一つの疑問が横はつてゐる。それは單にこれ迄の學者とか極く一部の者によつて唱へられたる思想なるものを殆ど全體の國民の思想なるものとしてこれに對して警戒を加へることである。却つてその爲めに危險なる思想の如きものも容易に傳播する恐れがある。又新聞とか雑誌とかに於て偶々取扱はれた問題が、それが一般的の國民思想であると早合點し

て之に防壓の手段を講ぜんとするが如きもこれである。これは善良なる方面に於ても同樣であつて左程にもない事柄が誇大されて、それが一般の國民性であるかの如く推賞するものも少なくない。實際に於て農村などの現狀を調べて見れば新しき思想の如きものは殆どその影響なるものが現れてゐない位である。寧ろ或る意味に於ては全く舊來の思想に捉はれて、而してそこに新時代の文化に適應しないやうな事實も多々あるのである。以下述べる事柄に就いても右の樣な考から全般的ではないが斯かる思想上の傾向が現れたり、又は現れんとしつゝある曙光が見えてゐると云ふに過ぎないものも取扱つたのである。

青少年の思想的矛盾　地方青少年の風俗や或は思想の表面を見て所謂農政家とか地方改善家とか云ふものは恰も國家の一大事であるかの如く考へてこれが對應策を絶叫してゐる。併しながら吾人の考から見れば、その農政家とか地方改善家とか稱するものゝ頭腦の働き方は少くも時代を解して居ない。而して又青少年自身の眞の行藏をも了解してゐないものの如くに思はれる。彼等青少年は思想的には表面上甚だ新らしいことを云ひ或は或種の行爲を眞似ると云ふことはあるが、その行爲には眞の思想的根據と云ふものがないのである。即ち單に新聞とか雜誌とか乃至は偶々新しい思想家の講演を生かじりした結果、先づ口に出してこれを試みに發表して見ると云ふ位に過ぎないのである。それ故彼等の行爲を見又その行爲と殆ど同樣なる行爲に對する考を聞いて見ても、殆どそれは固陋の思想から割出されてゐるものが少くない。例へば青年團にしても團長や副團長を小學校長とか町村長から奪ふと云ふことが恰も彼等の新思想であるかの如く考へて專制政治から民衆政治に移つたかの如く考へてゐる、併しながら一旦これを奪つた後に於ては如何なる態度をとるかと云ふことを考へて見ると彼等の中の野心家の一二人が出て團長となり副團長となり、而して前にも勝るやうな横暴專制の政治をなすのである。その結果は團員は殆ど團長や副團長を信任せずして半歲もたゝぬ中に團體なるものは瓦解するか或は收集することが出來ないやうになるのである。是等は青年期の思想の中に殆ど根柢なるものが無くて矛盾が横はつてゐる證據である。

青少年の思想が事々に矛盾で以て滿たされてゐるとは云へないが元來青年の思想なるものは相反せる二つの思想が同樣に介在してゐると云ふことは事實である。これは今日の思想ばかりでなく總ての思想上に於て見るところの事實であつて、相反せる思想が共に正なりと考へて多少の時間を異にして現はれるのである。夫故に彼等の思想なるものには之に深い根柢のある思想が外部より影響すれば他の反せる思想なるものが段々と影を薄くするに至るのである。思想は思想を以て改善せよと云ふ言葉は明かに此の場合にも適用される可能性を有してゐるものであつて、青少年の一言一行

を捉へてこれを抑制するとか 或は之を表彰することは共に彼等の思想を邪路に導くものである。

思想的變化期　思想は時々刻々として變化をするものであるが、最もその變化を來し動搖する時代は青少年期である。各種の思想に於てその變化する、又は發生する年齢は必ずしも同樣ではないが、一般に最も思想の變化を來たす時代は年齢から云へば十五六歳から十九歳二十歳頃の青少年である。これは前章にも述べた如く心理的には一大驚異である春機發動の初期から始まるのである而して此の時代の青少年は事々に一の懐疑の念を起して之を否定せんとする傾向が表はれて來る。或は架空的な思想が突然に表はれて來て冒險的な事業などを企てるやうな考が表はれて來る。けれども又一方にはそれに何等かの神祕的な意義を附するやうになつて來て總ての事柄を神聖化せんとする傾向も表はれて來るのである。地方の青年などが都市に集まると云ふ年齢も此の時代であつた彼等は眞に思想的に田園を忌み厭つてゐるもので はなく寧ろ家庭や自己の屬する鄕土の爲に貢獻せんとして先づ都市に於て成功をなさんとして譯もなく飛び出すのである。彼等の先づ都市に出でんとする希望には行通不便なる自己の村をして之に鐵道を敷設するとか 或は都市と同樣に色々の文化的施設を試みたいと考へ、それにはどうしても自分が犧牲になつて都市に於て成功しなければならぬと考へたり、或は自分の家が貧しい爲めに之をして常にあこがるゝ富豪のやうな生活を父母や兄弟に爲さしめんとするやうな誠に可憐しい考から鄕里を出る者が少くないのである。斯かる事實を承知しないで世の先覺者と稱する者が頭から農村青年の都市集中熱を誹謗するが如きは 誠に思はざるも甚しいものである。

この思想的變化期を順潮に經過せしめて而して又思想的に墮落して 退嬰的な氣風を釀さないやうに力めむるのは甚だ肝要なることに屬する。唯こゝに注意すべきことはこの期に於て一方に偏した思想的影響が彼等の上に與へられてはならない事であつて 普遍的な感情の教育と共に理智の教育が施されて行き、又意思の方面に於ても無理なる鍛練主義が加へられてはならない。然るにこの時代の青少年は多くは學校教育から離れて社會に放任されてゐるのである。之が青少年團體の起らねばならぬ原因の最大なるもの〻一つである。

現代青少年の思想的傾向　前述の如く現代の青少年の思想は勿論 時代思潮の影響を受けて大なる良い傾向も又惡い傾向もある。併しながらその傾向は必ずしも吾々が考へた如く根柢の深いものでもなく又惡思想と云つても之を改善し得ない程度のものでもない。而して吾々のやうな多少古い時代の考を持つて養はれて來た人間とは違つて新時代の青少年はその古い思想と云ふものに就て全く了解のないのは之は已むを得ぬ事である。それは維新以前に生れた者が武士の家庭に育つたもの

であれば君の馬前に討死をするとか主君の命ならば切腹をも辭せぬと云ふが如きことも殆ど無條件で了解されたのであるが武士とか大名とか云ふやうなことは歴史の教科書以外に遭遇しなかつた吾々には殆どその意味が了解されない許りでなく頗る馬鹿げたき居じみたやうに思はれてならない。それが殊に明治末期に生れた現今の青少年には全く想像をもされぬ事柄であらう。だから或る意味に於ては現今の青年には悪い方面の舊思想と云ふものも殘つてゐないから、これが善導も亦玆に思を致す要があらう。一面青少年の指導に當る者は自己本位に考へて彼等の上に壓迫を加へないと云ふ必要があらう。老人の冷水と云ふことは何時の時代に於てもその時の青少年から嫌はれることであるが、特に今日の如き文化發達の急激なる時代に於ては五年十年の差なるものが非常なる相違を來してゐると云ふことを知らなければならない。

數年以來頻りに青年大會なるものが行はれてゐる。その最も大なるものは全國的に開かれたる全國青年團代表者大會であるが、その際に於ても常に青年と指導者階級に屬するものとの間には意見の衝突が行はれてゐる。勿論青年の云ふところも前述の如く思想的の矛盾から來てゐるものも少くないが指導者階級の言動も前述の如き洞察の足らないところがあるやうに思はれる。青年は青年として論議せしめてもしかく突飛な結論を得るものではないにも拘はらず指導者階級の者は常にこれを抑制せんとする態度を放棄しないで又吾々は青少年を了解せりと自認せる者もそれはその人自身の青年時代であつて現今青年の思想とは相容れないものである。

兒童生徒及びの思想及び訓練に關する調査

小學校兒童

○思想及行爲に於て時勢の影響を受けて居ると認められたる事項

(一)思想及知識としての影響して居ることは少ない。

(二)影響が幾分あると認められるのは尋常五學年以上である。

(三)時代思想に關係ある「デモクラシー」「ストライキ」等の語を記憶して居ることはそれ程深くはない。

(四)是等の語の意味を明に解して居るよりも半解又は全く知らない者の方が多い。

(五)是等の語に對する善悪正邪の判斷を誤ることは少い。

(六)思想が直に行爲に影響することは少い。

行爲は之等の思想より來る社會現象に對する漠然たる模倣に過ぎないことが多く幾分自由な思想行爲が行はれるやうに見えることもあるがそれは兒童本來の性質の反面が比較的自由に發現したもの

と見られることが多い。その行爲の大體を概括すると次の如くである。

(一)學用品、服裝、金遣等に於て奢侈贅澤の風が稍々著しくなつたこと。

(二)物質、金錢を尊重する風が盛になつたこと。

(三)義務よりも權利を重んずる風が起つたこと。

(四)何事も自己中心に考へる傾が生じたこと。

○右の思想及行爲に對し訓練上注意並に施設して居る事項

(一)國體の尊嚴を自覺せしめ國民道德の徹底を圖ること。

(二)敬神崇祖の精神を涵養すること。

(三)神宮遙拜、神社參詣、神苑掃除、就學卒業の際神社に報告すること等 種々の施設を講じて實行すること。

(四)冷靜に思考することを奬勵指導すること。

(五)勤勉節約の精神を鼓吹し之を陶冶することに力め、學校作業、家庭勤勞を奬勵指導する等各種の作業によりて訓練に力めること。

(六)各種の施設を講じて自治的訓練を與へ義務服從の美德の涵養に注意すること。

(七)共同一致の精神、社會奉仕の念を盛にして各種の施設を以て之を陶冶訓練すること。

(八)教師と生徒と接觸する機會を多くし、個人的指導と感化とに力めること。

(九)一切の注意及施設は常に家庭と連絡を保ち意志の疏通、訓練の徹底に力めること。

(一〇)新聞雜誌其他課外讀物に注意し之を指導すること。

中等學校生徒

中等學校生徒は全體を通じて影響を受けて居ることは小學校兒童よりも大であります、之は其の年齢が長じ智識も進み讀書見聞の機會が多いからであります、其の特徴は稍々智識的になり思想的になつて居ることであります、然しそれは深く共鳴し且つ研究すると云ふやうなことは殆どなく、やはり思想の流行に感化されると云ふ位の程度である。

新思想に關係ある語彙の如きは之を全く知らない者が各學年ともに常に二三割乃至は八九割もある位である。

それは幾分の影響ある思想の何より來て居るかと云ひますと、新聞雜誌以外では文學書より來ることが最も大で、經濟上の思想を受けることは少く、其の愛讀書を調査したのに依ると、純思想及び經濟社會問題に關するものは殆んどなくして、文學書が最も多數を占め次で修養書と云ふやう

な風である。

中等學校生徒の行爲の方の影響は大體小學校兒童の受けたるものと大なる差異はありません、只幾分之に智識的分子が入つたに過ぎません、そして思想に影響された深い確信のある自由放縱な行爲ではなく一時的の模倣に類することが多いのであります。女生徒は之と稍々異つた傾向を有し、所謂婦人解放、母性保護と云ふやうなことが其の注意を惹き、稍々共鳴して居るやうな風が見える然し之とても深くそれを研究し理解して主張せんとすること之なく矢張り流行的であり模倣的であると稱して宜しいと思ふのである。

訓練については中等學校に於ては小學校よりも智識的に取扱ひ新思想の起源特長を明にし其の正邪、得失を理解せしめ國家及社會組織が外國の夫と異なる所を充分に會得せしめ、淺薄なる同感共鳴でなく深く之を批判し理解する必要を知らしめ其の新思想に對する態度を正しく導き、新思想にして採るべきは之を採り捨つべきは之を捨て以て我が國體、國民性、國民道德に同化することに努めねばならぬことを常に折に觸れ機を見て反覆し、思想の善導に遺憾なきことを期して居ります。

時勢の影響は不良の方面丈けでなく良好なるものも亦あることを忘れてはならぬ、小學校、中學校を通じて其の良好なる影響を擧げると次の如くである。

(一)自己及び社會に對する自覺が生じ、人格實力の修養の必要を感ずるに至つたこと。
(二)自主自立の精神が起り自學自習の念が強くなつたこと。
(三)智識慾が增進し讀書を好む傾向が著しく、理科に關する興味を喚起したこと。
(四)體育の大切なことを自覺し、身體を鍛錬する爲め運動遊戯柔道劍道等が盛になつたこと。

以上の良好なる影響に對しては出來る丈け之を奬勵すると共に、其の間に生ぜんとする弊害に對しては極力之れが矯正指導に力めて居るやうである。

思想及行爲が大體健實なる狀態にある一例として或る高等女學校に於て維持すべき舊道德、採るべき新思想につき第四學年生徒六十五名に質問し、率直に記さしめた結果は次のやうな工合であつた。

維持すべき舊道德		採るべき新思想	
一、忠孝	六三	一、經濟思想	五五
二、祖先崇拜	六一	二、人格尊重	五三
三、皇室中心主義	四七	三、徒食安逸を排す	四七

四、感恩報謝	四三	四、社會奉仕	四〇
五、名を重んずる心	二九	五、時間尊重	三七
六、忠君愛國	二六	六、勞働尊重	三六
七、敬神	二五	七、女子教育奬勵	二八
八、武士道	一九	八、日本化したる自由平等	二六
九、家族制度	一五	九、女子の自覺	一九
以下略す		以下略す	

嫌農思想　都市の發達につれて玆に農村民が其の鄕土を捨て都市に集中すると云ふ態度を高め來つたことは國の東西を論ぜず皆一樣の現象である。之を都市集中熱と稱しまた嫌農思想或は離農現象とも稱するが共に其の觀察の異なる點より名づけたものである。我國に於ても年々歲々東京や大阪の如き大都市に集まる農村青少年の多いのは勿論であるが中都市へも多數のものが集まりその數十總年に於て大都市に於けるものよりも多いのである。卽ち都市の發達は農村より中都市の發達となりその勢の醞釀せらる所が遂に大都市の發達を見るに至るのであつて民族集中の現象も此經過を履むことは云ふまでもない所である。いづれにせよ農村の青少年が都市へ都市へと集中するの現象は爲政家の頭を惱ました案件であつたが遂に其の底止する所を知らない位であつて、今日では根氣負けのした傾がある。何故に農村を嫌ふかと云ふ理由に就いては最早論ずるの要もない程度に世人の熟知せる所であるが農村が自然に於て惠まれてゐると云ふことは都市が文化を以て鄰いてゐると云ふことと物質的生活に於ても精神的生活に於ても豐富なる內容を有せるに比すべくもないと云ふことで說明される。農村の興廢と國家存立の關係と云ふやうな大問題を眞向から振りかざして青少年の都市集中を思ひ止まらしめようとしてもそれは遺憾ながら大功を奏しない。國家思想などはそうお安くこんな場合に引き合に出すべき筋のものでない。生活と云ふことを眞面目に考へてゐる現代の青少年の前には今少し切實なる指導原理が與へられなければならぬ。世の識者なるものが徒らに慷慨悲憤することは彼等に對しては何等の感憤をも與へないで浪花節を聽いた程の價値もないことを承知しなければならぬ。

農村に於ける生活の困難と云ふことが家庭なるものゝ觀念を薄弱ならしめその結果として容易に都市に集まり得しめたと云ふことも考へなければならぬ問題である。

農村をして都市の色彩を帶ばしめると云ふことや凡ゆる文化的施設をなすことに依つて嫌農思想

を弱めしめることが出來ようと云ふのは既に到達した議論であつて誰しも異議を有するものがないが、その實行に至つては容易な事ではない。

第十章　修養とは何ぞや

修養の意義

吾人は倫理學者や修養專門家の唱ふるやうな修養にはもう厭き厭きした。平凡な人間となると云ふことが人生の目的でなければならぬ現代に於ては凝固した修養法は用をなさない食ふものも食はないで身體を鍛錬すると云ふことは生理學や營養學の助けを借らずして判明する許りでなく現代人心の傾向と相反するものである。今日の時代に甲冑を被つて白晝都大路を歩くやうなもので武勇傳中の英雄や豪傑のやつたやうな鍛錬や何々大師の難行苦行の眞似をすることが修養であると考へしめてはならぬ。青少年の修養を說くものが此の間の事情を悟り得ないで徒らに修養修養と稱して一種特別なものゝ樣に云ひ振らすことは一考を要することゝ信ずる。

修養は平凡な中に行はれなければならぬ。二六時中の吾人の生活にも表れなければならぬ。而してその方法は心理學や教育學に基礎をおいたもので組織的であり秩序あるものでなければならぬ。國家の安危を心配する許りが能でもなく、また竹箒を以て掃除をすることが修養でもない。要もない勞作をなして鍛錬と考へるよりまづ田圃へ出て芋でも掘つて見るのがよい。汗を流すことのみが修養ではない。汗を流すの必要ある場合には玉なす汗を流すもよいが、强ひて必要もない時分に之を行はしめるのは青年をしてその思想的生活を空粗ならしめ虛僞に陷らしむるものである。

由來本邦人には妙な癖があつて何でも彼でも型に作り上げたがる。修養會と云つて鹿爪らしい會を開いて見たりまた何か一の方法や形式によつて修養鍛錬を試みようとする。そうしてその一定の經過をなしたものには何段とか何級とか或は何々とか云ふ階級を與へて見たり證明書や證書を與へる。何々敎の敎師のやうに納金額の多少によつて階級の高下がある程ではないが、凡ての事を制度化したり習俗化したり模型化する風がある。道德の上に於ても然りであつて何か一定の型を拵へるとそれで發達もなく千篇一律な狀態を繰り返すのである。

修養の根本義は自己の覺醒に在る。而して自己の覺醒は自己の發見に發足する。靜思靜觀して自己なるものを發見しその生活價値を認識して自己充實を計らしめることが修養の本義でなければならぬ。感激主義や鍛錬主義が全然不必要と云ふではないが、その前に當つて先づ冷靜なる反省をなさしめ平凡な青年時代の生活の純化を計らしめなければならぬ。本能厭迫の生活が修養の本義と考

へてはならぬ。少年の時代には遊戯や作業が彼等の生活の大部分をなすものであるから凡ての修養訓練は之に假托するの形式をとらねばならぬものである。青年時代に至つても彼等の心理的傾向に應ずる必要から成人に對するやうな無味乾燥な事項や功利的見地の企圖が加へられてはならぬ。斯くて何の方面より見るも極めて順調なる理智的教養の必要なることは云ふ迄もない所である。彼のボーイスカウトが熱烈なる愛國者にして而も軍人なるボーデン、パウエル將軍に依つて提唱されたるにも拘らずた現代の學校教育以上に心理的條件や生理的條件に適應せる教育法を採用せるかを見れば世の修養を論ずるものゝ再考三思を要することが少なくないのであらう。

修養の方法　前來述べたる通り修養は全般的でなければならぬ。身體の發達に對する事項も智德の涵養に對する事項も感情意志の陶冶も包含されてゐなければ眞の修養と稱するには至らない。併しその方法に至つては之を一括して行ふもまた分割して行ふも隨意であるがその一方にのみ偏したりまた各方面が孤々分立することを許さない。

學校教育の如きはその本質より見れば心身兩方面に對する系統的修養の施設であるが、それにてもなほ滿足なりと云ふことが出來ない。それは前にも述べた如く學校兒童及生徒と稱しても學校許りの教育や感化にのみ包圍されてゐるものではない。廣い社會の中に包含されまた家庭の一員である。されば此各方面に於て相當の修養訓練が行はれなければならぬ。又單に學校や社會や家庭の一分子ではなく一個人としてもその生活部面を有するが故に自己修練なるものも行はれなければならぬ。かくしてその青少年の時代に於ける修養訓練はその後に於ても持續すべきものであつて打ち切りと云ふ時期はない。

第二編　青少年の社會的教育

第十一章　個人生活より社會生活へ

從來我が國民道德の特徴は同族間に於ける團結心即ち家庭を重んじ祖先を崇拜すると云ふ點に在つた爲め氏族に於ける優秀なる點を誇ると云ふ方が重んぜられて多くの場合に於て一個人の人格なるものは十分に認められなかつたのである。即ち個人は家の爲めにはその生活の痛苦を顧みず、或は名利を捨てゝ、なほその家名を汚さないと云ふことに努めなければならなかつた。また更に進んではその氏族間に對しては犧牲的の行爲を辭しなかつたのであると云ふ點もあつた。これを更に押し廣めて行くと、或は忠君愛國の思想となり祖先崇拜の思想となつて表れてゐたのである。誠にその發達が自然であつて極めて純美なる國民道德が作り上げたのである。併しながらかゝる點より一方に於ては他人に對する考へと云ふものは僅にこの知合關係の人々のみに對して表はれたに過ぎないので、所謂世俗に云ふ、人を見れば盜賊と思へ、また男子家を出づれば七人の敵あり、或は我が國の精華と稱せらるに武士道の如く、如何なる場合に於ても背腹に敵を受けて居ると云ふ樣な考を持つて、一刻一秒の油斷も仕ないと云ふことが男子の本領であると考へて居たのである。これ等は單に想像のみでなく、歴史の傳ふる所に於ても然りである。又今日なほその片影として殘つて居る我々の道德や社會的生活を見るもこれを親ひ知ることが出來るのである。これを要するに、我が國の道德なるものは知合關係の家庭や社會以上には現れなくつて、その主たる國民生活の內容なるものは、所謂個人の方面に過ぎなかつたのである。個人は努めて道德を守り又勤勉であり正直である。或は他人に對しては慈悲を施すと云ふやうなことや、その他各種の道德的行爲をなすことを要求された。更にこの考へから進んで行つて、個人は最も堅實なる道德家でありまた家庭や近隣間の生活なるものも相當の形式を備へて居つて卽ち道德的であつたのである、君子は獨を愼むと云ふ樣な道德や或は立志成功の道德の如きものも實はこの時代の考へであつて畢竟個人道德の表現に過ぎないものである。或場合に於ては勤勉力行すると共に社會の生活から離れて、而して巨萬の富を得たもの、或は他人を排してまでも自己の地位を高めたと云ふ樣なものを賞揚せんとする風もないではなかつた。

かゝる點から今日の如く、社會が廣くなりその交際範圍も廣くなつて來た時代に於ては誠に物足

らぬ感のする點が少なくない。固より個人を離れて社會なるものゝ存在せざることは云ふ迄も無い處であるが、元來個人は社會の一分子として而も之と離る可からざる一部分として存在する點に於て初めて意義を有するものである。この事は平常の場合に於てはこれを知る事は難いが、非常變災の場合にあつては容易にこれを窺ふことが出來る。恰も今回の關東大震災の後の場合に於ては、個人の生活又は個人の道德なるものが何等の權威がなくて、社會の生活乃至社會の道德と云ふものが非常なる力を有するものであると云ふことが解つたのである。尤も今回の變災に於ては只そう云ふ缺陷を知るのみでなく、如何に現在迄の社會道德が薄弱であつたかと云ふことが暴露されて、我々個人の生活が相當に脅かされ殆んど支離滅裂なる不安の狀態に陷つたか、と云ふことを實に體現せしめられたのである。

家庭と社會　我が國の國民生活の特徴は世界に誇るに足る可き家庭なるものの存在すると云ふ點であつた。これは誰人も疑はぬところであるが、吾人は仔細にこれを考へて見て從來の皮想的な考が多少之に對しても誤まつた解釋を下してゐたと云ふ點を發見する。之に就ては曩に余は「社會教化を中心としての學校經營指針」なる書を著して詳しく述べておいた通りであるが、我が國の家庭なるものは、實はその歷史的意義に於ては多少權威を有するものであるが、今やその權威なるものは漸々と失墜されて來た。さうしてその家庭の教育的意義や或は道德的意義或は生活上の價値と云ふ點に於て非常なる缺陷を暴露しつゝあるのである。これは單に形式上に現れた所謂見窄らしき九尺二間の小家庭がその家庭としての權威の何處に在るかを發見するに苦むと云ふ樣な點より窺はれる許りでなく、更にその精神的方面を考へて見ても何等の教育的意義を有してゐないと云ふことが解つて來たのである。卽ち我が國の家庭では家長の權限と云ふものが非常に大であつて、總ての家族は家長の命令の儘に動かなければならぬと云ふ樣な地位に置かれたる點から見れば、非常なる權威を有する如く思はれるが、實はこれは從來の貴族や資產階級の家庭に於てのみ見ることの出來る典型であつて、之を一般庶民階級の家庭にも適用せんとする事が既に誤つて居つたのである。最も古い時代の樣に制度を以て個人の職業の自由とか或は信教の自由などを壓迫した時代に於ては、そは或はこれ等の庶民階級の家庭に於ても家長の權限と云ふものを伸ばすことも出來たであらうが、今日に於ては單にそは名のみであつて、幾多の青年や少女は殆んどその家庭的意義と云ふものを認めないのである、卽ち自己の欲する所に從つて家庭を捨てることは殆んど弊履を捨つるが如き有樣であつて、旦に都門に去り、夕に家鄕に舞ひ戻つて來ると云ふ樣な事實は平常の茶飯事の如く考へて居る。而して又生活の脅威なるものに伴なつて彼等は私的行動を重んじ自己の將來と云ふこ

とを考へ、家庭に對する奉仕の行動をなすと云ふ事が出來ない事情が存在して居るのである。

家庭の教育的意義に於ては又頗る疑はしいものがある。我が國の學校教育に在つては、家庭に於ける兒童や少年の行爲にまで尤もらしい訓練を施さんとしてゐる。即ち或は日常の行事或は父母長上に對する禮或は家庭に於ける自己の勉學法等を懇切丁寧に教導して居るけれども、それも極めて一部の上流家庭に於てのみ行はるゝ形式であつて、大多數の家庭に於ては殆んどこれを實行する餘裕を有しないのである。屢々吾人は學校教育を視察してこの感を深うするものである。則ち僅かに尋常小學一二年生の子供に對する修身教授を見るも、教師は諄々として父母に對する行儀作法を教へて居る。即ち朝に床を出でゝ、顏を洗へば先づ父母や長上に對して朝の敬禮をなす事を要求し又學校に登校せんとする際に於てはその旨を告げ、學校から歸れば更にその挨拶をすると云ふ樣な事を何所でも教へて居るが、かゝる事が實際に行はれ得る家庭は幾許あるかと云ふことを考へない。即ちこれを農村に見れば、殊に兒童が起床をして洗面をする頃には既にその父兄は田圃に行つて土を耕して居るであらう、また又山に登つて草を刈つて居るであらうと云つた樣な狀態である。またその家庭に於ては、食事をする所も、寢る所も殆んど別ちのないやうな簡易な設備であつて、到底彼等兒童が落着いて勉强をするやうな設備も出來て居ないのである。かゝる狀態から考へて見、また一方その父兄なる者の教養程度を考へて見ると云ふと、家庭の教育的意義と云ふものは殆んど認める事を得ないと誰しも承認せざるを得ざる所であらうと思ふ。尤もその教育の程度より云へば近時非常な勢で普及發達し來つた學校教育の影響を受けて、父兄や母姉にも相當に學識を有するものも尠くないやうになつたのであるが、彼等もまた學校時代に於ける訓練と家庭に於ける生活とは殆んど無關係のものであつて、學習時代と現在の生活とは別人の感がある位である。從つて今日の學校教育の如きものは、兒童及び少年の生活に對して二重の負擔を與へて居るのである、換言すれば學校に於ける道德と家庭に於ける道德との間には大なる距離があるものである。その距離を近づかしめると云ふよりも、寧ろその距離のあると云ふことを了解しながら生活せしめると云ふ樣な妙な狀態に妥協せしめて居るのである。かゝる點から考へて見て今日の學校教育は著しく家庭は勿論社會から離れんとして居ると云ふ事を知り得るのである、從つて家庭の生活から社會の生活まで導いて行くと云ふ上に於ても大なる權威を有しない。

社會生活

社會生活の必要なる事は前來述べ來つた所によつて瞭かであるが、特に我が國民の教育上に於てこの感を深うするものである。即ち日本の社會には眞の意味の社會精神又は社會統制と稱するものがなくつて、前に述べた如き親戚、故舊、緣故者の知合關係以上に出でないのであ

る。今日尙地方に於て見る所の部落的慣習や乃至血族的慣習と云つたものが如何に彼等の心を支配して居つて、自治體である町村乃至は更に進んで府縣の自治と云ふ事にまでは進んで居ないのである。自治體の如きものは既に相當の年月を經て居るが、眞の意味の自治なるものは行はれて居なくつて、尙血族關係から發達したる所の部落的思想に支配されてゐる。只その利害が相一致すると云ふ點に於て、又は制度の上に於てのみ自治體なるものを認めて居つて、自治の爲には或は自己を犧牲にし或は部落を犧牲にして最も必要適切なる施設を講ずると云ふが如き點に對しては殆んど考が及んで居ないと云つても過言ではない。

近來社交と云ふ點に就ては相當考へられる樣になつたが、これも單に從來の知合關係の生活を押擴めたに過ぎないのであつて、眞の意味に於ける社交なるものは發達して居ない、その一例を擧げて見れば、村には一つの公會堂等が設けられてゐる所も尠くないが、その利用と云ふ點に就ては何等の新しい規律や道德なるものが行はれて居らない、彼等がこれを使用すると云ふ事は、自己の利害關係より打算するに過ぎなくつて、眞にこれを有効に利用し或はこれを保護すると云ふが如き點に至つては考へて居ないかのやうである。屢々農村に於て見る所の青年會館の如きものもこれを建設するの當時に於ては大なる希望を有つて居るが、これを利用して居る有樣を見れば誠に亂暴であつて、有効に使用すると云ふ方法を知らず、またその會館を通じてその部落乃至は町村に一脈の生氣を送り出ださうと云ふ樣な事は期し得られないのである。空々漠々として荒れ朽ちるに任し、掃除さへも十分に行き屆いて居ない。會堂に入れば鬼氣が迫ると云ふやうな嫌な感じが起きるのである。これ等は勿論從來の國民道德の缺陷から來ることであるが、相當の注意を以て青少年の時代から訓練を施して出來得る限り廣い社會を建設し、さうしてその間に於ける社會道德を養成する、社會生活の規律を養ふと云ふ點に留意をすれば割合に容易に風を移すことが出來るものである。

要するに、團體訓練は勿論學校教育の上に於ても、個人的の考へから社會的の考へに移らしめると云ふことは誠に必要な事であつて、殊に現今の如き國家の隆運に伴つて世界同胞てふ觀念を養つて行かなければならない時代にあつては特に必要なる事に屬する。また一面から考へて見れば吾人の道德なり生活なりと云ふものは出來得る限り個人から離れて社會全體の考へに進んで行かなければならない。從來この個人の自由と云ふ事を認めなかつた代りに許されたる範圍内に於ては殆んど他を顧みざる自己の自由なるものを護ると云ふことが非常に强かつたのである。財産に對する考の如きがこれであつた。併しながら今日に於ては個人の自由は、その人格と共に益々廣く認められて來たが、またその自由の意志によつて共通せる社會的道德並に生活を建設して行かなければならぬ。

と云ふ點も少なくないのである。

第十二章　青少年の社會教育的機關

教育は社會化されなければならぬと云ふ事は、近時識者によつて唱へらるゝ所である。併しながらこれは教育なるものゝ意義の擴張に過ぎないものであつて、教育とは學校教育に限ると云ふ樣な窮屈なる解釋の下に立つ教育學は、既に古い時代の遺物に過ぎないのである。所が今なほ教育なるものを單に學校教育であると稱して、所謂職業的教育家が教室内に立て籠つて、而して人爲的に考へられた鹿爪らしい方法によつて教授訓練が施されなければ眞の教育ではないと考へてゐるのは、誠に時代錯誤の感がある。丁度震災當時に幾百と云ふ迷兒や孤兒のあると云ふことを知らない樣な顏をして教育學を講じてゐるものや、家事の教科書の育兒篇を教室内で說いてゐるものと好一對である。所がかう云ふ考へが長い間我々の頭から去る事が出來なくつて、近時に於ては特に教育者は勿論一般識者と稱せらるゝものも、斯かる教育を以て眞の教育であると考へて居るのである。從つてその教育なるものは多くは社會と沒交涉であつたり、或は社會に出でゝは何等の役にも立たない樣な理論とか道德律とか云ふものを盛り澤山に教へられ、少年をして一定の所謂學校型に入れると云ふ事が教育であるかの如く考へてゐるものが尠くないのである。固より教育の目的は個人の社會的方面に對する生活の準備或は實習と云ふ樣な方面に置かなければならぬと云ふ事は古くから考へられたのであるが、而もこれに到達する方法として縮圖されたる學校教育を以て終始せんとしたのである。これが大なる過ちであつて、今日の學校教育を受けたるものが再び社會に出でた場合に於ては更に何等かの訓練を經ざれば何んの用にも立たないと云ふ樣な奇なる現象を生ずるに至らしめたのである。

元來何れの地方に在つても民族發達の初步の時代に於ては、教育もその民族に必要なる社會的生活の一つであつて、これを受ける所の青少年は教育を受くると同時にその民族に於ける實際生活にも携はつてゐたのである。而してその教育なるものと民族の實際生活、換言すれば、社會生活との間には一分の隙もなかつたのである。然るに文化が進むに從つて各種の事業が分業的になつて來た事は已むを得ざるに出でたのであるが、その結果は段々と一つの型を生じ傳統となつて遂には本來の目的と乖離するに至つたのである。かゝる意義に於て教育なるものが社會化されなければならぬと云ふ事は、只單にその教育の目的が社會的でなければならぬと云ふのと同時に、教育上の缺陷に

對する救濟的意味をも含んで居るのである。孰れにせよ、現今の學校教育なるものは殆んど平常の狀態に於てこそ相當の役目を果たしたものであるが、一朝事あるの際或は實際的に役に立たなければならないと云ふ樣な狀態に立ち至ると云ふと、殆んど何んの役にも立たないと云ふ事は前章にも述べた通りである。これは今回の關東大震災に於ける實際に見るも瞭かである。兒童や生徒は學校が開かなければ既に學校なるものゝスピリツトを缺き、教授が始まらなければ彼等の學習なるものは行はれないと云ふ點や、彼等が日常學校より受けた所の道德的訓練や作法なるものは、かゝる急なる場合に於ては殆んど何等の表現をもなかつたと云ふ事を見るも瞭かである。かゝる訓練を受けたものが成人となつて組織すると所謂自警團なるものが生れよう。勿論全部の自警團が惡いと云ふのではないが、非常識的な狂的な行動が併も帝都に於て行はれたと云ふ事は故のないことではなく從來の教育の缺陷が會々暴露されたものである。從來日本の教育は平常の場合には聰明にして而して理智に長けた紳士らしい人間を作るかも知れないが、非常の場合に於ては役に立つものは殆んど得られなかつたのである。かゝる意義に於て青少年の社會的教育と云ふものが叫ばれなければならぬのである。

學校教育と青少年の訓練　何んと云つても學校教育は教育の中の最も重要なる部分を占めないと云ふ譯には行かない。只尤も吾人の言ふ學校教育なるものは現在の學校教育を以て滿足するものではなくて、それ自身に於て社會化され新時代の要求に應じ得るものでなければならぬ。學校教育は全人教育であると云ふ考へが餘程進んで來たのであるが、學校教育に依つて全人格を完成し、さうして知識や技能を授け、意志の陶冶を圖り、德性の涵養をなし或は身體の圓滿健全なる發達を遂げしめると云ふが如きは、これは理想として寔に望ましいことであるけれども、到底得て望む可からざる事柄である。然るにこの望む可からざる事柄を今迄は世の中の人もまた教育者も强ひてこれを試みんと努力してゐたのである。從つて學校教育の目的と云ふものは非常に多岐に亘り又その施設なるものが廣汎に亘つて遂には所謂ォ題目主義となり或は發表主義となつて居た事が少くなく、徒らに片々たる人物を養成するに過ぎなかつたのである。かゝる意義に於て學校教育本來の目的は全人教育に在り又凡ての方面に亘る陶冶でなければならぬと云ふことの意義に變化はないが、その中でも特に學校教育として盡さなければならぬ方面を限定すると云ふ事に異議を有しないのである勿論その方面を限定すると云つても、それは他の方面と全く無關係であると云ふ意義ではなくして凡ての方面と同一の目的の下に置かれたる一部分として考へるのである。これを例へで見れば、學校教育に於ては身體の養護の方面に盡さなければならぬと云ふ事に就ても、その養護と云ふ全體の

目的並にその養護の方法の凡てから切り離して考ふる譯には不可ぬ。併しながら學校教育が努む可き方面は自ら定まつてゐるその營養的方面や乃至は睡眠の方面であるとか、と云ふ樣な事までには手を盡されないのである。それ等は主として家庭に於て行はれる事であるが、併し營養や睡眠等を度外視して學校に於ける體操や遊戯、それから教授衛生等を考ふることの出來ないのと同樣に、その他精神的方面に於ても亦これと同一の論理が見出されるであらう。例へば意志の陶冶の如きも學校教育として努めなければならぬと云ふ事は勿論であるが、その鍛錬の目的なり方法と云ふものが一貫して立てられなければならぬが、學校教育に於てのみこれをなすと云ふ事は固より不可能の事に屬するのである。寧ろこれはその分量から云へば、家庭なり乃至は社會或は彼等同輩の間に於ける團體的訓練等によつて陶冶された方がよいと云はなければならない。その他或は情の方面に就て考へて見るも、學校教育に於て養はるゝ部分は極めて一部分に過ぎないのである。自然に對する純美なる感情の如きは彼等が自然に接觸する間に於て養はれなければならない。さう云ふ方面は寧ろ彼等の社會的訓練に俟つ方が適當であると考へるのである。

以上の如く考へたならば、學校教育は寧ろ主として理智の方面即ち或意味に於ては智育に傾かなければならぬと云ふのは止むを得ざる事であつて、これは社會が進歩し家庭が充實するに從つて益

益その度を加ふべき傾向と必然性を有するものである。さは云へ今迄の如き注入主義の教育を以て學校教育の全部であると考へ度くはない。その知識は生きたる知識であつて社會の實際の役に立つ知識でなければならない。又意志や感情の伴ふ知識であり、能力として活用さる可き知識でなければならない。從つてその教育と云ふものも餘程趣きが變つて來なければならない。

社會教育的機關

青少年の教育的機關として之を學校教育以外に求めるならば、そは先づその團體的訓練である。次には各種の社會教育的機關即ち圖書館、博物館、運動場、音樂堂、新聞雜誌その他講習會、講演會等である。併しながらこの社會教育を受けしめる爲めには各種の機關が雜然と彼等の前に展開するよりも、彼等をして次章に述ぶるが如き團體を組織せしめてそれ等の社會教育的機關を結び付けて彼等の利用に供すると云ふ事が必要である。併しながら例へば圖書館の如きは獨立的機關として存在すると同時にその施設の一として特別なる青少年の爲に開かれると云ふ場合を考へなければならない。即ち從來の圖書館なるものは多くは成人向のものが少くなかつたのである。さうしてその圖書分類法なども、學科の種類によつて分類されて居たに過ぎなかつたのである。これ等の圖書館なるものは青少年を對照として或はそれに適當なる目錄を編纂し或は特に青少年の爲め大人と分離して閲覽室を設けるとか、特に青少年に對する讀書法の指導をなすとか或は附

帶的の各種の施設をこれに施すが如きも一種の青少年に對する社會教育的機關としての圖書館の任務である。又博物館にしても從來の博物館は一般の人に對するものであつたが、青少年の社會教育的機關の博物館としては矢張教育的でなければならない、卽ちその陳列物は寄少年の知識の程度に相應しなければならない。また彼等の知識的慾求心に對しては相當に指導が與へられ、實驗を要するものは彼等自身をしてこれを實驗せしめるとか或は質問に應ずるとか或は特に一定の日を選んで彼等のみを對象としたる展覽會を開設したり、實驗會、實習會等を開く如きものも又これである。その他運動場にしても一般人に對するものと、青少年に對するものとは大にその趣が異ならなければならい青少年に對してはその身體の發達程度に應じたる所の設備を要すると云ふことは勿論、またこれに適當なる指導者があつて、さうして彼等の運動の際に於ける指導をなし、また各種の弊害の除去に對して相當の監督が與へられなければならない。或は不良性を帶びたる少年に對する感化又は善良なる少年に對する影響防壓の方法を講ずるとか、その間に各種の社會的訓練を施すと云ふが如きは矢張青少年に對する運動場としての任務でなければならない。斯くの如く考へて行けば凡ての社會的教育機關が青少年に對する場合には、指導と云ふ事と、尙青少年の心理的並に生理的發達、社會的地位などに着眼して、而して各種の改善が加へられて行かなければならぬものである。併しながら現今では之等の施設が不完全である許りでなく、青少年に對しても一般の成人と同一の取扱をなすとか、乃至は指導者なるものがなくつて放縱なる社會的生活と何等の差がないと云ふ結果は各種のかゝる施設と云ふものが害あつて益の無いやうな狀態になるのである、今日我國に存在する公園であるとか或は運動場であるとか或は圖書館、博物館、神社、佛閣等の如き頗る豐富なる社會教育的意義を有するものが、寧ろ彼等の不良性を養ふ所となつたり、また國民の缺點を曝露する表徵となつて居ると云ふことを見て、更にこの感を深うするものである。

社會教育の機關が如何なる任務を有するか、また今日如何なる改善が加はつて行かなければならぬかと云ふ事は本書に於て詳しく述ぶる所の餘裕を有しない、拙著社會教化を中心としての學校經營指針を參照せられ度い。

第十三章　青少年の團體的訓練

前章にも述べた通り、青少年をして自らその心身の修養鍛錬をなさしめるは勿論、正式に學校教育を受けしめると云ふ事の必要なるは云ふまでもない所である。寧ろ教育の機關が整うて來、而し

て財力が許すならば、凡ての青少年に對しては能ひ得る限り程度の高い學校教育を施すことを望むや勿論である。青少年の家庭の境遇とか或は土地の狀態とか云ふことは青少年自身の能力なる問題以外に於ては出來得る限り教育程度を定むるの條件とし度くないのである。即ち教育は個人の能力に應じて最も適當なる程度に施されなければならぬと云ふ事を考へて家庭の貧富や土地の狀態と云ふものは、國家の力や乃至は社會の力によつて必要條件となさない樣に努めなければならない。即ち貧家に生れたるものと雖も、その能力さへあれば、これに最高の學問を與へ、而して國家社會に奉仕せしめる。或はその他境遇の惡しき所の子供に對してはそれに相當の公費を給して、教育を施して行かなければならぬは當然の事である。併しながら今日の時代に於てはこれ等が教育を定むる條件とならなければならぬのであつて、縱しや能力は無くとも家庭の境遇さへ宜しければ最高の教育が受けられると云ふ樣な次第になつて居るのである、さうして國家の高等教育機關の多くはこれ等の貴族や富豪階級の專斷する所となつて、天資如何に優秀なるものと雖も、家が貧困なるものは最低度の教育をも受ける事が出來ないと云ふ樣な至つて悲慘なる事實が現れてゐるのである。これ等は或は國家の力なり乃至は各種團體の力によつて出來得る限り除かなければならぬのである。尤も教育と云ふものを前章に述べた如く、今日の如き學校教育を對象として述べるのではない。その今日の如き學校教育を多くの人間に長く受けしめると云ふのは國家の活力を殺ぐからである。即ち教育は一方に於て十分に社會化され、さうして社會の實生活と密接なる關係を有し、教育即ち生活と云ふ程度に達したる學校教育を指すのである。

青年團や乃至補習教育の萬能を論ずる識者は往々にして、この間の理屈を辨へないで、その青年團の訓練や補習教育が完成すれば正式なる學校教育を受けなくても宜しいと云ふやうに考へて居るのである。元來これ等の教育なるものは學校教育の不備であつて、社會の生活の程度が低い時代に於てのみ許さるべきものであつて、時代が進むに從つて青年團體の訓練とか補習教育はその實質に於ても大いに變つて來なければならない。この事は既に我が國十數年來の歷史に徵して見るも瞭かであつて、補習教育は何時の間にか尋常四ヶ年程度を卒へたるものを收容する時代から、今日ではその實質から云へば中等教育にまで進んで來たのである、今後十年乃至十數年を經たならば今日の補習教育なるものが一般教育となつて、補習教育は矢張中等教育の上に立つ性質のものとならなければならない。また青年團に於ける各種の修養的施設等に於てもこの點まで進んで來ると云ふ事は

團體訓練の必要

團體訓練の形式なり內容が漸々變つて來ると云ふ事は前に述べたことであるは燎然たることであらう。

が、その必要なる事は必ずしもこれと同一のものではない。即ち學校教育の程度が高まつて一般國民教育は八年より十年となつても矢張團體教育の必要はあるのである。即ち學校に在る時代と雖も、尙且つ彼の少年團は學校教育と相共に進んで行つて、學校在學の時代の少年に對しても一種の訓練が行はれると云ふ點に於て何等の矛盾をも見出さない。然るに之に對して學校教育者の一部に疑問を懷いて居るものが尠くない。即ちその言ふ所によれば、學校教育てふ完全なる教育機關がある。然るにこれ以外に團體を組織せしめると云ふ事は學校教育を阻害するものであつて又命令を二途に出でしめるものであると。これは要するに、少年團訓練の缺點に對する一部を述べたに過ぎないのであつて、その本質に觸れたものと云ふ譯のものではない。又かゝる缺點はこれを除外し得ないと云ふ反證を擧げることは出來ないのである。假に一歩を譲つて學校教育以外に團體を組織せしめると云ふ事が不可であるや否やに就いて考へて見るも、然らば兒童はそれによつて果して滿足するか否かと云ふ事も考へなければならぬ。

吾人は屢々學校生徒が校門を出づると同時に三々五々集まり、或は家庭に歸つて後再び集まつて如何なる遊戯や運動をなして居るかと云ふ事を考へて見なければならぬ。即ち川の緣に集まつては五人十人乃至は數十人の兒童が釣をしたり水遊びをやつて居る、その中にも一つの團體生活が見出されるではないか。これを余は戯れて川端倶樂部と稱する。或は樫林の木蔭に集まつて幼い子供、相當に年齢をとつた少年、男の子、女の兒、子守とか小僧とか云つた風の各種の少年が數十名乃至は數百名一團を成して運動やら遊戯やら木登やら又は鬼子ツコをして居る。これも一種の團體的生活であつて、これを樫木倶樂部と名づける。併しながらこれ等の川端倶樂部や、樫木倶樂部には自然に發達した法則は存在するが、離合集散常なくしてその離合の理由にも正しいものもあるし、正しくないものもある。また或場合には非常によい團體的行動をなして居ることもあるし、また或場合には不良性を帶びた行動を取ることも少くない。而して組織の形成されて居るものを見るに素より不完全であるが、彼等の間には確固たる目的を有したる秘密結社的のものも少くない。それは殊に不良少年團の間に之を見る。これ等の社會的現象を教育者は何んと見るであらうか、既に兒童の團體を組織せしめるとか、組織せしめないとか云ふ問題は超越して事實に於て組織して居るのである、それが善い團體であるか、惡い團體であるかと云ふ事は兒童自身には解らない。即ち指導を以て始めて分たれ得るものである。

かゝる意義に於て團體的訓練の必要なる事は云ふまでもない所であらうと思ふ。前々章にも述べた通り、本邦人の生活の多くは個人生活に偏して居たりまたは個人道德に偏し過ぎて居つたのはか

ゝる教育上からの誤謬から來たものも少くない。社會道德の建設に向つて邁進しなければならない今日に於て青少年に對する團體的訓練の必要なる事は首肯されることであらうと思ふ。由來日本人は個人としては多くは善良なるものであつた。併しながら團體としての行動は不良性を帶びて居ると云ふことを認め得るのである。矢張ゝゝる訓練が不十分であつた教育や社會の風習に歸するのではなからうかと思はれる。

青少年團體

青少年に對する團體なるものは各種の方面から考へる事が出來るが。青少年團の如何なるものであるかと云ふ事は以下各篇章に於て述べることであるが、これは恰も學校教育に於けるが如く、青少年の一般的修養を目的とする團體であると云ふ點に於て大なる存在の價値を有するものである。その他の團體としては或は特に宗教的團體或は體育的團體或は藝術的團體或は音樂を目的とする團體であるとか或は娯樂を目的とする團體であるとか、或は體育を目的とする中に於ても庭球とか水泳とか或は徒歩とか相撲とか弓術等を目的をする團體も少くないのである。これ等と青年團體との間に於ては一脈の連絡がなければならぬが、必ずしもまた青少年團を以てこれ等の凡てを包含せしめなければならぬと云ふ必要はないのである。即ち青少年團は青少年の一般的修養を目的とする團體であるが、これ等の團體は、その中特に一部分を目的とする團體であつて、新團體に加盟すると否とは人の境遇とか、年齢の狀態に依つて自ら異なるものである。

團體訓練の目的

團體訓練の目的は團體心理を應用すると云ふ點に存在することは勿論であるが、動もすればこれを誤解して居るものが少くないのである。即ち團體心理とは勢ひを驅つて一氣呵成に事を行ふと云ふ樣に解釋して居るものが少くないのである、寧ろ團體訓練の目的は個人の陶冶にあるのである。即ち訓練されたる所の個人があつてそれが相集まつて即ち團體的行動をなすと云ふ樣にならなければならぬ。何等の理由を解しない、又何等の訓練を經ないものが、相集まつて團體的の行動の形式を取つたからと云つて賞む可きものではない。從來青年團なるものゝ多くはこの間の情由を解しないで、個人としての修養や訓練を怠り、さうして單に團體的行動の形式を學ばしめた傾きが少くなかつた。即ち青年團が成立すると同時に團服が新調される。翌日はその團服を着たものが十字街に立つて交通整理をなしたり、或は社會奉仕をなしたりするのである。これ等は何等の感情や意志の表現でもなく、殆んど偶像的にやつて居る迄のものである。それには洗練されたる訓練も伴つて居ないから識者をして見せしめれば嘔吐を催ほさしめるに過ぎない。されば團體訓練の基礎は個人の修養に重きを置かなければならぬ事は勿論である。その個人の修養と相俟つて團體心理を應用し團體の制裁により或は團體に於て養成されたる所謂國風によつて個人の個性をも

發展せしめることが出來るのである。茲に始めて團體訓練の眞價が現はれるのである。

第十四章　青少年の階級的訓練

團體的訓練の必要なるは前章に述べた所であるが、その團體と稱するものは相當の基礎の上に立つたものでなくてはならぬ。只單に多數のものを集合せしめたと云ふのは、これは要するに烏合の衆であつて、却つて訓練に不便を感ずることが尠くないであらう、從來青年團又は少年團の團體的訓練と稱するものが、多くは十把一束にしたる團體であつて、その間に各種の階級に屬するものが存在して居る。假に現今青年團なるものは、滿十二歳から二十五歳迄と假定して見ても、前篇に於て述べたる如く、これ等の團員の間には、心理的にも生理的にも、その發達の階級は種々なるものが含まれて居る。また社會的境遇や、學校教育の程度または職業と云ふ樣な各種の方面に多種多樣のものが網羅されて居るのである。然るにこれ等を一括して一つの團體を組織せしめたからと云つても、その形式に於てこそ團體と稱する事も出來ようが、何等訓練上に便宜を與ふるものがないであらう。かゝる意義に於て一つの團體を組織する場合にあつては、その組織の分子たる團體員の素質によつて適當に按配分類するの必要を生じて來る。これを稱して吾人は青少年の階級的訓練と稱するのである。階級的訓練と云ふのは此の點を用ひらるゝ爲に往々誤解を招いたことが尠くない。余は雜誌青年誌上に於てこの事を述べたが、その當時に於て、一青年は余に書を送つて曰く、「階級的訓練とは何ぞや、これ青年を侮辱するものなり云々」と、斯の如きはその文字に囚はれたるものであつて、階級なる語に何等の內容をも究めずして直ちに青年の忌む所となつたのであらうと思ふ。階級的訓練とは寧ろ青年をして十把一束にしたる訓練を施し青年をして只青年團なる空名に滿足せしめないで、その心神發達の程度に順應したる方法を以て適切なる修養が行はれて行かなければならぬと云ふ事を目標として定めたものであるからして、却つて青年それ自身に對して敬意を表するものである。

然らば青少年を如何に階級的に訓練す可きかと云ふ問題は各種の方面より考へられる。先づ第一には、心理的並に生理的發達が大體に於て年齡に應じて進む可きものを定むるならば、此處に一つの階級なるものが生れて來る。遂に又單に年齡なるものを問はずして、生理的並に心理的にも眞の發達の程度卽ち智能に於ては、智能の發達の程度、體格に於ては體格この體質上の發達の程度と云ふ事によつて區別される事も能きるのであるが、これは前々も述べた年齡と相伴ひ、心理的並に生

理的發達と云ふ中に包含する事も強ち困難ではない。尤も普通の狀態にあらざる所の異常兒に就てはこの限りではない、又一の分類法はその職業によりて分類さるゝ事であり、社會組織や乃至は土地の狀態等による分類法であるが、これ等は寧ろ階級的訓練法と稱するよりもその他の修養訓練施設等に於て述ぶる方が便宜である。

青少年の階級

年齢上より見れば青少年團卽ち十二歳から二十五歳に至るものは少くもこれを三期に分つ必要があらうと思ふ。その第一期は卽ち十五六歳迄の時代であつて、身體的にも殊に性的にも變化の多い時代である、その時代に於ては前編にも述べた通り、教化の特點は教育的教育訓練が施され得るのである。卽ち命令の如きものは能く徹底し、さうして精神的には極めて純なる狀態に置かれてゐるのである、一方には身體の發育が非常なる速度を以て進むと云ふ所から種々の點に於て危險も伴ふのである。余はこの時代を教化の特點より見て假に受訓期と名づける、次に第二期の階級は十六七歳から十九又は二十歳であつて、身體の發育は殆んど一定の程度に達して居る。只思想的に幾多の變化がある時期であつて教化の特點から云へば最も修養鍛練を有す可き期である。卽ちこの時代に於ては身體に對する鍛練は或は職業に對する準備の如き或は自己の修養に對して研究なり調査なり討論なりと云ふ樣なものが非常に喜ばれる時期であつて、この時代は實に人生に於て有意義な時であつて、略人間の價値を定むる時期であると稱するもよい。理想から云へば青年團の教育はこの期を以て終る可きものであつて、前期のものは少年團と稱して訓練する方が適切であると思ふ。第一期と第二期とは多少の相異はあるが未だ共に純粹無垢なる時代であつて、同時に教育可能性の大なる時期である。その訓練方法に於ては夫々特色がなければならぬが、矢張修養教化の必要なる時期である。これは一方に於て社會的境遇も左程實際的に入つて無いために教育を受けることも可能な狀態に存在するからである。

第三期には卽ち二十歳以後二十五六歳までであつて、これはその狀態から見れば心身の平衡發達の時代である。生理學者は筋肉の發達が最高に達する時期は二十五六歳としてこれに窒素平均なる術語を與へて居る。窒素平均とは筋肉を構成する窒素の分量平均一六、五%であつて殆んど總ての蛋白質が同樣である。それ故に筋肉の主成分をも蛋白質が構成すると云ふ事は窒素を構成すると云ふことを云ひ現はすことが能きるのである。余はこの時代を窒素平均時代と稱するのであつて、女にあつては男子よりも一二年早きを通常とする。以上の如く筋肉を構成し又骨格も一定の程度に達し身長の如きものも一定の程度に達すると共に困難の狀態に稱々平常に進んで行くのである。この時期は既に實生活と云へる時期であつて、それに對する教育は施こされなければならぬのである。そ

れで青年はこの期に達すれば既に實際に對しても沒交渉である譯には行かない、また社會や家庭に於ける各種の事實に對してもこれに携はり或は判斷を下し或はこれを解決したければならぬ境遇に入つて居るのである。從つてこの期に於ては動もすれば、理想と現實とは不調和を悟らしめる事も少くなつて、多くの場合は理想と不調和に對して妥協的態度を取り易くなる、從つて今迄純なる狀態に於て理想的に進んで來た考へが現實の前には何等權威を有しないと云ふまでに氣附いて來ればこれに對して妥協的態度を持するに至る事は無理の無いことであつて、そのために彼等の生活と云ふものは著しく大人びて來、また凡化するに至るのである。尤も人生は必ずしも理想に生きるのみが目的でなく、現實と共に生き、社會と共に生き、思想と共に生きなければならぬのであるが、かゝる時代に於て思想的に妥協をなすと云ふ事は望ましくない。それ故にこの期に於ける青年教養には最も力を注ぎ、適當なる政治教育を施し、或は健全なる社會奉仕に携はらしめ、或は理想と現實との調和に對する考へを高めしめ、而してその自己生活の充實を計らしめると云ふ事に努めなければならない。

以上述べたるが如く、階級によつて訓練が施されなければならぬと云ふ事は新しい案の樣に思はれるが、我が國に於ける健兒の社の如き訓練は既に之が實施されてゐたのである。尤もその當時の事であるから今日から見れば完全なるものとは云へないのであるが、頗る適當なる訓練が施されて居る樣に見える、然るに今日までの日本の青年團に於ては殆んどこれに對して何等の考慮を拂はれて居なかつた。階級的訓練を如何に施して行くかと云ふことに就ては他の章に於て述ぶるのであるが、これに對しては適當なる階級に應じたる教程又は教範なるものか定められて實際と併行を保つて凡ゆる機會を捉へて適當なる指導が與へられなければならない。併し學校教育と異つて、團體教育は實學實習でなければならない。教室内の教授や講義や又は標本や模型による實驗ではなくしても、實物に對する生きたる修練を積ましめなければならない。團員が野外に遠足する場合に於てもこれは單に體育のみの目的ではなくつて、極めて簡單にして興味のある適切なる教範によつて自然現象や自然物に對する研究並に測量等の實習が試みられなければならない。單に晴耕雨讀と云ふ樣な慰安的のものではなくて、計畫的なものでなければならない。而して團員も亦研究的態度を持して彼等が自ら立てたる案によつて自らこれを研究すると云ふ方法を取らなければならない。それ故に階級的訓練と稱しても單に上から下に對する訓練を施すのでなくつて、彼等自身の開拓に俟たなければならない、どうしても自己開拓でなければならない。

斯の如く云へば青年をして徒らに規矩準繩に羈離せしめて今日の學校教育に於けるが如き努勉の

態度を養ふものではない、彼等の潑溂たる元氣の中に培かはれた氣運を利用すると云ふ點に考へなければならない。

第十五章　青年團と少年團

青年團と少年團とはその名稱に於て異つて居ると云ふ點から動もすれば この間に誤解を持つものが尠くない。我が國の發達から云へば、青年團が先きに生れて次に少年團が生れて來たのである。それ故に青年團を謳歌する所のものは少年團の如き訓練が行はれて來ると云ふことは青年團の發達を阻害するものであると稱するものが少くない。その敎は年齡に於て相隔反するからであつて通常我が國に於て少年團と稱するのは年齡十一歲から十五歲迄には十七八歲の者も含んで居る。青年團の方もまた滿十二歲から二十五六歲迄の者を含んで居つて、その間、年齡上交錯するのである。青年團は一つの社會的公益的團體であるが、少年團は彼等少年自身の生活を充實しその興味を利用すると云ふ樣な點から動もすれば少年團を以て外國の模倣であると稱し、又不眞面目なる團體であると云ふ樣に考へて居るものが少くないのである。これ等は少年團を組織して居るもの、また又青年團を組織して居るもの〻相互の誤解であつて、何等謂はれのない問題である。元來日本の青年團は古い時代からの若衆連の發達に基くものと稱して居るが、近くは海外に於けるこれ等の團體訓練の飜譯であると考へられるのである。その飜譯の基本は何れにあるかと云へば、謂ふまでもなく、少年團乃至これに類似する團體であつたのである。併しながら若衆連なるものが一つの公益團體であると云ふ點から何時の間にか修養を本義とする青年團が社會奉仕專門の團體となる樣になつた。而して更に青年の發達が或點に達した後に於て、詳しく云へば、大正時代に入つて少年團なるものが殆んど飜譯の儘本邦に輸入された結果として玆に二つの潮流を生ずるに至つたのである。併しながら元來同一體のものなるが故にこれを根本的に研究すれば大なる相異がある可き筈はないのである。

青少年の訓練より見たる青年團及び少年團、吾人は以上述べた樣な意義に於て青年團と稱するものも、少年團と稱するものは只名稱のみの問題と考へ、對照するものは青年である、これを如何に訓練す可きかゞ問題であつて、青年團ととして訓練するも少年團として訓練するもの、そは問ふ所でないと考へる、前來述べ來つた如く年齡に相應したる研究を附してさうしてそれに適切なる敎育が施さるれば足るのである。その意味から自分は假に前章に述べた第一級卽ち十五六歲迄の者を以て

組織したるものは少年團と稱し、十九歳二十歳の者を以て組織したるものは青年團と稱し度いのである。併しながら又歴史的關係から見て凡てを青年團と稱してその中を少年部と青年部とに分つも可なりである。又は前期後期と分つも不可はない。尤も只便宜の上から云つて、假に强ひて名稱を一つにせんとすればこれ等二つのものを一括したる團體を少年團と稱するを以て可なりとする。その故は青年なるものは吾人が考ふるが如く成熟の半ばにある所の意義で無くして既に成熟さすと云ふ文字であると云ふ點から、一つは出來得る限り人間をして若い氣分を持たしむる、また團體をして修養的團體であると云ふ事を組織的に知らしめる意義に於て寧ろ青年團と稱する語を選ぶよりも少年團と稱するが適切であらうと思ふ。而して理想から云へば前にも述べたるが如く二十歳以後の者は既に實生活に入れるものなるが故に、これは普通一般の成人と共に扱つて團體を組織せしめる否とは一般の社會教育の施設に俟つか乃至は法律制度の指揮を受く可きものであつて、少年修養を目的とするものはこの限界を以て分割するを要するのである。然らずして今日の如き狀態に放置するならば世人が憂ふるが如き青年團の惡化と云ふ問題も强ち杞憂のみに終らないであらうと思ふ。

第三編　青小年團の沿革

第十六章　維新前の青少年團

團體訓練の必要なる事は昔時に於ても認めらるゝ所であつた。それで青少年に對しても我が國の維新以前に於て既に若連中、若衆組等の名稱の下に一般民衆の間にも行はれて居り、また次の章に述べるが如き武士の階級には薩摩の健兒社の如きものや、その他熊本にも或は中國邊の諸藩にも獨特な團體が存在して居つたのである。さうしてその年齡も今日から見れば寧ろ若くて、十一二歳から入つて二十歳乃至は二十五歳を以て脱會すると云ふ不文律になつて居た樣である。就中健兒社の如きものは組織的なる點に於て最も秀でたものであるが、他のものと雖もその時代より見れば寧ろ今日の青年團が今日の社會に於て活動して居る以上に相當組織もあり、權威もあつたものであると云へる。

武士の階級に於けるこれ等の團體は兎も角として、一般町人や百姓の間に起つた所謂若連中や若

衆のみは矢張その年齢を十一二歳から始まつて居るのであるが、そは多くは講元衆或は何々講、例へば文殊講、八幡講、二十三夜講と云ふが如きものであつて、それが進んで十五六歳に達した武士であれば、所謂元服の年齢から一人前の若者として取扱はれて、さうして長者の命令は殆ど絶對に服從する、總ての使役には絶對に從つて行くと云ふ風になつて居たのである。若連中には特別な成文の會則の樣なものを定めたものもあるが、多くは從來の仕來りを守つて行くのである。さうしてその中に最も年齢の長じたものが或は家庭のよいものか又はその他の點に於て優れたものがその隊長となると云つた樣な風になつて居つた。二人以上の青少年を有する家庭にあつてはその奉仕する役の上から云へば交代して一人で好いと云ふのが原則であつた。

昔時の若連中に於ける訓練は今日の如く修養に重きを置くと云ふ事は勿論なかつたのであるが、その團體としての統一訓練乃至はその社會に於ける生活の實際に馴れる、而してその社會の爲に奉仕すると云ふ樣な點に就ては最も能く進んで居つたのである、祭禮とか或は道路の修繕であるとか或はその他の年中行事等は殆んど若連中の手によつて行はれて居たのである。又彼等相互の間の人情は誠に淳厚なるものがあつて、相互の扶助をなすと云ふばかりでなく、或場合に於ては家庭の仕事にまで互ひに手傳ふと云ふのである。また彼等の中の一人が旅行をするとか或は他出をすると云ふ場合には所謂日待と稱して、その前夜に於いて鎭守の社に集まり神に祈り簡單なる夜食を共にして一夜を語り明かし、その當日には之を村境迄送ると云ふ風の窪に手厚いものであつた。又、或地方にあつては簡單なる讀み書き算盤等を敎へると云ふ爲に特に師匠を選んで夜學を行なつたものも尠くなかつた、また或は娯樂を共にする爲めに義太夫の如きものゝ稽古を共同ですると云ふ樣なものも少くない。要するに若連中は社交機關としては其の時代に適切なるものであつた。

若連中の年中行事は現今まで殘つて居るものは極めて尠ないが、彼等の生活から云へば、寔によく充實したものの樣に思はれる。今日ではこれ等の年中行事なるものがなほ保存されて、新しい時代に適合した年中行事なるものは生れて居ない。それ故に青少年の生活は支離滅裂して居つて、彌が上にも個人的の方面に進んで衆と共に樂むと云ふ方面が薄らいで來た樣である。然るに古代の若連中の間に在つては一年中に於ける年中行事が定つて居つた。大抵一箇月に一回二回正月元日とか三月十五日とか或は七月の盆であるとか或は八月の月見であるとか それから春秋の彼岸であるとか或は春と秋との鄕土の祭日であるとか、その他伺健兒の社や乃至は薩摩の子供中に見る如き傘燒であるとか、或は網引きであるとか、その他川淩であるとか、凧を揚げるとか、盆踊と云ふ樣な風に殆んど一年中にこれ等の娯樂をするなど、團體の行動が年中行事と定めて、然も嚴格に定められて

同時にその行事は鄕土のものが總て共々業を休み、尙家庭に於ける食物の上にまで一定の式なるものが行はれて居つたのである。卽ち餅を搗くとか或は五目飯を用ひるとか或は月の夜に團子を食べるとかその他こはめしを拵へる日であるとか、今少し詳しく云へば副食物にまで一定の式があつて家庭の貧富や地位の高下を問はず同樣に食べ物を取ると云ふ風に定められて居つて、社會の生活が一定されて居つたのである。隨つてそれ等の人々が共に樂むと云ふ點に就ても、今日の如き家庭本位や或は個人本位の狀態に較べても一層本深いものがあつたのである。

併しながら今日の時代に於ては若連中の形式迄を眞似ることが出來得ないのである。これはその時代に於てこそ最も能く、社會の秩序と調和して居つたのであるが、今日の時代に於てはその中に現はれて居る所の精神を酌む以外に於ては形式までは到底これを採用する事の出來ない狀態にある。維新以前の青少年團と稱しても一概にこれを述べる譯に行かないけれども我が國の歷史に就て見れば旣に古代に於ても存してゐた事を知り得るのである。又王朝時代下つて奈良朝や或は戰國時代等に於ても所々にこれ等の團體なるものが存在したと云へば、その目的たるや前にも述べた如く修養と云ふよりも寧ろ社會生活の必要上生れたものであつて、所謂公役を容易ならしめる所の一つの方便としたのである。或時代に在つてはこれ等の團體の行動は治者の忌む所となつて、これを禁じた場合も尠くなかつたのである。併しながら前にも述べた如く、人があれば必ずそこに團體があると云ふ原則から見るも何等かの形式を以て古い時代からも青少年の團體が存して居つたと云ふ事は明かである。それが偶々健兒社の如く非常に發達したものとなり或は白虎隊の如き特別なる働きをなしたものとなつたのである。それ等の歷史的研究は玆に其の價値を認めない。

第十七章　健兒社

前章に述べた健兒の社に就ては、余が曾て同地に臨んで調査したことやまた各種の記錄によつて纒めた健兒の社の研究と稱するものがある。本章の體裁より見れば多少詳しきに亘るが、次に之を掲ぐる事とする。

少年に對する社會教育が廣く識者によつて注意さるゝ事となつたのは極めて近年のことであるが最近に於ては著しく其の實績を擧ぐる樣になつた。之れは大いに喜ばしい事である。

中でも其の團體訓練に就いては所謂少年團が擡頭し來つて各地とも競つて之が役立をなす樣になつた。少くとも現在では團員の數は五十萬を突破し團體數も三千を下らない事であらう。併しなが

ら余はボーイスカウト即ち少年團乃至は少年團體であると云ふことを欲しない。ボーイスカウトと稱する英米等の少年團體には採つて我國の少年團體の範とする事項の多いことは承認するが、その形式の末節までを彼に模倣せんとするのは、強ち國粹論者でなくとも排斥せなければならぬ事と思はれる。

一にも二にも國際的でなければならぬと云ふのは一にも二にも國粹保存でなければ承知の出來ないと云ふことと共に排斥せなければならぬが特に前者に對しては餘程の考慮を拂はなければならぬ事である。

さうしてボーイスカウトの提唱者であるパウエル將軍でさへもなほ日本の士風を賞讃して居る。その上私はボーイスカウトと健兒社とを比較して其の時代や文化の程度に於て非常な相違があるが寧ろ彼は健兒社の精神とその形式を英譯したのではあるまいかとさへ考へられる節も少くない。ボーイスカウトは西洋思想ではなくて寧ろ東洋思想就中我國武士道の流れをくんだものと見る方が適切である。彼の綱領や主義や主張や乃至は訓練の方式は健兒社そつくりであると云つてもよい。組織的なる彼國人は何時の間にか我國の特點を抽出して、之を少年教育の上に適用し所謂少年團なるものを提唱し知らぬ顏をしてすましてゐる樣にも思はれる。

それを今頃になつて舶來物として重寶がると云ふ徒輩の多いと云ふことは強ち國粹論者でなくても憤慨乃至は噴飯せざるを得ない次第である。

健兒社と稱するはその實名ではない。鄕中と云ふのが實名である。彼の有名な賴山陽の詩により十八結交健兒社と稱せられて鄕中なるものが健兒社と云ふ名で呼ばれたのであらう。如何にもその耳觸りのよい點に於て余は健兒社と呼びたい。而して必要に應じては原名を用ひる。

健兒社は今では殆んど歷史的の事實となつて學舍なる後身によつて其の一部の片影を留められてゐるに過ぎない。またその實際に就きても史實の少いのと現代とは餘程思想の上に於ても差異してゐる點から其の全般を調査するのは甚だ困難である。併しながら私は必ずしもその史實の末葉を詮索するの愚をなさない。その精神の那邊にあつたかを窺ふことが出來、而して現代少年社會教育に應用すべき點を抽出し得ることが出來れば結構であると思つてゐる、であるから其の史實に就いては多くの考證をなさない。而して此の研究は私一個の努力ではなく既に著はされた各種の書によつて得たものである。併し今までの著者が多く事實を駢べたのであつたり又多くは薩摩出身の人によつて作られたのである。爲めに、客觀的に批判の態度に出でたものが少いやうに思はれる。又少年團體に對する關係に於て何等の考慮を拂はれてゐない。然し本篇もまた私の匆卒の際に於て調査研

究を爲したるものであるからその抱負に於ては採るべき所あらんも幾多の謬見があらうと思ふ。幸に同好の士によつて他日の大成を期したい。

薩摩の歴史は或る意味に於て日本の歴史と特立してゐる。併しながらそれが中國の歴史に遺される時には特に大事件として取扱はれるそれは薩摩の地が邊土にあつたとふことであらうと思ふ。島津氏が此の地に封ぜられてから七百餘年間、時に國内に紛擾があつたとは云へ之を中國關東等の地方に比べると泰平無事であつたと云へる。南北朝の時代にも關ヶ原の戰にも參加はしたがその何れが勝つにせよ敗けるにせよその地位に就いては大なる變動がなかつた。勝てば官敗くれば之れ賊と云つたことは異つた意味に於ても薩藩の歴史を語ることが出來る。

而して邊土にあつたと云ふことと七百年間儼として島津氏が領主の地位にあつたと云ふ事とは著しくその士風にまでも及んで質實剛健なる風をなすに至つた。そうして武士は地方に於ては所謂郷の麓（本村と云ふ意）に屯田して百姓町人と全くかけ離れたる土豪部落をなして生活をなし鹿兒島城下にあるものも多くは町人とは區劃を異にして住んで居たのである。舊藩時代のことは大抵何處も同じであるが特に薩藩に於ては武士と百姓町人との間には全く種族的の隔りがあつた。この考が今日もなほ遺つてゐて士族でなければ人でなきかの感をなす點も少くない。蓋し鹿兒島の文化は武士の文化であり、鹿兒島の人材はまた武士の階級より出てゐることは今日に於ても大なる變化がない。或る意味に於て薩藩は全日本を縮小して郷に大名小名をおき、城下に旗本を布置したとも云へる。

こんな有樣であるから、武士の間には只に城下に於て郷中の制を布いた許りでなく壹百有餘の郷に於ても其の麓の部落をなせる武士の間にも郷中の制があつた。さうして一般百姓町人を統御すると云ふ上に於ての實力と其の誇とを養つたものである。

本日でも此の地ほど士族の多い所はないと共に所謂麓に於ける士族と平民とが全く割據的生活をなしてゐる所も他の府縣には見ることが出來ない。此の點に於て今なほ不可解な民風や思想が殘つてゐるやうに思はれる。

併し日本歴史に上る時には特筆大書されることは前にも述べた通り薩藩の特點である。幕末に際しては七百年來養ひ來れる士氣を以て一氣に維新の大業を翼賛し奉つたのである。爵勅たる元氣が大西郷翁や大久保甲東翁によつてよくその發動を見たのであるが如何にも其の行藏が薩藩の歴史とその士風を表はした感を深うするのである。

健兒社を考ふ時この薩藩のアウトラインと其の武士と百姓町人の關係等を度外視してはならない

何故に健兒はかゝる修養をなしたかと云ふことを詮索するには その生活をも想像しなければならない。騎士の樣な生活も敢爲剛健なる訓練もその時代の思想に伴つたものである。

健兒社の沿革

鄕中と稱するの意は鹿兒島城下に住める武士の青年團であつて、區域（方限と稱す）によつて一團をなしたるものである。最初は社と稱する特別の建物もなかつたので或は方限內の住家又は寺院等を借りて其の行事の中心としたのであつた。特別の建物を造る樣になつたことは寧ろ維新後の學舍と稱する時代からである。

鄕中とはいふものゝ全く武士の子弟に限られたものである。從つて其の目的とする所は武士の子弟としての修養であつて且つ又自主自治であつた。文武兩道を修めるのが目的ではあるが一般的の教育ではない。全く今日で云ふ社會教育をなす團體である。

鄕中の起源に就いては史實のよるべきものが少いが少くとも三百年以前に發源したものと云ふことが出來る。島津家の忠臣で薩摩隼人の典型と稱せらる新納武藏守忠元と云ふ人があつた。朝鮮役の際には國內に留まつて所謂留守師團長と云ふ役を務め 大に青年武士の士氣を鼓舞したのである。それより以前東西の和議破れて關ヶ原の役には忠元は 第十七代義弘公に從つて軍に從ひ頗る苦戰をしたのである。忠元青年武士の士氣を鼓舞し、兼て肥後の加藤の襲來を防がん爲極端なる敵愾心を養つたものである。當時忠元軍歌を作つて青年武士の間に歌はしめた。それは次のやうである。

肥後の加藤が來るなれば
煙硝肴に團子會釋
團子は何團子鉛團子
それでもきかずに來るならば
首に刀の引き出物

と云ふのであつて後來賴山陽によつて兵兒の歌となつた。卽ち

衣至骨袖至腕　腰間秋水鐵可斷　人觸斬人　馬觸斬馬　十八結交健兒社　北客能來何以酬　彈丸硝藥是膳羞　客猶不屬鬢　好以寶刀加渠頭

の歌である。

今から考へて見ればその目標は甚だ小さかつたのであるが士氣を振はす上には 非常なる効果があつた樣である。

かくて三百年の間他の藩に於ては浮華文弱に流れてゐる間に依然として 其の訓練法が行はれ來つたのである。勿論時には士風の頽廢を見ることもあつたが彼等武士の青年の間には、依然として其

の訓練が續けられ維新の大業をなしたる大小の英雄偉人もこゝより出たのである。青少年の生活がよく充實されてゐたと云ふことは今日の思想から考へて見ても非常なる驚異でなくてはならぬ。大人を本位とする青少年の教育ではなくて眞に現在に活かしめた健兒社の訓練はその精神に於て特に敬意を拂はなければならない。

綱領と方針　時代に伴つて鄕中の制度も發展し來つたのである。その底に流れてゐる精神に就いては一貫してゐる。稚兒と云ふのは七八歳から十一歳までのものと十一歳から十四五歳迄の二部になつてゐるがこれは今日の幼年團少年團と云ふのに匹敵する。十五歳から二十四五歳までが二歳であつて今日の青年團である。

一　主君に對して忠義を盡くすこと

二　武士道を守ること

三　鄕中の掟を絶對に守ること

はその綱領であつて成文としてはなかつたがその行藏を見ると常に此の三點に歸着するのである之は少年團の綱領と比較して符節を合せるものである。而して第五章に述べる通り各階級に相應して規約又は信條とも稱すべき掟、定目等があるが、それは英米少年團の規約に時代と形式とそ多少の相異はあるがその精神に於ては共通な所がある。只封建の時代であつて、武士と云ふ特權階級であると云ふことから、百姓町人に對する彼等の振舞が今日の人道主義から考へれば一大缺點であるが、之れは止むを得ない所である。

而して鄕中の訓練は全く團員の自治であつたと云ふ點に於て今日の青年團などよりも數歩も進んで居つた。而も幼年のものに對してはそれに相應する訓練が行はれて居つたと云ふ事などもその特色と見做すことが出來るのである。團員以外の所謂大人と稱するものが干渉しなかつたことゝ善意ある助力を求めらるゝが儘に致したと云ふことまた家庭の父母が絶對に鄕中に苦情を持ち込まなかつたと云ふこともその特色でなければならぬ。

又青少年をしてその體育上に鍛錬主義をとつたこと常に自然に接觸せしめて野外の遊戯や遠足を行つたと云ふことなども今日の進歩した教育思潮からもまた少年團の實際から考へても餘程發達したものであると云へる。

而して今日の如く學校教育が完全なものでなかつたから其の文武の練習も鄕中に於て行つたのである。又身體の鍛錬、志操砥礪に就きても頗る徹底的なものがあり、他方限とは一切交際をなさなかつたが同鄕中の間に於ては一致團結の心固く、幼者は長者に絶對服從をなし長者は幼者を指導監

督するの責任を盡くすことは父兄も及ばぬ位であつた。

訓練の方針が以上の如くであるから今日で云ふ眞の自治的であつた。而もそが單に一方にのみ偏しなかつたことは今日各種の修養團體施設が恰も萬病にきく萬金丹式に一技一行を以て全人教育の目的を達せんとするものとは大に選を異にしてゐる。特に武士の階級にあつて職業生活とは餘り關係がなかつたとは云へ其の著しく修養本位であると云ふことは今日功利主義的な少年團や青年團に比して數十歩進んでゐると云つてもよい。惜い哉薩隅に於ても之を今日の青少年團に應用すると云ふことが出來ないで徒に學舍にその片影を留めて化石化せんとしつゝあるのを見て、同縣人の爲に苦言を呈せざるを得ない處である。

訓練の實際に就きては次章に述べるが中でも詮議と稱するものは其の特に注意を拂はなければならぬものである。之は要するに今日で云へば修養的の問答法であつて忠孝節義に關する事で、其の實行の時に於て如何に所置するかと云ふことを常に講究するのである。詮議の問題が解けぬ爲に泣くやうなことは時々あつたと云ふことである。その問題は次の樣なものがある。

一、海中で難風に逢つた時助舟が來る。助舟の人を見れば正しく親の敵である。其の時は如何にすればよいか。（譯文）

二、甲乙二人の劍客あり。小路を通りかゝつた時路に馬をつないでゐる。路が狹いから容易に通ることが出來ない。乙は密に馬の後を拔けようとしたが馬が驚いて急に後脚で跳ねたが乙は身に覺えがあるのでひらりとかはして通り拔けた。甲は之を見てぐるりと引返して他の道を選んで行つた。どつちがよいか。

二歳咄格式定目（新納忠元の手書と稱し現に會文舍に所藏せり）

一、第一武道を可嗜事
一、兼而士之格式無油斷可致穿議事
一、萬一用事に付而咄外之の人に致參會候はゞ用事濟次第早速罷歸長座致間敷事
一、咄相中何色に依らず入魂に申合候儀可爲肝要事
一、朋輩中無作法の過言互不申懸專可守古風事
一、咄相中誰人にても他所に差越候節於其場難相分儀到來致し候節は幾度も相中得と致穿儀越度無之樣可相働事
一、第一は虛言抔不申儀士道之本意に候條專ら其旨を可相守申
一、忠孝之道大形無之樣可相心懸候乍然不逃儀致到來候節は其場おくれを不取樣可相働事武士の

可爲本意事

一、山坂の達者可心懸事

一、二才と申者は落髪を剃り大りは（りはトハ前髪ノ剃リ様ヲ云フ）をとり候事にては無之候譯事武邊を心懸心底忠孝之道に背かざる事第一の二才と申者にて候此こと咄外の人絶えて不知事に而候事

右條々堅固可相守もし此旨相背候はゞ二才と云ふべからず軍神摩利支天南無八幡大菩薩武運之冥加可盡果儀無疑也

慶長元年正月

二才頭

長稚兒相中掟（寶曆四年戊十月十六日ものせしもの原書及寫とも現に會文舍所藏）

一、前髪有之者他所之二才又者嘶外の二才抔に打交間敷事

一、見物抔に出る時はらくるひ（方言にてぐれると云ふ戯言の意）言間敷事

一、平日傍輩とはらくるひ其外格もなき事互に申間敷事

一、途中に出る時道分れ共外惡口申間敷事

一、傍輩中常に相咄議咄外の人口一向申間敷事

一、嘶外之二才用事抔と被申候時者何時に而茂斷り可申候 惣而早速咄中二才一人に共譯可申達事

一、前ぶり有之候時咄外之二才抔と（と字は贅字か）取分心安相咄候はゞ咄し出間敷事

一、兒頭より申渡儀相背間敷候若又於相背者咄し出（出スと讀むか）間敷事

右此八ヶ條之趣相背者二才頭は可申達者也

寶曆四戊十月十六日

相中

小稚兒相中掟（蓋し寶曆年間出來たものであらう原書はないが寫本は現に會文舍所藏）

一、武藝を可相嗜事

一、山坂を達者可相嗜事

一、傍輩中に過言いふ間敷事

一、他所のものと咄し出間敷事

一、傍輩中於道中はらくるひ致間敷事

一、萬傍輩中致無禮間敷事

一、他所に出候時後よりひつちゆう（小指を屈げて吹く口笛）ふくとき跡見る間敷事

一、傍輩中萬なかよく中能可打交事

一、咄外の所に參候時者用事濟次第可罷歸事
一、於人中指さし笑ひ人ごと言間敷事
一、傍輩中列立致徘徊候時道別れ致候間敷事
一、咄外人に咄之次第申間敷事
一、人に惡口申間敷事
一、二才頭より申聞儀相背申間敷事
一、於人中歌うたふ間敷事
一、於人中力足踏間敷事

右之條能々可被相嗜候若又右之趣相背候はゞ不可相咄者也

規約卽ち掟の實行に就ては徹底的であつたことを例示することが出來る。その一例は婦人に對する關係で西鄕南洲翁の友人某がその罪を犯したとき翁は自らも割腹して其の罪を謝せんとしたと云ふ事であつたが、辛うじて甲東翁などの勸告によつて某を義絕して事なきを得たそうである。

規約の行はれてゐたか居ないかは殆んど毎日の樣に調べたが、特に毎月五と十の日を式日と定めて稚兒は長稚兒と小稚兒とに分れて各方限內の某家に會し掟目の朗讀式を行ひ小稚兒の方へは長稚兒の一人が來て之が式を擧げた。而して其の法頗る嚴制で而も親切を極め只に掟目を讀み聞かせる許りでなく或は試問をし或は訓誡をするのである。その要項を例示すれば凡そ左の通りである。

一、父母の仰せを善く聞くか
二、虛言を云ふことはないか
三、卑俗な事を爲したことはないか
四、金錢を弄び又町下りをした事はないか
五、婦女子に關し又卑劣な話抔をした事はないか

階級と訓練　前章に於て多少を述べたが鄕中の制では凡そ次の如く健兒を區分してゐる。之を少年團と比較して見ると面白い點が發見される。

一、稚　兒　七八才——一〇才
　ヘゴ山(小稚兒)七八才——一〇才
　大人稚兒(長稚兒)十一才——十四五才
二、二才又は兵兒二才——十五才——二十四五才
二才又は兵兒二才とは所謂元服して前髮をとつたものであるが、武士がその家計の苦しくなつた

頃には十二三歳でも前髪を取つて扶持にあづかると云ふ時代もあつた。二歳となれば既に一人前の武士である。

稚兒に稚兒頭あり二歳に二歳頭ありて之を統ぶる少年團に於けるパトロール組織と同樣である。而して以上の區分によつて其の訓練の方針なり內容が多少異つてゐる。卽ち稚兒に對しては二歳に對するものよりも責任を輕くしてゐる。特に稚兒中のヘゴ山と稱する十歳以下のものに對しては勉强よりも多くは遊戲をさせ一團をなして山川や堂宮に集まつて活潑な遊戲をなし又途中を歩くにも散り散りで列をなさず佇立することも許されるが大人稚兒は二人以上なれば必ず二列をなし鄕中內にても佇立することを許さぬことになつてゐた。大人稚兒はまた明六ツ時より暮六ツ時までは門外に出づることが出來るが、それ以外は絕對に外出を許されない。これは極あて偏した方限內のみの團結心を奬勵した結果で、他方限との競爭が烈しくして常に鬪爭を事とする風があり他方限に入ると云ふことは殆んど敵地へ入るやうであつたからである。

旅行をするのでも常に二歳は外側にあつて稚兒を保護しながら行くのである。又その旅程にも相違があつてヘゴ山、大人稚兒二歳の三階級に區分されて居つた。

訓練の實際　訓練の實際は前記の方法によつて行はれるものであつて、種々の行事があるが大體次の如きものである。

○稚兒に對するもの

一、遊戲競爭
二、武藝練習
三、掟目朗讀式
四、詮議

○二歳に對するもの

一、漢學習字の敎授をうく（午前中）
二、文武の講究（自宅又は他師友に就きて）
三、武藝の稽古（長兒の指南）（午後四時頃）
四、軍書讀武士道叢話膽試等（夜間）

○年中行事

每日の行事の外に遊戲旅行、遠足、參拜等の行事を年中に配當してゐる。之は今日の青年團よりも寧ろ少年團に近い位である。

以上の行事の實際は分限によつて多少違つてゐるが今高見學舍一覽によつて樺山大將の舊高見馬場鄕中制度に關する演說中の一節を左に參考として揭げる。

一日の課業に就て申すと、此の幼年（稚兒等は、毎日朝四ツ時、今の九時）に集會す。其の集會所は凡そ高見馬場通の角の邊から二官橋通りの界隈で其の集合點も自然にきまつてゐる。之に反して長稚子の階級の者は毎日輪番に邸宅に集り、座元と申して卽ち會場ありて今日は何某處、明日は何處と定めて集會します。

初級幼年の者は日々如何なる事を爲すか先づ四つ時より右の道路に出でゝ集合し、今日は運動は何をやるかと相談すると、其の中の重なる人が何が宜からうと云つてチヤンときめる。

運動遊戲の種類は走り競、馬追、飛競、綱飛、棹飛、魚釣、軍の眞似（降參云はせ）大將追取り等（同演說略）正月には破魔投。

先づ運動は此位なり、而して五節句の外平日の此の運動時刻は凡そ九ツ時頃迄（今の十一時）其の時刻になるとビツタリやめて長稚子の會議所に繰込む。其順序も各個自由に行かず始終二列になりて座元に行く此處に長稚子ありて此等幼年に大學、中庸四書五經を二人宛復習せしむ。其席に就くと甚だ嚴肅で幼年はビイ〳〵（謹愼）してゐる。讀書の前、幼年一同席に就くや第一に長稚子が曰はく親父樣、御母樣の言ふ言を聞くか（御兩親の命を守るか）と尋ぬ。そうすると皆聞くと答ふ。夫れから今日はワイドン（汝等）は云ふ事はナイか、意見はナイかと問ふ。

若し意見があると「ある」と云ふ、夫れなら云へ、

何某がわれに今日失敬な事を云ふた、又他に向つて行儀惡い事をしたり失禮な事を爲したと非行を擧げて此れを訴ふ。すると長稚子其人を呼び、ソウか席の眞中に出ろと云うて、惡い事をした人を座の眞中に引出して如何なる理由でかゝる無禮な事をしたかと訊糺し、よく將來を誡しむ。此れに懲りず度々犯すものあれば此の以前もソウした立ち直る（改心する）事の出來ぬ奴ぢやからお前は一週間又は三日間の罰讀を命ずと云ひ付ける。

抑も素讀とは或る本を三四枚讀むと「宜」と云ふて又次が讀む、かくの如くして誤があれば長稚子が此れを訂正する。次に罰讀を申付られたる者は座席の一隅の暗き方に反對に座し、長稚子此れに就て嚴重に監督し身動もなす事を得ず、始めから終迄讀書をなさしむ、頗る酷い懲罰であつた。

以上にて午前の運動讀書もすみて各自家に歸る。

次に午後の學課でありますが、午後は七ツ時（今の二時）になると前と同樣に鄕中集會します。但し座元には出席せず而して四時頃になると南林寺の御出鐘（オンダシ鐘）がなる。此れを合圖に

打揃ひて擊劍場に行く、其の擊劍場は天神馬場の吉井殿、次に伊集院ドンでありました。然し此れは一定せず時々變更するのでありました。

其の擊劍場に於ては二歳が專らで場所の大間に二歳の屯所あり、稚子は長幼の順序に腰掛にありて順次に稽古をなす、二歳は稚子の二三人を相手に所謂ダシをなし（當らせて）練習をなさしむるなり。

高見馬場方限は示現流でありますから青年がダシをして幼年が一人々に此れに掛るのであります東鄉家が示現流の師範家なり、凡稚子中は此流儀でありました、かくの如く青年は幼年を監督して其の技を奬勵し、日暮の六つ時迄續けます、而して歸れの命令があると各自家に歸るのです。

此れが平生一日の課業で實に嚴重に守られて、差支或は病氣である時は必ず屆を出して座元の尼帳に支へ等と記し、又惡い事をした者は、其の星帳に「黑星」又は「半黑星」を記されます。其れは大なる不名譽であります。擊劍場にて又同樣の帳簿がありました。

又學課に就ては其の規則の外に各自讀書の先生を求めて修學するのでした。云々。

扨讀書を學ぶには丁度毎朝暗い時に出懸けたものです（但し六つの鐘がならぬと外出は出來ぬ幼年は夜間も外出が出來ぬ規則でありました）即ち六つの鐘を聞くや否や一生懸命走りて先生の門を叩く。

席書　字會と云ふものもありました云々。鄉中では重に復習をなしたものです、だから復此れ迄高見馬場方限の學舍の名々復習所と云ふのは自然のものでありませう。席書とは多くのものが集まつて席上で字を書き評點を與へらるるもので、字會は自宅にて書きたるものを持ち寄つて評點をうけ其の中の三等までをとつたものが其の字紙を取ると云ふのである（以上樺山大將講話）。共に薩藩のみならず他の藩にても行はれたやうである。

○年中行事

海江田氏の著麗城學舍の一班により稚兒及二歳を通じての年中行事を示せば次の通りである。

正　月

稚兒は破魔拋（註　丸木を輪切りしたるものを棒にて拋げ合ひ位置を奪ひ合ふもの今のベースボールに類す）となし盛に勝負を競ふ。又餅汁喰ひ廻はし即相中各家の年初座式（御儀式）ありその終りに於ては平素武士の面目を汚すべき素行良からざるものを制裁する、味噌壓胴打等行はる。

一　月

桃の節句には稚兒二歳共に山谷を跋涉して元氣を養へり。これ蓋し三月の節句の日には婦女子の

往來多くあるを以てそれを避けんが爲めなり。

二　月

端午の節句には我國何處に於ても武張りたる遊技 即勝負事をなすを常とす、殊に鄕中にては稚兒中を二つに分ち旗奪ひ又は降參云はせ等の擬戰を行ふ。其の方法頗る猛烈にして、青竹を截伐し來り、種々の旗を押し立て 敵味方各々大將を定め、盛に攻合ひ打合ひ、遂に各自組打をなして降參を曰はしむるを以て勝とす。 尙同月二十八日の曾我夜討の夕には、一同某所に集合して曾我物語を輪讀し又は傘燒を催して兄弟夜討の昔日を偲べり。

六　月

二十三日　未明より二歳は南薩加世田村日新寺（今の竹田神社にて忠良を祀る所）に詣で、午前より士踊を見、その終る頃歸路につき駈足にて十餘里を突破し夕方南林寺（市內松原神社貴久を祀る所）の六月燈の祭典に參詣するを名譽とせり。

七　月

十八日　には稚兒二歳共に島津歳久公を祀る 心岳寺（今平松神社市を去る三里磯邊にあり）に參詣 又屢々伊敷村小野樋其他海濱等に水泳に赴く、この時は三人以上同伴し一人は必ず刀衣の見張りに當り交番に游泳し、一同携へて歸宅す。 又稚兒等は此の月中殆んど毎日行はるゝ彼の勇ましき大鼓踊の見物をなすを以て無上の樂みとなせり。

八　月

十五日　望の夜には二歳監督の下には稚兒一同綱引を催し、勝負を競ふ。

九　月

十四日　島津維新公（第十七代義弘公）關原苦戰の日には稚兒二歳共に前夜の夕刻より鎧具足に身を固めて、西薩伊集院村（市を距る約五里）の妙圓寺（今の德島神社義弘を祀る所）に參詣し、その難戰の昔日を偲び義氣を養ふと共に身體を鍛へり。

十　二　月

十四日　は赤穗義士復仇の日なるを以て稚兒二歳共に夕刻より、某家屋に集まり良雄以下四十七士の英靈を祭り、義士傳の輪讀會を催して義氣を涵養し、曉天に至りて一同解散す。 同月には花山（市を離る約四里半）に木刀伐りに赴く、棒は長さ三尺五寸許りのものにて示現流の稽古に使用するものなり。

讀物　兒童讀物の選擇に就ては最近圖書館の發達につれて唱導せらるゝやうになつたが 健兒社時

代に於ては既に相當の注意が拂はれて居つた。例へば日新公のいろは歌の如き或は虎狩の巻歴代朝等がそれである。

健兒生活の長短所

當時の健兒がどんな生活をなして居つたかと云ふことは大體稚兒や二歳の行事によつて窺はれる。併しながら彼等はまた割合に嚴格な武士の家庭に生ひ立ち二歳になつては多くは藩の分務に從事してをつたのであるから割合に隙はなかつた筈である。學校と云ふ完全なものがなかつた代りに自主的な郷中の訓練があつた爲めに實力實行實學の上に於ては餘程効果があつたものと思はれる。

以上に述べたのはよい方面（少くも其の當時に於て）のみであるが悪い方面の健兒生活も少くはなかつた。彼等は二歳になれば無用の闘爭をし、また好んで夜遊びをなし酒を強飲する。飲酒（燒酒）の風は今なほ盛んであつて默々として飲み興に乘やれば「ナンコ」と稱する遊戯によつて更に燒酒の滿を引くと云ふ風があり醉へば詩を吟じ琵琶歌をうなり又激論を試みると云ふことを以て健兒の誇りとしたやうである。

服裝は兵兒歌にもある通りで甚だ素朴なる騎士の風があつた。蓋し兵兒帶といふのは彼等健兒が雜作なげに結んだ木綿の帶から來たものであらう。併しながら時代が段々新しくなつた頃には華奢柔弱の風が喪はれて來たやうであつたが之を中國の武士に比べるとなほ心強いものがあつた。彼等は奢侈の風を非常に嫌つて素衣疎食に甘んじたものである。又極めて自治獨立の氣風を養つて武士の面目と云ふことを重んじた結果、時に思はざる非人道的な行爲も許されて來た。懲罰の方法がその一例である。

家庭は餘りに武士としては貧弱ではなかつたかと思はれる。それは比較的島津藩の下には武士階級のものが多かつたから給與が手廻はりかねるのである。島津公さへも城と云ふ城をもたなかつたので他の五六萬石の大名よりも小規模な陣屋を有するに過ぎなかつたのである。

健兒社とボーイスカウト

之を比べることは既に時代に於て相異がある。然るに其の餘りに一致點が多いので實は一驚を喫せざるを得ない。

「スカウト」之を譯すれば健兒と正しく適合する。而してスカウトはどう見ても西洋流ではない東洋流である。彼等の有つ棒を見よ。之れは前にも述べた如く健兒社の二歳が持つ棒ではないか、そのまた共に自然界に親しましめる遠足や參詣展墓をなすが如きも健兒社の事等から思ひ付いたのであるまいか。パウエル將軍も自ら此の事は云つてゐるが詳細には述べて居ない。

而て健兒社に於ては規約を勵行すると云ふ點に就て努力してゐるがボーイスカウトもまた之とそ

の生命としてゐるのみでなくその規約がよく似てゐる。

更に尤も注意すべきは、その階級的訓練法であらう。少年團と稱するものに幼年團（ウルフカヴ少年團（ボーイスカウト）青年團（ローバースカウト）とあり、ボーイスカウト中に更に二級團員一級團員の別があると云ふことや稚兒を指導する二歳又は長稚兒があると云ふ點がボーイスカウトの組織と殆んど等しいのである。心理學や生理學や教育學の未だ學として渡來しなかつた時にかゝる階級的訓練法が行はれたと云ふことは特筆大書すべき事であつてまた少年團運動の爲めに萬丈の氣焔をはくものである。

スカウトが他人の爲めに美事をなすと云ふのに對して健兒社は他人の爲に迷惑になる行爲をなさぬことゝ進んで團員相互ではあるが友情の點に於て深い考慮を拂つてゐる。

又ボーイスカートが簡單なる服裝を制定して居るのに對して健兒社では既に當時にあつては最も簡單な所謂衣至骨袖至腕式の筒袖服を用ひ氣候の關係とは云へ一切足袋を用ひなかつたといふが如きは其の訓練の如何に騎士的であつたかを窺ふ事が出來る。

鹿兒島以外の健兒社と武士階級以外の少年訓練

以上は大體に於て鹿兒島城下におけるものであるが、所謂鄉に在つて其の麓をなす屯田武士の階級でも之に類したる舍の訓練があつたのである城下の樣ではなかつたが、彼等は農耕に從事しながらなほ百姓町人とは其の選を異にし高所に居り兼て有事の際の準備をして特別なる訓練が行はれたのである。學問の師匠の如きも多くは同族中の學者によつて之に當つたのであるが、之れが爲めに却つて百姓町人の子弟の師匠なるものは他國に比べてよいものがなかつたのである。これは維新後でも人材が百姓町人の間より餘りに多く出でなかつた（現在でも此の傾向がある）原因の一であらう。とはいひながら百姓町人の子弟の間でも健兒社に見習つた行事が自治的に行はれたやうである。今日に於てもなほ其の斷片を存してゐるものは各地に於ける子供連中である。併しながら其の行事は單にお題目のものでもなく又功利主義的な社會奉仕的のものでもなく主として少年の生活を充實しようとしてゐる點に於て他國の子供中や乃至は現今の青年團に優ること數等である。行事の中で今尙ほ殘つてゐるものは傘燒や綱引や破魔拋であるが、こんなものに對しても只其の缺點ばかりを指摘して一にも二にも禁止したと云ふのは寔に口惜しい次第である。

今の學舍

今鹿兒島にある學舍と稱するものは健兒社の後身であつて明治初年に出來たものである。特に征韓論事件によつて鄉中制度は漸く私學校の勢に壓せられ、續いて時代の要求と共に學舍の形式を以て生れるやうになつたのである。現在では凡ての一の舍卽ち建物を有し所謂會館中

心の團體である。其の生るゝや從來の健兒社の既に時代には伴はない事を慨して出たのであるが維新以後天下の秀才は多く東京に集まつた結果、學舍に對しても日進の趨勢に順ずることの明を缺き却つて鄉中制度時代よりも時代に不適なるものとなつた樣に思はれる。吾人は鄉中制度こそ却つて今日の青少年團よりも形式內容とも進んでゐると思ふ。學舍の振はないのは道德の模型化し、化石化し、乃至は墓標化したので其の生々發展の勢がないからである。麗城人士の一考を煩はす所以である。

現在學舍と稱するものは左の十七を數へる。

四方學舍。共立學舍。研明舍。高見學舍。沼學舍。會文舍。研忘舍。鶴出學舍。二松學舍。冷水學舍。弘友學舍。共和學舍。自彊學舍。共研舍。弘道學舍。共學舍(中村)。親學舍(西武田方限)同(田上方限)。

而して明治四十二年十月になつて遂に各學舍を聯合して互に交通親睦することとなつた。今聯合學舍の通規を揭げると次の通りである。

一、敎育勅語の御趣旨を奉體して、德性を涵養し舊來の美習を保持し名節を重んじ輕佻を戒め剛毅淳朴の氣風を發揚すべし。

一、學業を修め有爲の材をなす固より心身の健全に須つ宜しく常に力を體育に致すべし。

一、舍員は上述の目的に於て相研究砥礪し長幼敬愛して交誼を盡すべし。

私は現時の學舍の實情は詳しく知らないけれども之を色々の方面から考へて大改善を要すべきものがあると思ひ、又改善して之を存續するの價値あるものと思つてゐる。寧ろ或意味に於て鄉中の制に復するの要があらうと思ふ。而して士族の間にのみ之を存するのでなくて一日も早く極めてデモクラチツクなものにしなければなるまいと思ふ。人あり(而も鹿兒島藩出身の士なり)曰く「鹿兒島の文化は士族によつて培はれ、また士族によつて枯されようとしてゐる」と如何にも此の言の眞實なるを首肯するに足るものがある。士族出身の中等學生が士族會を組織して肩で風を切るやうな時代では維新當時に於けるが如き俊秀の國士を出すことは難からう。燦爛たる花は開いた。されど生花のやうであつたかも知らぬ。根柢を有しないのを恨とする。

第十八章　明治時代の靑年團體

明治時代に入つて暫く尙若運中なるものが存在して居つた事は皆人の知る所である。所が明治五

年學制が布かれて學校教育の年々歳々進むと共に青年の間には先づ學校團に於て體訓練を受け、更に進んでは學校教育を卒へたる後に於ても彼等相互の間に同窓會とか、校友會なるもの組織されて居つたのである。尤も校友會や同窓會などの歴史を調べて見れば、會として成立せられたのは餘り古いものではなくて、明治二十二年前後から現はれて來た樣であつて、餘りそれ以前には遡ると云ふ事が能きないが、會の成立せると否とは問はず、同窓同學の人の間には期せずして相互に一つの連繫が生じ、事毎に各種の仕事が彼等同窓者間の系統によつて行はれたのである。けれども、これを一般に見る時は未だその發達は遲々たるものであつて、若連中の勢力は尙明治三十年頃まで及んで居たのである。その前後には若連中と稱するよりも、その當時の政治的團體乃至は宗教的團體等が頻に何々會と稱せらるゝやうに、それ等と並んで何々青年會と云ふ名稱に若連中の變つたものも尠くない。さうして、その仕事は時代と共に多少進歩を致したのであるが、矢張修養と云ふ事よりも事業の方面に重きを置いたのである。斯くして日清、日露の兩役を經て我が國の地位が進み、國民の考へも向上して來て、教育の方も著るしく盛んになつて來た結果として、始めてこれ等青年に對する教育なるものゝ忽にすることの能きないと云ふ點に多くの識者が着眼するやうになり明治時代の終りには所在に夜學校とか乃至は青年會等が相當發達して來たのである、さうしてその時代に於ては青年會と稱するものゝ中には尙相當年齢の長じたるものをも含んで、三十歳三十五歳乃至は四十歳と云ふものも尠くなかつた。寧ろ今日の如く十二歳から十五六歳の者は包含されてゐなかつた。さう云ふ點から見ても亦單に一種の事業の團體に過ぎなかつたのである。然し必ずしも從來の如き若連中と云ふ普遍的のものでなくして希望者のみを集めて出來たものも尠くない。それは寧ろ今日に於ても幾多の團體が尙青年會乃至は青年團と稱しながら全然青年には關係の少い老壯者を以て組織せられ居る原因であらうと思はれる。

第十九章　現今の青年團體

何と云つても青年團體の進歩したのは大正時代に入つてからの事である。即ち大正四年に於て內務、文部の兩省が訓令を發して、青年團の發達は國運の伸長と地方開發に影響する事が甚大であると云ふ斷案を下し、健全なる國民善良なる公民たるの素質を養ふと云ふ事を目的とし、而して團體員としては、忠孝の本義を體し品性の向上を計り體力を增進する、實際生活に適切なる所の智能を研かしめると云ふ樣に、一般教育の目的や方法と殆んど變らない所の內容を示し、更に兩次官から

青年團體の設置標準をも示したのである。これが今日の青年團の基本となつて來たのであるが、次で歐洲大戰を經たその經驗に徴して大正七年には更に兩省から訓令を發して各方面の修養を瞭かにしたのである。次いで大正九年には平和の大詔の煥發せられたる時機に於て、青年團體をして自主自治的の團體たらしめるために、團體の事を總ぶるものは、これを團體員の中より推擧せしめると云ふことを本則とせよとして、更に團員の年齢は從來二十歳を以て常例としたものを二十五歳に進めても宜ろしいと云ふ樣に通牒を發したのである。この訓令なり通牒なりの變化なるものは、能く世の文化發達の推移を語るものであつて、官民共に力を合はせて青年團體の設置奬勵に努めた結果非常なる實績を現はして來たのである。殊にそれが戰時中に於て相當の働きをなして來たのであるが、これを自主自治的の團體たらしめるには、二十歳を限りとしては餘りに力が强くない、從つてその事業の成績も擧がらないと云ふ樣な點から二十五歳まで進めて來たのである。所が大正十年前後から今日に至る青年團體の發達の跡を見れば、大多數のものは可なり順調なる發達を遂げて團體本來の目的を達したものと云へるが、中には團體が年長者本位となつて今迄の指導者や或は援助者の命に從はないのは勿論、善意の忠言を受くる事をも潔しとしない。而して勢を駈つて或は地方の政治問題に容喙したり或は寄附を强要したりするものも尠くない。さうして、徒に時代思潮に狂ぶれて空虛なる青年神聖の說を吐いたりするものも尠くない。尙これよりも善い方であるが、團體の形式的事業のみに沒頭してその成績を擧げこれを世間に誇ると云ふ事のみに齷齪して居るものも尠くない。或は麗々しく社會奉仕と稱するものも、その實功利的のものであつたり、或は名を修養にかこ付けて彼等の家業を顧みなかつたり、社會に於ける恩義なり利益を無視したりする樣な行動を成し、さうしてしんみりした修養と云ふ點に就ては殆んど何等の考慮をも拂はず、彼等は自治と云ふ事を叫ぶが、眞の自治ではなくして團體員中の二三の野心家や橫惡なる分子が團員を壓迫すると云ふ例も尠くない。何れの點より見るも純然たる修養團體の面目として殆んど見る事の能きないものも尠くないのである。大多數の團體は尙これ程の色彩を帶ばぬものも尠くない。これに反して其不眞面目なる反動よりして種々な修養團體なるものが生れて來たのである。けれどもそれ等の修養團體なるものゝ多くは單なる感情の陶冶を目的として、所謂安つぽき感激の押賣をし或は偏頗なる鍛錬をなし、人と相容れざる獨自的の生活をしようと云ふ樣な時代に伴はないものが多いのである。或意味に於て大正の今日に於ける青年團と云ふものも歸趣に迷つて居るものと見なければならない。而して又一方にはこれ等の青年團體を利用し甚しきは惡用せんとするものも尠くない。その一つは政黨者流である。雷同性の强い彼等青年の感激心につけ入つて私慾を滿足せんとする僞國

士もある。または彼等の無智につけ入つて雜誌を押賣せんとするものもある。斯の如く現今の青年團が著しくその歸趨に迷つて居る所以のものは何處にありやと云ふに、これは主として年齡問題から來るのであらうと思ふ。その點は第五編に於て述ぶる所であるが、純然たる修養團體たらしむる必要上から云へば、吾人は前に述べた如く、青年團體はこれを生理的並に心理的發達の過程に應じて十五六歳迄で一期として二十歳以上は一般的結社と見做し成人として取扱ふ方がよいと思ふ。それ以上のものは軍隊の教育を受けるものが多い。然らざるものも成年者として法律上にも道德上にも亦社會からも取扱はれるのである。彼等をして美名の下に隱れしめ而して法律や道德や或は社會の方面から見て修養時代にあるものと共に同樣な事を行はしめると云ふことはそれ自身大なる誤であると信ずる。これは余一個の考へであつて廣く世間の中には、それに贊成しないものも少くないと信ずるが、尠くとも近き將來に於てこの事が實現されるであらう。

第二十章　國家と青少年團

國家の發展はもとより現今第一線に起てる成人の双肩に在ることは云ふまでもないが、これ等の

い人は多くは實際的に社會の生活をし又自己の爲にも自己の利害をも打算しなければならぬ境遇に立つて居る爲に現今の國家を扶持する所の力はあるが、國家將來の運命を支配する力は少い。即ち或意味に於ては、單に國家を扶持するのであつて、國家を發展せしむるものではない。而して現在の青少年は尙國家に對して大なる貢献をなし得ると思ふ、彼等が日常培はれて居る教養の程度は將來國家の進運の上には大なる影響を與ふ可きものである。將來と云つて左まで遠いものでなく、五年、十年の後に刻々として迫まつて來るのである。それは青年團にしても發達が大正時代に入つて漸く勢ひを得たのである、がしかも、兎も角も今日では國家の一大修養機關として誰しも見遁がす可からざる所の團體となり又國家有事の秋に際してこれを除外しては何事も行ふ事の能きぬといふ迄になつたのである。これを功利的に見るも今回の大震災當時に於ては地の青年團が彼等の勞力を奉仕し、彼等の團體の力によつて或は物品の蒐集に或は運輸に或は警戒に當り、或は避難者の救護に努めたと云ふ例も甚だ尠くないのである。又震災地に於ても先づ起つたものは青年團と軍人會であつた。尤も東京附近の如きは青年團の發達も餘り古い歴史を有しないでその事業の多くは形式的であつた。併しながら災害當時に團體的活動をするものが比較的少い爲に一時自警團なるものが組織されたとはいへ、その中で最も健全なる而も機敏嚴肅なる活動をしたのは青年團と在鄕軍人であつ

たのである。この訓練を經ないこれ等以外の者の多くは、各種の方面に於て自警團の名をして戰慄せしめる樣なものとしたのである。若しも玆に地方に於ける青年團の程度まで發達したる團體が存在して居つて、その青年團をして自警の任務を當らしめたならば斯かる人心の不安や或は國辱的行動が行はれなかつたらうと思はれる。それは偶々成績の善い青年等や或は少年團が一糸紊れない行動を成して人心の不安なる間に起つて人情の美を現はしたる例が尠くない事によつても解る。又震災時に於いて全國各地青年團が逸早く勞力奉仕のために東京に集まつて、寢食を忘れ何等の報酬をも受けないで跡片付けの爲に働いて居つた一事を見ても解る。

これは非常時の場合に於ける國家と青年團との關係であつて、或意味に於ては功利的に見た事であるが、吾人はその功利的に見る以上には更に進んで青年團體の使命は各人がこの非常時に於て自己の處置を誤たず。進んで老幼婦女を助け、或は社會公共の爲に秩序を保ち或は健全なる思想を皷吹すると云ふ方面に現れて來るのである。非常變災時ばかりでなく國家を構成する國民の素質なるものは國家進運の上に大なる影響を與ふるものである。國民の教養と云ふ事はもとより學校教育の功に俟つ可きものが尠くないが、これと同時にまた彼等青少年團體をして自らその教養の程度を高めしめ、更に進んで社會民衆に對してその教養を高めしむる樣に努めねばならぬ。而して高き教養を積まれたるものが國家の一分子として社會的に活動なし確固たる信念のもとに立つて國家社會の進運に貢獻せんとする心の聯盟が成立して行くと云ふ事は甚だ望ましいことであつて 翻て國家をして有機的發達を成さしむる所以である。我が國に於ては道德の形式のみが發達すると云ふ例が尠くない、所謂御多分に洩れずと云ふ事を善い方面にも惡い方面にもこれを見る事が能きる。我青少年團體の發達もこれを海外諸邦に較べて見れば非常なる長足の進歩を示して居るのである。けれども その內容の充實と云ふ點に就ては遠く海外諸國に及ばない。併しながら形式の發達すると云ふ事は 翻て內容のこれに伴ふと云ふ前提となるものであるが、現今の青少年團の發達につけ入つて更にその團體事業の內容を充實せしめると云ふ事を心掛ける事は國家をして一段の發達を遂げしむる所以でなくてはならぬ。宜なる哉我が國に於ては皇室に置かせられても、青少年團の訓練に對して深き御同情を垂れさせられて、大正十年には　皇太子殿下自ら全國の青年團員を霞ケ關の離宮に伺候せしめ、優渥なる御令旨を下し給ひ「國運の進展は青年の修養に俟つ」と云ふ一大鐵案を下され給ふたのである。而して又現今にあつては皇族の御方々にして青年團や或は少年團を以て公式の團體として御認めになつて、常に難有き御諚を賜はり或はその團體事業の激勵をなされたと云ふ例が少くない。我々はこの御高德に感激するの外はないのである。

第四編　青少年團の目的

第二十一章　青少年團の發達より見たる目的

凡そ如何なる事業を行ふにしても、その當初に於て目的を確立しなかつたならば、遂には邪道に陷り思はざる結果を招來するものである。尤も目的と稱しても單なる考へのものでなくつて、それに達し得る所の順序と方法を定めたものでなくてはならぬ。青少年團に在つてもまたその通りである。併しながらこれ等の發達の歴史より考へて見るとみな一定の目的を有して居つたのではなくして段々と時代の推移につれて新しい目的や方法が附加されたのである。即ち若連中の時代のものは要するに鄕村の公役を果たす上の便宜より生れたものであつたが、その外に彼等の交友娯樂の便宜を與へたことも少くなかつた。それが段々發達して來て明治三十年以後の所謂青年會時代となつても尙公役本位事業本位たるを出でなかつたのである。即ち彼等は單に新しき名稱の下に何々青年會と云ふ旗印を揭げたが、その內容は若連中の時代と大なる差異はなかつた。さうして一方には功利的に見て各種の公益事業や生產事業を遂行せしめんとしたのである。町村に於ける道路の掃除はもとより或は納稅の補助によつて公德心を養成するとか、或は時間の勵行であるとか、或は祭禮の手傳をなさしむるが如きはもとよりであつて、なほ青年會として自ら共同勞作の收入を以て其の經費に充當せしめるばかりでなく、それによつて町村の產業の發達を計らんとしたり、更に極端なる場合に於ては全く青年會に對して一つの營利團體の如き事業をも强ひたのである。これ等の事業をなさしめることは善であるとか惡であるとか云ふ點より考ふ可きものでなくして、青少年團の本來の目的を達成せしめる上に於てそれが何よりもまづ第一に必要なることであるが、乃至は第二義的のものであるかと云ふことを考慮しなければならない。と云ふ聲が起ると同時に行はれたものは青年團であつて、青年をして善良なる國民、健全なる公民たらしめようと云ふ目的を以て起り、將來の國民として或は將來の公民としての素質を養はしめると云ふ事に目的を置いたのである。それを修養の標準としたものであつたが、矢張これ等の目的も遂には一種の事業と見做さるゝことゝなつて善良なる公民としての訓練は或は町村自治の練習を課するとか、或は選擧の法も敎へるとか或は町村の自治に對する手助けを成さしめるとか、或は法政經濟の知識を與へると云ふ風に考へ來て、それが多くは事業化して來た。又將來健全なる國民公民と云ふ風に考へ、徒らに將來に目的を置いた

結果として青少年團は餘程空想な團體たるやうになつて來て、著しく形式を重んずると云ふ風になつて來たのである。所が世界大戰より受けたる教訓として有爲優秀なる個人を作ると云ふ事、即ち個性の充實發展と云ふ事が大切であると云ふ樣に考へられた結果として、青年團の訓練も二三年以來多少其の目的を變更する機運に向つた樣である。即ち團員をして各自の修養によつて目覺めしめる、自己を顧み自己を開拓しなければならぬと云ふ樣な考へが進んで來たのである。この事に就ては以下の章に於て詳しく述べるのであらう。

第二十二章　現今青年團の缺陷

前章に於ても略述べた所であるが、現今の青年團は幾多の長所を有すると同時に又幾多の缺陷をも有して居る。今その二三を說明せんとする。

御題目主義　御題目主義とは徒らに多數の題目を並列してその事業の成績を擧げると云ふよりも寧ろ新らしき題目を選び、その事業の多からんことを誇る所の主義である。これは青少年團ばかりではなく、凡ての事業の上に現はれたことである。

如何に現在の青年團が御題目に捉はれて居るかと云ふことは、その指導者や乃至は團員が模範青年團を視察したり乃至はその青年團の研究をなさんとする所の態度を見るも明らかである。彼等は自己の團に於て一旦これを行なつたものは再びこれを繰返へすと云ふことを潔しとしない。更に新しきものを選んで年中行事の如くこれを並列する事等を以て能事畢れりとして居る。或は指導標の建築法に就て考へて見るも明かである。先輩の建てた石の指導標の前に薄ツ平らなる三角の板を以てこれを立てゝ居る。さうしてその數の多うからん事を願つて居る。或は特に敬老會と云ふものを行ふが、その敬老會は一年中に於て單に數日間の會合に過ぎない。而して年中老者に對する所の奉仕と云ふ事に就ては何等の考へも浮んでない。曾て余は某縣の青年團に臨んで一青年の語る所を聞いた。それは我が青年團の缺陷と稱するのは題目であつたが、彼の云ふ所は他の模範青年團と比較して自己の青年團が如何なる精神に於て劣つて居つたと云ふのでなくして、如何なる仕事が成されて居ないかと云ふ比較に止まつたのである。御題目主義は吾人の排斥する所でなくてはならない。尤も青年團は普遍的修養團體であるが故に各種の事業を行ふと云ふことは必要な事であるが、寧ろその事業は修養の目的に供さる可きものであるから徒らに徹底せざる多數の事業を顧みるよりも、寧ろ精練せる事業を中心として彼等の修養に資さす可きである。修養は各種の場合を練習すると云

ふよりも、一の精神を養ひ一の氣力を養つて、時と場處とに應じたる所の臨機の處置を取る所の原動力を注意するにある。

功利主義　功利主義は必ずしも全然否定す可きものではない。我々が人類生活を營み、或は文明生活を成して行く上に於ては無駄な事があつてはならない、又能率の點も考へなければならぬから功利の目的に適はなければならぬ事は云ふまでもない。併しながら修養の單なる目的の爲の青少年團にあつては出來得る限りこれを功利的に見ない方が宜しいのである。然るに現在の狀態を見ると凡ての點は打算的から生れて行つて居るから十分の効績を擧ぐる事のみに焦慮して居て、一つも本質に觸れて居ない。或は青年團に於ける體育上の問題に就いて考へて見ても、彼等が教練を行ふと云ふ事は直ちに以て兵役の爲の目的であると稱し、或は彼等が神社に參拜をすることは直ちに以て敬神尊祖の念を養ふが如く考へ簡單なる行事もこれは社會の爲であると、一々その効果を豫期して居るかの如き傾がある。而して彼等は眞實國家や社會やさうして人情等に觸るゝ事をしない。徒に美名の下に隱れて一事を行へば、その事が直ちに偉大なる貢獻を成したるかの如き心持ちを有するものが尠くないのであるから、余は或る意味に於て國家主義に對しても亦これを功利的に見るを欲しない。青年は青年として自己の成す可き事を單に成し度いとの自覺を有すればそれにで足りるのであつて、それが如何なる効果を齎らす可きかに頭を惱ましむる事は餘りに青年の純眞さを傷付くるものと信ずるのである。然るに世の指導者と稱する者の多くはこの間に於ける何等の眞理をも辨へないで殆んど側より聞いて居れば笑止に堪へない樣な安つぽい功利主義を以て青年を激勵せんとするものである。

感激主義　前編にも述べた所であるが、近時生れた青年指導の一派と見做す可きものに感激主義の者が尠くない。彼等の論ずる所は如何にも御無理御尤であつて、恰も明治初年に生れ返つたかの如き考へを以て青年を指導せんとして居るものである。もとより國家の危急存亡の秋と云ふものが何時出で來るかも解らぬのであつて、例へば今回關東に於ける大震災の如きものはその一つではあるが、斯かる際に於て最も役立つ可きものは決して慷慨悲憤の感激的の人ではなく、又それ等の間に行はれた行爲でもなくつて、理智に眼醒めたる平靜な人々の團體の行動によつて能くその危急を救ひ得るものである。今回に於ても最も要求す可きものは國民の自制心であつて、決して慷慨悲憤の偏狹なる所謂愛國心ではない。紳士としての教養が如何なる場合に於ても望ましい事であつて現今の青少年の教養に於てこれを適用しなければならない。現今青年團の缺陷たるその組織上の事や事業經營上の事に就ては更に篇を改めて述べる事とする。

第二十三章　新時代の青年團

青少年團は如何なる目的を以て生まる可きか

新時代の青年團は如何なる目的を有しなければならぬかと云ふことは前二章に於て略想像さるゝ所である。固より從來發達せる所の健全なる國民、善良なる公民たる素養を得せしめるものであるとか、或は忠孝の本義を體せしめるとか、質實剛健の氣風を養つて行くとか、或は身體上の鍛練を成さと云ふが如き事に就ては誰しも異議の無いのは勿論で、また實際教養の點に當つては左程の權威をも有しないものであるから、決して吾人はこの國家主義や公民主義を全然否定すると云ふのではなくて寧ろこれは當然の事柄に過ぎないと信ずる。即ち教育上に於ける目的乃至は人生の目的と見做す可きものであつて、それ等は團體指導の目的としては餘りに迂遠なるものと見なければならない。吾人は今新時代に生る可き青年團として、青年心理の上に立脚し、時代潮の上に考へて最も必要なりと信ずる條項の二三を述べるであらう。

青年生活の充實

目的を定むるの必要なることは云ふまでもない所であるが、動もすればその目的が現實の生活の上に強みを有しないものが尠くない。また或は動もすれば功利的に馳せてその目的を達する手段や方法に沒頭すると云ふ變則な狀態を現すことが少くない。東洋流に云へば青年は志を立て成功を期しなければならぬと云つて居るが、その志たるや多くは將來に屬して居つて、さうして彼等青少年をして徒らに現實の生活を空費せしめる。しかも所謂光陰は矢の如くであつて過ぎたる事を閑みし來れば、その目的の半ばにも達して居ないと歎じたものも少くない。斯くの如きは餘程現實生活に重きを置かなかつたと云ふ點に歸着するのである。我々は青少年を指導する上に於て、現實生活の充實を必要と認めるのである。即はち現實生活の充實とは、先づその自己の生活の價値を認識する。而して、その生活の價値を充實すると云ふにあるのである。その現實の生活の充實が時々刻々展開して、遂に顧つて見れば大なる所謂成功を成し得るのであつて、人生は要するに現在の展開に過ぎないのである。例へば高い山に登るに當つても常に山の上のみを見てさうして徒らに焦慮して居れば、その行程には焦燥疲勞を覺えるに過ぎない。力が足らないので、足を顧へして麓を下ると云ふ樣なものも尠なくない。併しながら一歩一歩と自己の足痕に强い印象を遺して、而して頂上をも見ないで只自己はその一歩一歩の間にあると云ふ考で登つて行つて居れば何時の間にかその頂上に達して展開せる大自然を足下に見る事が出來るのである。そは人生も又斯の如くであつて時々刻々として展開す可きものである。然るを何んぞや今日の團體指導に在つては徒ら

に將來に目的を置いて、徒らにその美名に隱れてさうして彼等をして奔走苦勞せしめて居る。彼等は現在を知らないで、徒らに國家や社會を論じ、自分を一人前の紳士の如く考へて、その國政を調理せる大臣元老や乃至三軍を叱咤する將軍の地位にでも昇つたかの如き考へを持つて居る。從つてその日々の修養と云ふものに就ては何等の考へを及ぼさないものが尠くないのである。

それ故に吾人は青年は青年期の生活を充實して、青年獨特の立場に於て行動し、さうして餘力があれば社會や國家の爲に盡すと云ふ考へを養はしめなければならない。國家や社會に盡すと云ふ事は直接國家や社會の爲に何等かの事を成すと云ふ以外に、自己の現在の貢献が直ちに社會や國家の爲にもなると云ふ事をも主としなければならぬと云ふ考へを彼等に持たしめると云ふ事が必要であらうと思ふ。

本能の理性化　我が國にあつては、子供を子供らしく育てると云ふ事よりも、子供をして大人らしくせしめると云ふ事を以て、教育の上にもまた道德の上にも必要なるものとして來たかの如き傾があつた。それ故に子供をして大人びた行爲をさせたり或は鹿爪らしいものにしたり乃至は大人も及ばぬ樣な献身的の事業を成したとか云ふ事を以て非常なる誇りとなし、それを子供の模範としたかの如き傾きがあつたのである。さうして彼等の本能を醇化せしむるとか本能を顧みると云ふ事はなかつたのである。併しながら前にも述べた如く子供は子供である。少年は少年である。青年は青年であつて皆決して成人ではない。成人の心理や乃至その生活を以てこれ等のものに適用する譯には行かない。大人と雖尙又本能的の生活と云ふものが無くてはならないのである。然るに子供に對してさへこの本能生活に就て何等の考へを及ぼさなかつたと云ふ事は一大過誤であつて、さう云ふ無理なる教育の結果は遂には大人の時代に至つても尙、本能が醇化されたと云ふ事が出來ないのである。

子供はその特性に於て遊戯の本能を有すると云ふ事は勿論であつて、それは、大人と比較して著しい事實である。それ故に殊に少年や少女の教育の上に於てはこの遊戯の本能を利用してその間に理性的陶冶をして行かなければならないのである。遊戯を度外視して直ちに理性的の陶冶に移らうとすると云ふ事は無理なる企であつて、それは恰も車輪の齒車をもぎ取つてこれを廻轉せしめんとすると同樣の理である。卽ち中心の車軸と廻はる可き所の車輪とは別々に動いて居るか、乃至は兩者が殆んど無關係である。縱しやそれが廻はつて居るとしても少年の心と云ふものと、それから教育者の心との間には何等の連鎖もないか、乃至は少年は二重の心理的境遇の下に置かれてゐるのである。少年團の教育はこの點に着眼して總ての行爲を遊戯や作業に仕組んでさうして彼等の興味を利用せ

んと試みて居る事は誠に左もあるべきであるが、我が國從來の青年團の訓練の如きものはその體裁より見れば誠に不完全なる所がないやうであるが、實はこの心理的課程を誤まつて居るものであると云ふことを忘れてはならぬ。

有指導青年團はこれを自治的の團體たらしめると云ふ事は勿論の事であるが、その爲に指導者を要しないといふ譯ではない。然りと雖もその指導者たるや、從來の如き內容を有するものではなく能く青少年の心理を了解して而してその生活の實相に觸れて、自から青少年の境遇に振り返つて行つて事を共にすると云ふ事が出來るものでなくてはならない。而してその指導に當つては一定の方案があつて、彼等自身をして自ら開拓せしむる一つの努力に過ぎないと云ふ考へを持たなければならない。指導者と云へば直ちに教師が教壇上に立つて事を教へる、或は號令を下し或は訓戒をすると云ふ樣なものと考へて居るのは大なる過ちであつて、寧ろ事を共にして知らず識らずの間に適切なる指導を與へて行くと云ふものでなければならない。その爲には全く從來の指導の方法たるものを改善して而して一定の教範によつて彼等を親切丁寧に導かなければならぬものである。その意味に於て今後と雖も尙ほ青少年團の爲に指導者の必要なる事は勿論である。而かもその指導者の一人が能く數十數百のものを導くと云ふものではなくて、團體指導にあつては極く少數の團員を導くものでなければならない。その意味に於て指導者はまた團員の中より出づるものがあり、更にその團體訓練を經たるものがあり、その上に學校教育者は勿論その他篤志者等がこれに當ることにしなければならぬ。而して飽くまで劃一的の指導でなくつて個人的な指導を與へられなければならぬ。

第五編　青少年團體の組織

第二十四章　團員の年齢範圍

從來青年團の團員の年齢は時代と共に變化して來た。即ち若運中時代にあつては十五六歳より二十五六歳の間に於て定められたものであるが、青年會となり、更らに内務、文部兩省の訓令に基いて年齢の範圍は十二歳より二十歳迄となつたのである。さうして大正四年より數年の間はこの方針で進んで來たのであつたが、段々青年團の必要なる事が世間に認められ、彌が上にも彼等をして社會的に活動せしめんとする慾望から遂に其年齢では滿足する事が出來なくつて、大正九年に於ては團員の年齢を二十五歳迄延長するは別に妨げないといふ通牒を發したが、その實二十五歳迄を普通の團員として取扱はしむると云ふ趣旨にあつた。併しながらこは青年團の發達の初歩に於て起り來つた所の現象であつて、今や漸くその目的を達成する事の出來ない樣な各種の事情が起つて來たと云ふことは既に述べた通りである。

最低年齢

を滿十二歳以上と爲したる理由は、義務教育は六箇年であつて、滿十二歳を以て完了するのが普通であるとせらるゝ事から來たのである。何んとなれば生理的や並に心理的の發達の上から云へば、滿十二歳を以て最低年齢とすると云ふ事は何等の理由を有しない。寧ろ十一歳を以て區別する事が必要である。併しながら十一歳とすれば、學校兒童にあつては尋常六學年乃至は遲いものにあつては尋常五學年に相當するものがあるが故に、學校教育との交錯する事を恐れて斯く定めたのである。而して又十二歳から十五六歳の子供は從來の如き意義に於ける青年團であれば、實際上に於て多くの期待を成す譯には行かないのであつて、殆んど青年團としては邪魔物扱ひにされて居つたのである。その實十二歳から十五六歳のものは青年團員と稱しても僅に其の席末を濟すに止まつて、多くの事業なり施設なりは彼等は度外視して行はれたのであつて、その意義は論ずるの價値を有しなかつたのである。併しながら吾人は學校教育以外に尙少年の團體組織の必要なるを知るが故に、寧ろ生理的並に心理的に基礎を置いたる十一歳を以て區切とすると云ふ事が必要であらうと思ふ。或は年齢によつてこれを扱ふ事は困難であると云ふ場合にあつては、尋常五六年生を以てその團員の最低年齢とすることが必要であると思ふ。斯かる點に既に目醒めた所の青年團にありては尋常五六年時代から準備的訓練をなすと云ふ事を忘らない例が尠くない。

最高年齢　二十五歳を以て最高年齢とすると云ふ事は或意味に於ては成人の年齢と云ふ事を考ふれば理由がないではないが、前に屢々述べたる如く純修養團體たらしむる上より云へば、滿十八歳乃至十九歳以上のものはこれを團體より除外して別の團體たらしむる必要があると思ふのである。それ故に吾人は理論上よりは最高年齢を滿十九歳とするが、我が國の法律や制度によつて兵役年齢と云ふ事を考へ、或は丁年說から云へば滿二十歳を以て限りとすると云ふ事には別に異論は無いのである。而してそれ以上の者は團員とするかせないかと云ふに、それは特別團員或は贊助員たらしめ或は指導者たらしめると云ふ意義に於て取扱へば宜しいのであつて、正團員としては以上の年齢を以て定むるのは至當と認める。

前にも述べた如く團員の年齢は滿十一歳から十九歳乃至二十歳を以て限定し、その間に於て滿十六歳を以て二個に區分して、前者を少年團と稱し、後者を青年團と稱するのが最も穩當なる所の說であらうと思ふ。

尤も團員の年齢は理論上以上の如く定めると云つても、極く少數の團員たる可きものを有しない所にあつては、或場合に於ては二十歳以上の者をもこれに加へ、或は土地の狀況によつて山間僻陬の地や漁村等の地であつてはこれ以上に年齢を定むるも異議はない。併しながらその敎育並に訓練の力法は自ら異ならざるを得ないのである。これは後に述べる事とする。

現在の狀態　現今の狀態にあつては、內務、文部兩省より發したる大正九年の訓令並に通牒によつて年齢範圍は二十五歳を以て限りとするものが最も多いのである。併しながらその實、最高年齢を三十五歳に延長して居る者も尠くない。又最低年齢を十五歳に限れるものも少くない。又最低年齢を十二歳と成すものにあつてもその實これ等は全く除外して十五歳を限りとして居るものも同樣である。茲に於て吾人は最低年齢に就ては前に述べた通りであるが、この最高年齢に就ては前の說を力說せざるを得ない。三十五歳乃至は極端なる場合には四十歳と云ふ年齢を最高年齢とする場合にあつては、多くはその事業が有志者とか乃至は一部の智識階級とかある場合には野心家の手に委ねられて、徒らに形式に馳せ、徒らに社會事業に沒頭して眞に彼等の修養なるものに就ては顧みられないものが尠くないのである。これを海外諸國に於ける團體に見るも斯かる無謀なる組織を有するものは殆んどないのである。又我が國の古い時代に於ける健兒の社の如きものを見るに、これ等の團員なるものはその入團とか退團とかに際して嚴密なる年齢の制度があり其の入退團の方式にも嚴肅なものがあつたのである。一つの團體事業に對して多數の者が援助するといふ考へを起こす事は無論必要な事であるが徒らにこれに容喙し或は後援を名として制擊を加ふると云ふ事は甚だ忌む可

き事であつて、一定の年齢に達したるものは潔よくその團より退いて、而して善意の後援を與ふる外は未練がましくこれに關係を爲ないのが團體をして生氣あらしむる所以である。

第二十五章　幹　部

青年團體の幹部は矢張歴史的に變化した。最初は全く團員以外の篤志者或は學校長又は町村長でが之に當つたものである。然るに最近團員の年齢が高まつたと同時にこれ等の者が段々會員の手、乃至會員出身の篤志家の手に移る樣になつて來たのである。これを數字的に見るも大正五年にあつては合計二萬三千〇一の團體の中その團長の種別は左記の通りであつた。

郡市長、町村長	四、八〇一
學校長及教員	六、一七一
地方名望家	六、七九八
會　員	一、四七一
其の他	三、〇五三

缺　員　五七

不　明　二〇〇

然るに最近の調査には纏まつたものはないが、各府縣の狀況に徴して見ると最も多いのは小學校長及教員で次は篤志家であり次は團員である。篤志家の中では從來の如き單に地方名望家と云ふ樣な人よりも漸く團體出身の所謂篤志家が多い樣になつた。

幹部組織が漸く自治的になつて來て、團員から選ばれると云ふことは團體本來の目的であるが、茲に指導者なるものと幹部なるものとの區別をなす必要があらうと思ふ。

指導者と幹部　從來は團體の指導者なるものと幹部なるものとを混同した傾があつた。併しながら少くも團體訓練を施す上に於てはこれを區別する必要がある。學校教育にあつては學校教育の幹部とも稱す可きものと、指導者と稱す可きものは共に學校長及び教員であるが、尙眞の訓練を施さんとする場合にあつては出來得る限り指導又は輔導をなして自治的訓練を與へなければならぬ。即ち級には級長があり或は各種の役員がある。而して學校の教育方針と伴なつて彼等の各種の行事なるものが出來得る限り自治的に行はれると云ふことを望むのである。況んや團體にありては常に指導者がこれを學校教育に於けるが如く教師の地位と同樣に立つて彼等を監督し教授をすると云ふ事